

# 敵討札所の靈驗

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫



一席申し上げます、是は寛政十一年に、深川元町猿子橋ふかがわもとまち さるこばし  
 際で、巡礼が仇を討ちましたお話で、年十八になります織弱い巡ぎわ あた  
 礼の娘が、立派な侍を打留めます。その助太刀は左官の才取うちと さいとり  
 でございますが、年配のお方にお話の筋を承わりましたのを、そ  
 のまゝ綴りましたながものがたり長物語ながものごとでございます。元榊原様の御家さかきばら  
 来みずしまたいちに水司又市と申す者がございまして、越後高田のお国では鬼お  
にくみ組にくみと申しまして、お役は下等でありますが手者の多いお組でござ  
 います。この水司又市は十三歳の折両親に別れ、お国詰くにづめにな

り、越後の高田で文武の道に心掛けまして、二十五の時江戸詰を仰付けられましたので、とんと江戸表の様子を心得ませんので、江戸珍らしいから諸方を見物致して居りましたが、ちようど紅葉時分おうじ たき がわで、王子の滝たきの川へ往いつて瓢箪ふくべの酒を飲干して、紅葉を見に行ゆく者は、紅葉の枝へ瓢箪を附けて是を担かつぎ、形なりは黒木綿の紋付に小倉の襠まちだか高袴かばかまを穿はいて、小長こながい大小おなびに下駄穿くだきでがらくやうて来まして、ちようど根津権現ねづこんげんへ参詣して、惣門そうもん内うちを抜けて参りましたが、只今でも全盛でございしますが、昔から彼の廓あくるわは度々たびたび潰つぶれましては又再さい願がんをして又立たつたと申ましますが、其の頃贅ぜい沢たくな女じよ郎らうがございまして、吉原の真似まねをして惣門内はちもんで八文字じで道中みちなしたなどと、天明の頃はだいふ大分盛たいふんだつたと云うお話を

聞きました。彼方あちら此方こちらを見ながら水司又市がぶらりくと通掛り  
 ますると、茶屋から出ましたのは娼妓しょうぎでございましょう、大おおし  
まだ島田はがったり横に曲りまして、露の垂れるような薄色の笄こうがいの  
 小長いのを挿さし、鬢びんのほつれ毛が顔へ懸りまして、少し微醉ほろえいで  
 白粉おしろい気のある処ところへほつと桜色になりましたのは、別べつして美しい  
 ものでございませう。緋やまの山ま繭まゆの胴どう拔ぬの上に藤色の紋附すその裾すそ模  
 様の部屋ぎ著むら紫さ繻き子じの半襟はんえりを重ねまして、燃えるような長な  
がしゅばん襦あ袢らを現あらわに出して、若い衆しゅに手を引かれて向うへ行ゆきます姿  
 を、又市はひと目見ひますと、二十五で血氣ちけきでございませうから、余  
 念しぼもなく暫らく見送みつて居ゐりましたが、  
 又「どうも実にせんけん婢けん娟よう窈ちよう窕たうたる美人びじんだな、どうも盛もんなる所美

人ありと云うが、実にないな、彼のくらしいな婦人は二人とは有るまい、どうもその躑よろけながら赤い顔をして行く有ゆ様はどうも耐たまらぬな、どうも実にはア美しい」

と思つて佇たづんで居りますと、後うしろから女郎屋じよろやの若衆わかいしゆが、

若「えへ……」

又「何なんだい後うしろからげらく笑つて」

若「如何いかゞ様でございます、お馴染なじみもございませうが、えへ……

……外ほか様さまからお尻の出ないようにお話を致しましょう、えへ……

お馴染なじみもございませうがお手軽うか様に一晩お浮うかれは如何で、へい  
くく」

又「何だい貴公は」

若「えへ……御冗談ばかり、遊女屋の若わか者かいもので、どうも誠にはやへい〜」

又「遊女屋の若者、成程これは何だね大分左右に遊女屋が見えるが、全盛の所は承知して居いるが、貴公に聞けば分ろうが、今向うへ少し微酔で、顔へほつれ毛がかゝつて、赤い顔をして男に手を引かれて行つた美人があるが、彼あれは何かえ遊女かえ、但たゞしは堅気の娘のような者かえ」

若「へえ、只今へえ……御縁の深いことで、あれは手前方のお職しよくから二枚目をして居ります小増こましと申します」

又「はア貴公の楼ろうめい名は何と云う」

若「へえ……楼名、えゝ増田ました屋と申します」

又「成程根津で増田屋と申すは大分名高いと聞くが、左様かえ増田屋で今の婦人は」

若「小増と申します」

又「成程増田屋で増ましを付けるのは榊原の家来で榊原を名乗るようなもので」

若「いえ左様な大した訳でもござりませんが」

又「国から出たてゝ何も知らぬが、何かえ揚代あげだいきん金は何のくらい致す、今の美人を一晩買う揚代は」

若「へい、大概五拾びき疋でございますが、あのお妓こさんは只今売出しで、拾もんめ疋で、お高いようでございますが、彼あのくらしいな子供しゆ衆たんとは沢山たんとはございませんな、へい」



又「拾匁、随分値は高いが、拾匁出して彼のくらいな美人を寝かそうと起そうと自由にするのだから、実に金銀は大切な物だのう」  
若「えへ、まず兎も角もお上り遊ばしては如何」

又「だが登りもしようが、婦人を傍へ置いて唯寝る訳にも往かんが、何か食物を取らんではならんが、酒と肴はどのくらいな値段であるか承わつて置こう」

若「えへ……御存じ様でございましょう、おとぼけなすつて、小さい台は五拾匁でございます、大きい方は百匁で、中には六百文ぐらいのお安いのもございます」

又「ふう百匁、成程よい遊女を揚げれば佳いを取らなければならん、成程それでは酒は別だろな」

若「へい召上りませんでも先ます一本は付けます」

又「百疋で肴は何のくらいなのが付くな」

若「へ……おとぼけでは困りますな、大概遊女屋の台の物は極きまつて居りますが、小さい鯛が片へらなどで、付つけ合あせの方が沢山でございます」

又「それは高いじゃアないか、越後の今いま町まちでは眼の下三尺ぐらいの鯛が六十八文で買える」

若「御冗談ばかり仰しやいます」

又「厄介になろう」

若「有難う存じます、お揚あがんなさるよ」

「あいー」

とん／＼／＼と二階へ上ると引付座敷へ通しましたが、又市は黒木綿の紋付に袴を穿いた形で、張肘をして坐つて居ると、

二階廻しが参りまして、

婆「おやお出でない」

又「初めて、手前水司又市と申す者、勝手に心得ぬから何分頼む」

婆「何でございますねお前さん、瓢箪を紅葉の枝へ付けてお通ん

なはいましたねえ、滝の川へ入つしやつたの、御様子の好いこと、

云つてお噂をして居たのですよ」

又「左様か、お前は当家の家内かな」

婆「おや厭ですよ、私は二階を廻す者です」

又「なに二階を廻す、この二階を」

婆「あれさ力持じやアございません、本当に小増さんをお名指なごしは  
苛ひどいじやアございませんか」

又「何が苛い、買いたいと思つたから登あがつたわ」

婆「本当に外で見染めて揚るのは一ばん縁が深いと申します、本  
当にお堅過ぎますよ、お袴をお取りなさいよ」

と云ううちに小増が出て参りまして、引付ひきつけも済んで台の物が  
這はい入りますから、一猪口遣いちちよこやつて座敷も引け、床になりましたが、  
素もとより田舎侍でありますから、小増は宵に顔を見せたばかりで振  
られました。

よくあさもんぎれ  
翌朝門切もんぎれにならんうちにと支度を致しまして、

又「これく婆アく」

婆「厭だよ婆アなんてさ」

と云いながら屏風を開けて、

婆「お呼びなはいましたか」

又「いや昨夜ゆうべな些ちっとも小増こは来ぬて」

婆「誠にねどうも、流行はやりつ妓こですから生憎あいにくお馴染なじみが落合おちあつてさ、

斯こう折この悪い時は仕様がないもので、立込んでね」

又「左様かね、予かねて聞くが、初会はつあひは座敷切りと聞くが全く左様か」

婆「まアね然そう云いつた様なもので有ありますから」

吉原の上等の娼妓ならお座敷切りという事も有りましたが、岡場所では左様なことは有りませんが、そこが国育ちで知りませんから、成程そうかと又四五日置いて来ましたが、また振られ、又二三日置いて来たが振って／＼振抜かれるが、惚ほるといふものは妙なもので、小増が煙草を一ぷく吸付けてお呑みなはいと云ったり、また歸りがけに脊中せなかをぽんと叩いて、

小増「誠に済まねえのだよ、今度屹度きつと来ておくんなはい」

と云われるのが嬉しく思ひまして、しげ／＼通いましたが、又市も馬鹿でない男でございますから、終しまには癩癩おこを発して、藤助けという若わか者かいものを呼んで居ります。

婆「藤助どん行っておくれ、小増さんも時々顔でも見せて遣やれば

好いいのに、酷ひどく厭うがるから困まるよ」

又「これく袴はかまを出せ」

婆「おや誠まことにどうもお前まへはんにお氣いきの毒どくでね」

又「婆ばあア此こゝ処ところへ来こい、どうも貴公きこうの家いへは余あまりと云いえば不実ふじつではな  
いか、一度も小増こぞうは快たく私わしが側わきに居おつたことことはないぞ」

婆「何時いつでも然そう云いつて居いるので、生あ憎にくと流は行やりつ妓こだからね、

お前まへはん腹はらを立たつては困まりますよ、まことに間まが悪いじやアねえ  
か、お前まへはんの来こる時ときにやアお客おきゃくが落お合あつてさ、濟すまねえとお帰かへ  
し申ました後あとでお噂うわさして、一層いっしやう氣いきを揉もんで居おりますのさ」

又「そんな事ことは度たび々び聞きいたが、最も早はや二度と再またび来こないが、田舎いんか  
者ものには彼あアあいう肌はだ合あいいな氣象きさうだから、肌はだは許ゆるさぬとかいいう見識けんしが

有るから、お前が来ても迎も買通せぬから止せと親切に云つてくれても宜さそうなものだ、つべこべく馬鹿世辞を云つて、此の後のちふたゝび一度来ぬから宜いか、其の方達は余程不実な者だね、どうも」

婆「不実と云つたつて私達わつちたちのどうこうと云う訳には行きませんからさ、まことに自由にならないので」

藤助「へい、あのお妓こさんは流行妓はやりっこでございますから、お金で身体を縛つてしまいますから」

又「小増の身体を誰か鎖たれで縛ると申すか」

婆「あれさ、小増さんに此方こつちで三十両出そうと云うと、彼方あつちで五十両出そうと云つて張合つてするのだから、まことに仕様がござ



いませんよ、流行妓てえなア辛いものでそれだから苦界くがいと云うので、察して気を長くお出でなさいよ」

又「成程是まで度々参つても振られる故、屋敷へ帰つても同役の者が：それ見やれ、迎とても無駄じゃ、詰らぬから止せと云つて大きに笑われ、迎も貴公などには買遂げられぬ駄目だと云われたが、金ずくで自由になる事なら誠に残念だから、幾ら遣やれば必らず私わしに靡なびくか」

婆「ねえ藤助どん、金ずくで自由になればと云うが……まアねえ其処そこは義理ずくだからね、お金をまアねえ二拾両も遣つて長襦袢でも買えと云えば、気の毒なと云つて嬉しいと思つて、又お前まはんに前じょうより情の増す事が有るかも知れませんよ」

又「婆アの云う事は採りあげられんが、藤助確と請合うか」

藤「それは義理人情で、慥にそれは是非小増さんがねえ」

又「然らば宜しい、今日は機嫌好く帰つて二十両持つて来よう」

と笑つて、其の日は屋敷へ歸つたが、勤番者で他から金子を送

る者もないから、大事の大小を質入して二十五金を拵らえ、正

直に奉書の紙へ包み、長い水引をかけ、折熨斗を附けて金二十両

小増殿水司又市と書いて持つて参りまして、直に小増に遣わし、

これから酒肴を取つて機嫌好く飲んで居たが、その晩も又小

増が来ないから顔色を変えて怒りました。毎もの通り手を叩

くこと夥しいが、怖がつて誰も参りません。

婆「一寸藤助どん往つておくれよ」

藤 「困りますね」

婆 「今日は中根なかねはんが来て居るので、いゝえさ、どうも中根はん  
と深くなつて居て、中根はんが上役だから下役の足軽みたいな人  
の所へは行かないのだよ」

藤 「困りますな、怒おこるとあの太い腕で撲ぶたれますが、今度は取捕とつつか  
まると何どんな目に逢うか知れまいから驚きますねえ」

婆 「私は怖いからお前一寸行つてお呉れよ」

藤 「困りますね何うも……御免」

又 「此方こつちへ這入れ」

藤 「どうも誠に」

又 「何も最早聴かんで宜しい、再度欺かれたぞ、小増が来られな

ければ来ぬで宜しい、飲食のみくいは手前したのだから払うが、今晚の揚代金ここと殊に小増に遣わした二十金は只今持つて来て返せ、不埒至極な奴、斯か様な席だから兎や角云わぬが、余りと申せば怪けしからん奴、金を持つて来て返せ」

藤「何ともどうも私わたくし共には」

又「いや私わたくしどもと云つても手前何と云つた：弁わまえぬか」

婆「一寸水司はん、生憎今日も差さ合あがあつて」

又「黙れ、婆アの云う事は採とりあげんが、これ藤助、其の方は何と申した、二十兩遣わせば小増は相違なく参りますと申したではないか、男が請合つて、それを反故ほごにする奴があるか、男子たるべき者が」

藤「中々男子だつて然ういう訳には参りませんので、この廓では女の子に男が遣つかわれるので、私わたくしどもの云う事は聴きませんからね、どうも」

又「これ」

藤「あいた、痛うございます、何をなさる」

又「これ宜よくも己おれを欺あざむいたな、此こやつ奴め」

藤「あいた……いけません、遊女屋やわらで柔術やわらの手を出してはいけません、私わたしどもの云う事を聴くのではございせんから」

と詫わびても聞きき入いれず、若わか者いものの胸むねぐらを取とつて捻ねじ上げまし  
た。

## 三

大騒ぎになりますと、此の事を小増が聞き、生意氣盛ざかりの小増、止せば宜よいのに胴拔どうぬきの形なりで自惰落じだらくな姿をして、二十両の目録包を持って廊下をばたく遣やつて来て、障子を開けて這入つて来ました。又市は腹を立つて居たが、顔を見ると人情で、間の悪い顔をしている。

小増「一寸ちよつと又市さん何をするの、藤助どんの胸倉をとつてさ、

此の人を締殺す気かえ、遊女屋の二階へ来て力づくじゃア仕様が  
ないじゃアないか、今聞けばお金を返せとお云いだね」

又「これさ返せという訳ではないが、お前が一度も来てくれんか

らの事さ、来てさえ呉れゝば宜しい、今まで度々参つても、お前がついに一度も私わしに口を利いたこともないから、私はどうも田舎侍で氣に入らぬは知つているが、同役の者にも外聞であるから、せめて側に居て、快く話でもしてくれゝばおお大きに宜しいが、大勢打寄つて欺くから：斯かよう様なことを腹立紛れにしたのは私が悪かつた」

小「悪かつたじやアないよ、私わちきはお前まはんのような人は嫌いなもの、お前大層な事を云つてゐるね、金かねづくで自由になるような私わちきやア身体じやアないよ、二十両ばかりの端はしたがね金かねを千両がね金かねでも出したような顔をして、手を叩いたり何かしてさ、騒々しくつて二階中寝られやアしないよ、お前はんに返すから持つて帰んなまし、お

前はんのような田舎侍は嫌いだよ」

と云いながら又市の膝へ投付けて、

小「いけ好かないよう、腎助じんすけだよ」

と部屋着の裾すそをぽんとあおつて、廊下をばたく、駈出して行つた時は、又市は後姿うしろすがたを見送つて、真青まっさおに顔色がんしよくを変えて、ぶる／＼慄ふるえて、うーんと藤助の腕を逆に捻ねじり上げました。

藤「あいた／＼／＼、あなた、あいた……そんな乱暴なことをしては困りますねえ、私わたくしなどの云う事を聞く妓こではありませんから」  
又「田舎侍いんやは厭いやだと云うは、素もとより其の方達も心得居おろうに」

藤「あいた……腕が折れます、一寸ちよつとおかやどん、小増さんと呼んで来てというに、あゝいた／＼／＼／＼」



大騒ぎになりましたが、丁度此の時遊びにまいって居たのが榊原藩の重役中根善右衛門の嫡子善之進と云う者でございませぬが、御留守居役《おるすいやく》の御子息で、まだ二十四歳でございませぬから、隠れ忍んで来るが、取巻は大勢居まして、取巻「もし困るではございませぬか、遊女屋の二階で柔術の手に出して、若者に拳骨をきめるといふ変り物でございませぬが、大夫が是にいらつしやるのを知らないからの事さ、大夫のお馴染を知らないで通うぐらいの馬鹿さ加減はありません、あなた一寸お顔を見せると驚きますよ、ちよいと鶴の一と声で向うで驚きますよ、ね小増さん」

小増「左様さ、一寸顔を見せてお遣りなさいよう」

と大勢に云われますと、そこが年の往かんから直ぐに立上りま  
 したが、黒出くろでの黄八丈の小袖にお納戸なんどけんじょう献上の帯の解け掛りま  
 したのを前へ挟はさみながら、十三間平骨ひらぼねの扇を持って善之進は水  
 司のいる部屋へ通ります。又市は顔を一寸見ると重役の中根で  
 ございますから、其の頃は下役の者は、重役に対しては一言半いちごんはん  
 句くも答えのならぬ見識だから驚きました。後あとへ下さがつて、  
 又「是は怪けしからん所で御面会、斯かる場所にて何なにとも面目次第も  
 ござらん」

善「これこれ水司、何どうしたものじゃ、遊女屋の二階でそんな事  
 をしてはいかん、此こ処は色里であるよ、左様そうじゃアないか、猛たけき  
 心こゝろを和やわらぐる廓へ来て、取るに足らん遊女屋の若い者を貴公が相手

にして何うする積りじや、馬鹿な事じやアないか、殊ことに新役では有るし、度々屋敷を明けては宜しくあるまい、私わしなどは役柄で余儀なく招かれたり、或あるいは見聞けんもんかた／＼毎度足を運ぶことも有るが、貴公などは今の身の上で彼様かような席へ来て遊女狂いをする事が武田へでも知れると直すぐにしくじる、内聞に致すから歸らつしやい」

又「まことに面目次第もございません、つい一夜ひとよ参りましたが、とんと不待遇ふあしらいでござつて、残念に心得、朋友にも逆とても田舎侍が参つても齒は立たぬなどと云われますから、残念に心得再度参りました処が、如何いかに勝手を心得ません拙者でも、余りと云えば二階中の者が拙者を欺きまして、あまり心外に心得まして……それ

其<sup>そこ</sup>処に立つて居ります、貴方<sup>あなた</sup>のお側に立つて居<sup>い</sup>るその小増と申す婦人に迷いまして、金を持って来れば必らず靡<sup>なび</sup>くと申しますから、昨夜二十金才覚致して持つて参りますと、それを不礼<sup>ぶれい</sup>にも遊女の身として拙者へ対して悪<sup>あつこう</sup>口を申すのみか、金を膝の上へ叩付けましたから残念に心得、彼様<sup>かよう</sup>な事に相成りまして、誠に何うもお目に留<sup>とま</sup>り恐れ入りますが、どうか御尊父様へも武田様にも内々<sup>ないく</sup>に願います」

## 四

善「左様か、この小増は私<sup>わし</sup>が久しい馴染で、斯<sup>こ</sup>ういう廓<sup>くるわ</sup>には意<sup>いき</sup>気

地と云つて、一つ屋敷の者で私に出ている者が、下役の貴公には出ないものじや、そこが意気地で、少しは傾城けいせいにも義理人情があるから、私を買つて居る馴染の遊女だから貴様に出ないのだから、小増の事は諦めてくれ、是は私が馴染の婦人だから」

又「へえー左様で、貴方のお馴染で、ふうー」

小「一寸水司ちよつとはん、私の大事わちぎのね、深い中になつて居るお客と

いうのは此の中根はんで、中根はんに出ている私がお前まはんの様な下役に知られますかねえ、宜よく考えて御覧なはいよ、出たくも出られませんからさ、又お前まえはんの様な人に誰が好いて出るものかねえ、お前顔を宜く御覧、あの己うぬぼれ惚鏡かがみで顔をお見よ、お前鏡を見た事がないのかえ、火吹達磨ひふきだるまみたいな顔をしてさア、お前ま

はんの顔を見ると馬鹿くしくなるのだよう」

と云われるから胸に込上げて、又市逆せ上つて、此度は猶強く

藤助の胸ぐらを取つてうーんと締上げる。

藤「あなたいたい……私を、どう……」

又「黙れ、今中根様の仰せらるゝ事を手前存じて居るか、一つ屋

敷の者には出ない、上役がお愛しなさる遊女をなぜ己に出した」

藤「あいた……これはあなた気が遠くなります、お助け下さい、

死にます」

善「これく水司、あれほど云うに分らぬか、若い者を打擲

して殺す気か、痴けた奴だ、左様なる事をするると武田へ云つてし

くじらせるが何うか、これ此の手を放さぬか」

と云いながら十三間の平骨の扇で続け打うちにしても又市は手を放しませんから、月代際さかやきぎわの所を扇かなめこわの要こわの毀れる程強く突くと、額は破れて流れる血潮。又市は夢中で居ましたが、額からぽたり／＼血が流れるを見て、

又「はアお打擲あに遇あいまして、手前面部きずへ疵きずが出来ました」

善「左様なまねをするから打擲いしたが如何致いかゞした、汝ごはな此ごの後ご斯かよう様な所へ立廻ると許さぬから左様心得ろ、痴呆たわけめ、早く帰れ／＼」

又「何も心得ません処ところの田舎侍でござって、一つ屋敷の侍が斯そ様な所へ来て恥辱そとを受けますれば、その恥辱そとを上役のお方が雪そいで下さることと心得ましたを、却かえつて御打擲ごに遇あいまして残念で

ござりまする、只今帰るでござる、これ女ども袴と腰の物を是へ  
持て」

と急に支度をしてどんくくくと毀れるばかりに階子を駈  
けお下りると、止せば宜いに小増を始め芸者や太鼓持まで又市の跡を  
付けて来まして、

小「あれさ、お上役に逢つては一言もないからさ泣<sup>なき</sup>面<sup>つら</sup>してさ、  
泣面は見よい物じゃアないねえ、あの火吹達磨や、泣達磨や、へ  
ご助や」

とわい／＼言われるから猶更逆<sup>の</sup>上<sup>ほ</sup>せて履<sup>は</sup>物<sup>き</sup>も眼<sup>の</sup>に入<sup>い</sup>らず、紺<sup>こ</sup>  
足袋<sup>んたび</sup>のまゝ外へ出ましたが、丁度霜月三日の最早明<sup>あけ</sup>近<sup>ちか</sup>なりまし  
たが、霜が降りました故か靄<sup>もや</sup>深く立ちまして、一尺先も見<sup>み</sup>分<sup>わか</sup>りま



せんが、又市は顔に流るゝ血を撫でると、手のひらへ真赤まつかに付き  
ましたから、

又「残念な、武士の面部へ疵を付けられ、此の儘まには帰られん、  
たとえ上役にもせよ憎い奴は中根善之進、もう毒喰わば皿まで、  
彼奴あいつ帰れば武田に告げ、私わしをしくじらせるに違いない、殊ことには衆  
人満座の中にて」

と恋の遺恨と面部の疵、捨置きがたいは中根めと、七軒町しちけんちよう  
の大正寺たいしようじという法華寺ほつげでらの向う、石置場いしおきばのある其の石の蔭かげに  
忍んで待つていることは知りません、中根は早歸りで、銀助ぎんすけと  
いう家来てまるに手丸てまるの提灯ちようちんを提げさして、黄八丈の着物に黒羽二  
重の羽織、黒縮緬ちぢみの宗十郎頭巾そうじゅうろうずきんを冠かぶつて、要かなめの抜けた扇を顔

へ当てゝ、小声で謡うたいを唄つて帰ります所へ、物をも言わず突だしぬけ然に、水司又市一刀を抜いて、下男の持つている提灯を切落すと、腕が冴さえて居りますから下男は向うの溝みぞへ切倒され、善之進は驚あどき後へ下つて、細身の一刀を引抜いて、

善「なゝ何者」

と振り冠かぶる。

又「おゝ最前の遺恨思ひ知つたか」

と云う若氣の至り、色に迷いまして身を果すと云う。これが発は端じめでございます。

水司又市が悪念の発しまする是れが始めでございます。若い中  
 は色気から兎角了簡の狂いますもので、血気未だ定まらず、これ  
 を戒むる色に在りと申しますが、頗る別嬪が膝に凭れて

「一杯お飲んなさいよ」

なぞと云われると、下戸でも茶碗でぐうと我慢して飲みまして  
 煩うようなことが有りますが、惚抜いている者には振られ、殊に  
 面部を打破られ、其の頃武家が頭に疵が出来ると、屋敷の門を跨  
 いでは帰られないものでございました。又市は無分別にも中根善  
 之進を一刀両断に切つて捨て、毒食わば皿まで舐れと懐中物をも  
 盗み取り、小増に遣りました処の二十両の金は有るし、これを持

して又市は越中<sup>えつちゆうのくに</sup>国へ逐電いたしました。此方<sup>こちら</sup>は翌朝<sup>よくちよう</sup>になり  
 ましてもお帰りがないと云うので、下男が迎いに参りますと、七  
 軒町で斯様<sup>かよう</sup>くと云う始末、まず死骸を引取り檢視沙汰、殊に上  
 役の事でございますから内聞<sup>はから</sup>の計いにしても、重役の耳へ此の事  
 が聞え、部屋住<sup>ずみ</sup>の身の上でも、中根善之進何者とも知れず殺害<sup>せつがい</sup>  
 され、不束<sup>ふつゝか</sup>の至<sup>いたり</sup>と云うので、父善右衛門は百日の間蟄居<sup>ちつきよ</sup>致し  
 て罷<sup>まか</sup>り在<sup>あ</sup>れという御沙汰でございますから、翌年に相成<sup>ようや</sup>り漸く蟄  
 居<sup>ゆ</sup>が免<sup>ゆる</sup>りましたなれども、最<sup>も</sup>う五十の坂を越して居ります善右衛  
 門、大きに氣力も衰え、娘<sup>むすめ</sup>お照<sup>てる</sup>と云うがございまして年十九に成  
 りますから、これに養子を致さんではならんと心配致して居りま  
 したが、丁度三月末の事、善右衛門が遅く帰りました、

善右衛門「一寸お前」

妻「お帰り遊ばせ」

善「いや帰りにね武田へ寄つて来た」

妻「おや、大分お帰りがお遅うございますから、何処かへお立寄と存じまして」

善「少し悦ばしい話があるが」

妻「はい」

善「斯う云う訳だが、予てお前も知つての通り、昨年悴が彼アいう訳になつて私も最う勤は辛いし、大きに氣力も衰えたから、照に何な者でも養子をして、隠居して樂がしたい訳でもないが、養子を致さんではと思つて居た処が、幸いと武田の次男重一郎が

養子になるように相談が極きまつたよ」

妻「おやまアそれは何どうも此の上もない事でございます、お屋敷うち中でも親孝行で、武芸と云い学問と云い、あんな方はございませ  
ん、評判の宜よい方でござりますねえ」

善「それに彼あれは武田流の軍学を能よくし、劍術は真影流の名人、文学も出来、役に立ちますが、継母に育てられ気が練ねれて居て、如何いかにも武芸と云い学問と云い老年の者も及ばぬ、実に彼あのくらしいの養子は沢山たんとあるまい、此の上もない有難い事でのう、早く照をお呼びなさい」

妻「はい、お照や一寸此こ処へお出いで、お父様とつさまがお歸りになつたよ、さア此処へお出で」

御重役でも紳原様では平生へいせいは余り好よい形なりはしない御家風で、

下役したやくの者は内職ばかりして居るが、なれども銘めい仙せんの粗あらい縞あらいの小袖せうそでに華美はでやかな帯おびをメ《し》めまして、文金ぶんぎんの高たか髻まげで、お白粉しろいは屋敷だから常は薄うございますが、十九つゞや二十はたちは色盛り、器量きりやう好よしの娘お照、親の前へ両手を突いて、

照「お帰り遊ばせ」

善「はい……此処へお出で、今お母様つかさまにお話をしたが、お兄あにい

様さまは去年あの始末、お前にも早く養子をしたかと思つたが、親

の慾目で、何うかまア心掛むこのよい聳むこをと心得て居つたが、武田の

重二郎が当家へ養子に来てくれる様に疾とうから話はして置いたが、  
漸ようやく今日話とが調とつたからお母様と相談して、善は急げで結納との取

りかわ

交せをしたいが、媒妁人は高橋を以てする積りで、嫁入の衣裳や何かお前の好みもあるう、斯ういう物が欲しい、櫛簪は斯う云うのとか、立派なことは入らぬが、宜くお母様と相談して、其の上で先方へも申込むから宜いかえ」

照「はいお父様私に養子を遊ばす事はもう少しお見合せなすつて」

善「見合せる、其様な事はありません、何で見合せるのだえ」

照「はい私はまだあなた養子は早うございます、それに他人が這入りますと、お父様お母様に孝行も出来ません様になりますから、私も心配でございますから、何卒もう四五年お待ち遊ばして」

善「そんな分らぬ事を云つてはいけません、早く養子をして初孫の顔を見せなければ成りません」



妻「ほんとうに養子をしてお前の身が定まれば、お父様も私も安心する、双方に安心させるのが孝行だよ……まことにあなた何時までも子供のようでございます……あんな好い養子はございませんよ、家へいらつしやつてもあの凜々しいお方で、本当に此の上もないお前仕合せな事だよ」

善「さア、はいと返辞をすれば直に結納を取交せるから」

照「はい、私はある池の端の弁天様へ、養子を致す事を三年の間願掛けをして禁ちました」

善「そんな分らぬ事を言つては困りますよ、弁天へ行つて然う云つて来い、願掛けは致したが、親の勧めだからお願を破ると云つて来い、それで罰を当てれば至極分らぬ弁天と申すものだ、そん

な分らぬ弁天なら罰の当てようも知るまいから心配はありませんよ、これ何時まで子供の様な事を云つて何うなります、私が約束して今更へんがえ変替は出来ません、直すぐさま様返事をおしなさい、これ照、困りますなア」

## 六

妻「貴方、そう御立腹で仰しやつてもいけません……何時までもお前子供の様で、養子をするとうものは怖いように思うものだけれど、私も当家へ縁付いた時は、こんな不器量な顔で恥かしい事だと否いや々々ながら来ましたが、また亭主となれば夫婦の愛情は

別で、お父様お母様にも云われない事も相談が出来て、結句頼もしいものだよ、あいとお云いよく、泣くのかえ」

善「なに泣くとは何事、泣くという事はありません、何だ」

妻「まあ其様そんなにお怒り遊ばすな」

と無理に手を取つて娘の居間へ連れて行き、種々いろく言含めたが

唯泣いて計り居て返答を致しませんのは、屋敷内うちの下役に白島しろしま

山平さんぺいという二十六歳になります美男と疾とうから夫婦約束をして

居りました。遠くして近きは恋の道でございませす。逢引する処が

別にございませんから、旧来家うちに奉公を致して居りましたおきん

と云う女中が、上野町うえのまちに団子屋をして居るので、此の家うちの二階

で山平と出会いますので、是が心配でございませすから、おきんの

所へ手紙を出しますと、此方こちうらはおきんが山平を呼出しまして、二階で三鉄輪みつがなわで話をして居ります。

きん「どうも先せん達だつては有難うございます、貴方、あんな心配をなすつては困りますよ、お忙がしい処をお呼立て申しましたのは困った事が出来ましてね」

山「毎度厄介になりましたして気の毒で、今日は急に人だから何事かと思つて来たのだが、どう云うわけだえ」

きん「どう云うたつて実に困りますよ、何うしたら宜よかろうと存じまして、お照さまに御両親様から急に御養子を遊ばせと仰しやるので、嬢様は否いやだと云つて弁天様へ禁たつたと仰しやつたそうでござりますが、お父様が聴かぬので、一旦約束したから変へん替がえは

出来ぬと云うので、仕方がないから私はわたくし養子をする気はない、どんな事が有つても自分が約束したからは何処迄も強情を張る積りだが、お父様が腹を切るの何のなんと云うから、寧いっそ身を投げて死んでしまおうと、小さいお子様の様な事を仰しやるので困りますよ、何か云えば直すぐに自害をするのなどと詰らん事を云うので困ります、私は思案に余りますから貴方をお呼び申したので」

山「ふう成程、そうして何方どちらから御養子を」

きん「お嬢様の仰しやるには、白島様には云わぬ方が宜よいと仰しやいます、あの武田重二郎様ね、それあの厭いやな氣の詰るお方で、私も御奉公して居るうち見ましたが、偏屈いな嫌やに堅かた苦くるしいね嫌な人で、実に困った訳でございますけれども、否いやと言切る訳に

も往ゆきませんから誠に心配していらつしやいます」

山「お照さん……この山平は江戸詰に成りまして間がない事で、

これまでお引立ひきたてを蒙こうむりましたは、実は武田の重左衛門じゅうざえもん様の御

恩でござります、そのお家の御二男様が御養子の約束になつて居

るものを、貴方が否いやと仰しやれば何故なにゆえに背くと、夫それより事が

顕あらわれますれば、拙者は屋敷を逐出おいだされる事になります、私わたくしの身

は仕方がない事でござりますが、あなた様の御尊父にも済まぬ事

で、何卒どうぞ是れまでお約束は致しましたが、何卒親御の意を背くは

不孝なり、あなたも世間へ済まぬことになりますから、只今まで

の事は水にあそばして、何うかあなた武田から御養子をなすつて

ください、実は只今まで私はお隠し申したが、国表たちいを立出たちいでます

時男子出産して今年二歳になります、国には妻子がごございますの  
で」

照「えゝ」

と娘は驚きまして、じつと白島山平の顔を見て居りましたが、  
胸に迫つてわつとばかりに泣倒れました。

きん「あなた奥様があるの、おやお子さん方がお二人、まだ若い  
のに、おや然<sup>そ</sup>うでございますかねえ：お嬢さん白島様が御迷惑に  
なりますから、お厭でもございましょうけれども、思い切つて貴  
方、お厭でも御養子を遊ばせな、此の事が知れると物堅い旦那様  
だからきんもきんだ、長らく勤めて居ながら娘を二階で逢引をさ  
せるとは不埒<sup>ふらち</sup>な女だと仰しや<sup>わたくし</sup>つて私が斬られるかも知れませんよ、

ねえ彼あア云う御氣象ですから、ねえ御養子をして置いて時々お逢い遊ばせよう、然うすりやア知れやアしませんよ、あの釜かまうら浦様の御新造ごしんぞ様みたいな、彼アいう事もありますから、宜よいじやアありませんか、然う遊ばせよ」

山「誠に手前も夢の昔と諦めますから、申しお嬢様さで嘸不実な者とおぼしめ思召すでござりましょうが、この白島山平を可愛相かわいそうと思召す

なら、あなた親御様の仰しやる通り武田から御養子をなすつて下さい、只今も金の申す通り、お聴きく濟ずみがなければ止むを得ず、手前どうも切腹でもしなければならん訳で」

きん「貴方ア切腹なされると仰しやるし、お嬢様は自害などと困りますねえ……お嬢様何う遊ばしますよ」



照「はい、それ程白島様が御心配遊ばす事なればいたしかた致方かたがあり  
 ませんから、それにお国に奥様もお子様もある事は私は少しも知わたくし  
 りません、最もう身を切られるより辛うございますけれども、あな  
 たのお言葉でございますから、背そむかず武田から養子致します」  
 と云いながら、わつと泣き倒れました。

## 七

おきんも山平も安心して、  
 きん「宜く仰しやいました、それで何うでも成ります、またねえ  
 時々お逢い遊ばす工夫もつきますから」

と漸くようや身上みのうえの相談をして、お照は宅へ歸つて、得心の上武田重二郎を養子にした処が、お照は振つてく振りぬいて同衾ひとつねをしません。家付の我儘娘、重二郎は學問に凝こつて居りますから、襖ふすまを隔ふけて、更ふけるまで書見をいたします。お照は夜着よぎを冠かぶつて向うを向いて寝てしまいます。なれども武田重二郎は智慧者ちえしやでございますから、私わしを嫌うなど思いながらも舅しゅうと姑との前があるから、照やくと誠に夫婦中の宜い様にして見せますから、両親は安心致して居ります中、段々月日が立ちますと、お照は重二郎の養子に來る前に最みおもう身重みおもになつて居りますから、九月の月へ入いっつて五月目きめで、お腹なかが大きおく成ります。若い中うちは有りがちでございますから、まあく淫奔おいたは出来ませんものでございます。お照は懷

妊と気が付きましたから何うしたら宜よかろう、何うかお目にかゝり相談を為したいと、山平へ細こま々々と手紙を認しため、今日あたりきんが来たらきんに持たせてやろうと帯の間へ挿はせて居りましたが、何処どこへ振落しましたか見えませんか、又細々と文ふみを認めおきに渡し、それから直すぐにおきんより山平へ届けましたので、九月二十日に団子茶屋へ打寄つたが、此の時は山平は真ま青つさおになりました。

きん「もし白島様実に驚きましたよ、お嬢様さんは同ひと衾つねを遊ばさないで、それだからいけやアしません、同衾をなされば少し位月が間違つて居ても瞞ごまかしますよ、何うしたつて指の先ぐらゐは似て居りますから、何うでも出来ますのを、振つてくゝ振抜いて、

同衾をしないので隠し様がありませんからさ、押して云えば仕方がないから、私は自害して死ぬばかり、私は二度と夫は持たない、親が悪い、無理に持たせたから、あたりまえ当然と仰しやるだけで仕方がありませんよ」

山「露顕しては止むを得ない、何うしても割腹致すまでの事で」

きん「貴方は又そんな事を云つて、仕様がございません、それじやア相談の纏まりまと様がございません」

と彼あれの是れのと云つて居りますと、折悪しく其の晩養子武田重二郎は傳助でんすけと云う下男を連れて、小津こつがる輕の屋敷へ行つて、兩國を渡つて帰り、御徒町おかちまちへ掛ると、

重「大分だいぶん傳助道がぬか漣ぬかるのう」

傳「先程降りましたが宜い塩梅あんばいに帰りがけに止みました」

重「長い間待遠まちどおで有つたろう」

傳「いえもう貴方お疲れでございましょう、御番退ごばんびけから御用多おお

でいらしつて、彼方あちら此方とお歩きになつて、お帰り遊ばしても直すぐ

に御寝おげしなられますと宜しいが、矢張お帰りがあると、御新造様とごしんぞ

同じ様に御両親が話をしろなどと仰しやると、お枕元で何か世間

話を遊ばして御機嫌を取つて、お帰り遊ばしても一口召上つて、

ゆるくお氣晴しは出来ませんで、誠に恐入りましたな」

重「何も恐入ることはない、私は仕合せだのう、幼年の時継母に

育てられても継母が邪慳じゃけんにもしないが、氣詰りであつたけれど、

当家へ養子に来てからは舅しゅうとご御あが彼の通り好い方で、此の上も

ない仕合せで」

傳「へえわたくし私は旧来奉公致しますが、旦那様も御新造様もいかつい事を云わないお方で、誠に私もわたくし仕合せで、実に彼あいう方でございますから、斯かようなことを申しては恐入りますが、若御新造様はすこしも御奉公遊ばさない、世間を御存じがない方でございますからな、あなたがお疲れの処へ、御両親様の御機嫌を取つてお長よくいらつしやる時には、御新造様が最もうお疲れだからと宜よい様に云つてお居間に連れ申して、おすきな物で一杯上げる様にお氣が付くと宜よしいが、余り遅くお帰りになるのが御意に入らぬのか知れませんが、つーと腹を立ったように、お帰りがあつても碌ろくにお言葉もかけない事がありますからな」

重「いゝや然<sup>そ</sup>うでない、御新造は奉公せぬに似合<sup>よ</sup>わぬ中々能く心付くよ」

傳「へえ……何<sup>ど</sup>うも私<sup>なん</sup>も旧来奉公致しますが、あなた様には誠<sup>わたくし</sup>に何<sup>ど</sup>うも何<sup>なん</sup>とも済まぬことで、実に恐入ったことで、私は心配致しますが、だからと申して黙<sup>もく</sup>つていても何<sup>ど</sup>うせ知れ<sup>し</sup>ますからな」

重「何を」

傳「へえー、誠に何<sup>ど</sup>うも恐入<sup>おそ</sup>つて申<sup>ま</sup>上げられ<sup>ら</sup>れませんが、実は貴方様<sup>あなた</sup>に対して御新造様<sup>ごしんぞう</sup>がな、何<sup>ど</sup>うも何<sup>なん</sup>う云<sup>い</sup>うものか、誠に恐入<sup>おそ</sup>り<sup>ま</sup>すな」

重「大分恐入<sup>おそ</sup>るが、何<sup>なん</sup>だい」

傳「へえ……申<sup>ま</sup>し上げ<sup>あ</sup>げ<sup>ま</sup>せん<sup>せ</sup>ん<sup>け</sup>れば他<sup>ほか</sup>から知<sup>し</sup>れ<sup>ま</sup>す<sup>か</sup>らな、却<sup>かえ</sup>つ

て御家名を汚すけがようになりますから、御両親様も……また貴方の名義を汚す一大事な事でございますから、外ほかのお方様なら申上げませんが、あなた様でございますから何うか内聞に願ひ、その處は世間に知れぬうち御工夫が付きますように参りませうかと存じますが、何うか御内聞に、何うも何とも恐れ入りまして」

重「恐れ入つてばかりではとんと何だか分らんが、他の事と違つて家名に障さわると、私わしが身は何うでもよろしいが、中根の苗字に障つては濟まぬが、何なんじやか言つてくれよ、よ、傳助」



傳「実は申上げようはございませんが、もう往来も途切れたから申上げますが、御新造様は誠に怪けしからん、密みそかお夫こしらを拵え遊ばして逢引を致しますので」

重「ふう嘘を云え、左様な嘘をつくな決して左様な事は有りません、世間の悪口わるくちだろうから取上げるなよ、私わしが来ましてから御新造は些ちつとも他ほかへ出た事はないぞ、弁天へ参詣ゆに行くにも小女が付き、決して何処どこへも行つた事はない」

傳「それが有るのでへえ……実に恐入りますがな、不埒至極なのはお金と申す旧来勤めて居りました団子茶屋おきん、へい彼奴あいつが悪いので、へい、奉公して一つ鍋の飯を喰いました女でございますから宜よく私わたしは存じて居りますが、口はべらく喋るが、彼奴が

不人情で怪けしからん奴で、お嬢様を自分の家うちの二階で男と密会をさせて、幾らかしきを取る、何如いかにも心得違いの奴で」

重「そりやア誰たれがよ、誰が左様なる事を云う、相手は何者か」

傳「相手はそれは何どうも、白島山平と云う彼あの下役わたくしの山平で、私わたくしも外ほかの方なら云いませんですが貴方様だから、お舅御様しゅうとごさまのお耳にはいらぬ様にお計らいが附こうと思つて申しますが、何うも恐入ります」

重「嘘を云え、白島山平は義氣正しい男で、役は下だが重役まさに優る立派な男じゃ、他人の女房と不義致すような左様な不埒者でない」

傳「それが誠に有るので、実は昨日な証拠を拾つて持つて居りま

すが、開封致しては相済みませんが、捨置すておかれませんかから心配して開封いたしました。山平へ送る艶書を拾いました」

重「どう見せろ」

傳「何うか御立腹でございませうが内聞のお計らいを」

重「見せろ、どれもつと提灯を上げろ」

と重二郎艶書をひら開いて繰返し二度許ほかり読みまして、

重「傳助」

傳「へえー」

重「少しも存ぜぬで知らぬ事であつたがよく知らしてくれた」

傳「何うも恐入ります、それだから貴方様がお帰りになつても、

御新造様が快よく御酒の一と口も上げませんので、何うも驚きま

すな」

重「この文の様子では懷妊致して居るな」

傳「へえー何うも怪しからん事でげすな」

重「団子屋のきんの宅に今晚逢引を致して居るな」

傳「へえ丁度今晚逢引致して居ります」

重「きんの宅を存じて居るなれば案内しろ」

傳「いらつしやいますか」

重「己が行こう」

傳「貴方いらつしやツても内間のお計らいを」

重「痴けた事を云うな、武士たる者が女房を他人に取られて刀の

手前此の儘では済まされぬから、兩人の居処へ踏込み一刀に切

つて捨て、生首を引提ひっさげて御両親様へ家事不取締の申訳をいたすから案内致せ」

傳「是は何うも飛んだ事を云いました、是は何うも恐入りましたな、外ほかさま様なれば云いませんが、貴方様でございますから内聞に出来る事と心得て飛んだ事を申しました」

重「飛んだ事と申して捨置かれるものか、行ゆけく」

と云われ真まつさお青あおになつてぶるく顫ふるえて傳助地ぢびたへ踵かかとが着つきませんで、ひよこく歩あきながら案内をするうちに、団子屋のきんの宅の路地まで参りました。

重「これく其そこ処ところに待つて居ゐれ、町家ちやうかを騒さわがしては済すまぬから」  
傳「何うかお手打ちは御勘弁なすつて」

重「黙れ、提灯を消してそれに控え居れ」

傳「へえー」

重二郎は傳助を路地の表に待たして、自分一人で裏口の腰障子へぼんやり灯あかりがさすから小声で、

重「おきんさんの宅は此方こちらかえ」

と云うと二階に三人で相談をして居りましたが、

きん「はい魚政うおまさかえ：いゝえ此の頃出来た魚屋でございますから、器物いれものが少ないのでお刺身を持って来ると、直すぐに後あとで甘うまを入れるからお皿を返して呉れろと申して取りに来ますので」

きんは魚屋と間違えて、

きん「少し待ってお出いでよ」

と階はしご子段くだんを下りて、

きん「魚政かえ、今お待ちよ」

と障子を開けて見ると、魚屋とは思いの外ほか重二郎が刀を引提ひっさげ  
てずうと入り、

重「これ照が二階に参つて居るなら一寸逢ちよつとわして呉れよ」

きん「いゝえ御新造様は此方こちらへは入いらつしやいません」

重「入いつしやいませんたつて参つて居るに相違ない、是に駒下駄  
があるではないか」

きん「あのそれは先刻さつきあの入いらつしやいまして、それはあの、雨が  
降つて駒下駄では往いけなから草履ぞうりを貸してと仰うしやいまして」

重「馬鹿な、痴たわけた事を云うな、逢あわせんと云えば直じきに二階へ通

るぞ」

きん「はい何卒真平御免遊ばして、何うぞ御勘弁遊ばして、御新造様がお悪いのではございません、皆きんが悪いのでござい  
ますから何うぞ」

重「何だ袖へ縫<sup>すが</sup>つて何う致す、放さんか、えい」

と袖を払つて長い刀を引提<sup>ひっさ</sup>げて二階へどんくくくと重二郎駈上ります。これから何う相成りますか一寸と息<sup>いき</sup>致して。

九

引<sup>ひきつゞ</sup>き 続<sup>つゞ</sup>き ましてお聴<sup>き</sup>に入れますが、世の中に腹を立ちます程誠



に人の身の害になりますものはございませぬ。殊ことに此の赫かツと怒いかりますと、毛孔けあなが開いて風をひくとお医者いしやが申しますが、何どう云う訳か又極ごくく笑うのも毒だと申します。また泣な入きいつて倒れてしまう様に愁しゆう傷しょう致すのも養生じやうじやうに害があると申しますが、入に湯ゆう致ぢしましても鳩みぞ尾おちまで這入はつて肩かたは濡ぬしてならぬ、物を喰くつてから入湯いりゆしてはならぬ、年中水を浴びて居るが宜よいと申しますが、嫌な事を忍ぶのも、馴なれるとさのみ辛いものではござりませぬ。何事も堪忍致すのは極く身の養生くすり、なれども堪忍の致しがたい事は女房にようばうが密夫まおとこを拵こしらえまして、亭主ていしゆを欺だまし遂おせて、他ほかで逢引あひひする事が知れた時は、腹はらを立たぬ者は千人に一人もございませぬ。武田重二郎は中根の家へ養子やしよに来てからお照ひとつねが同おな衾しを為しないのは、

何か訳があるうと考えを起して居ります処へ、家来傳助がこれ／＼と証拠の文を見せたから、常と違つて不埒至極な奴、さア案内しろと云う。傳助も飛んだ事を云つたと思つても今更仕方がありません。重二郎は団子屋のお金の家へ裏口から這入つた時はおきんは驚きまして、

きん「何うか私わたくしが悪いからお嬢様をお助けなすつて下さい」

と袖すがに縫ぬるを振切つて、どん／＼と引提ひっさげ刀で二階へ上ありました

た時に、白島山平もお照も唯ただ悔びり致して、よもや重二郎が来よ

うとは思わぬから、膝ひざに凭もたれ掛つて心配して、何う致そう、寧いそ

の事二人共に死んで仕舞おうかと云つて居る処へ、夫が来たので

左右へ離れて、ぴつたり畳かへ頭かしらを摺すり付けて山平お照も顔あを挙げ得

ません。おきんは是れは最<sup>も</sup>う屹<sup>きつと</sup>度斬ると思ひ、怖<sup>こわ</sup>々<sup>々</sup>ながら上<sup>あが</sup>つて来て、

きん「何卒<sup>どうぞ</sup>御勘弁なすつて下さい、お願いでございます」

重「まあ〜静かに致せ、そう騒いではいかん、世間で何事かと思われる、えゝ何も騒ぐ事はない……これさお照お前<sup>な</sup>何故<sup>な</sup>そんなに驚きなさる、私<sup>わし</sup>が来たので畳<sup>か</sup>へ頭<sup>しら</sup>を摺付け、頭を挙げ得ぬが、何<sup>なん</sup>と心得て左様に恐れて居<sup>い</sup>るのか、何うも何ともんと私には分りません……山平殿それでは誠に御挨拶も出来ぬから頭を挙げて下さい……きん、静かに致して下の締りを宜<sup>よ</sup>くして置くが宜いぞ、よう、賊でも這入るといかぬ」

きん「はい誠に何うも何ともお詫<sup>わび</sup>の致<sup>いた</sup>しかた方<sup>かた</sup>もございませぬ、お

嬢様が何も私が旧来奉公を致し、他に行く処もないからきんや家を貸せと仰しやつた訳でもございません、世間見ずで入つしやいますから人の目棲に掛つてはなりませんと私がお招び申したのが初めで、何卒く御勘弁なすつて」

重「これさ静かにしろよう、何だか分りませんが、それじやア何か差向で居る処へ私が上つて来たから、山平殿と不義濫行でもして居ると心得て、私が立腹して此れへ上つて来た故、差向で居た上からは申訳は逆も立たぬ、さア済まぬ事をしたと云うので左様に驚きましたか、左様か、然うだろう、然うでなければ然う驚く訳はない、誠にきん貴様は迷惑だ：のう山平殿、役こそ卑いが威儀正しき其の許が、中々常の心掛けと申し、品行も宜

しく、柔和温順な人で、他人ひとの女房と不義などをうん：なア：為す  
 る様な非義非道の事を致す人でないなア：…が差向で居おつたが過あやま  
 りであつた、男なんによ女七歳にして席を同じゆうせずで、申訳が立た  
 ぬと心得て、山平殿も恐れ入つて居おらるゝ様子、照も亦済まぬ、  
 何う言訳しても身のあかりは立つまい、不義と云われても仕方が  
 ない、身に覚えはないけれども是れに二人で居たのが過り、残念  
 な事と心得て其の様に泣入つて居おることか、何とも誠に氣の毒な、  
 飛んだ処へ私が上つて来たのう、そう云う訳は決してないのう、  
 きん「  
 きん「はいく／＼決して夫それはそう云う、あの、其そん様なども訳で  
 はございせんから」

## 十

重「だからノウ、私が養子わしに來ぬ前から照の心掛は實に感心、云  
 わず語らず自然と知れますな、と申すは昨年霜月三日にお兄様あにさまは  
 何者とも知れず殺害せつがいされ、如何いかにも残念と心得、御両親は老体  
 なり、武士の家に生れ、女ながらも仇あたを討たぬと云う事はないと  
 心掛けても、何どうも相手は立派な士さむらいであり、女の細腕では討つ事  
 ならず、誰たれを助太刀に頼もう、親切な人はないかと思ふ処へ、親ちか  
 しく出入でいりを致す山平殿、殊ことに心底も正しく信実な人と見込んだか  
 ら、兄の仇あだうち討あに出立したいと助太刀を頼んだので有ろうが、山

平殿は私には然そうはいかん、御養子前の大切の娘御を私が若い身  
そらで女を連れて行くゆ訳には往いかん、両親の頼みがなければいか  
んなどと申されて、迎とてもお用いがないのを、止むを得ず助太刀を  
して下さいと照が再度貴公に頼んだは実に奇き特じな事で、頼まれて  
もまさか女を連れて行くゆ訳にもいかず、此方こちらは只ひたすら管頼むと云う、  
是は何うも山平殿も実に困った訳だが、私が改めてお頼み申す訳  
ではないが、山平殿、中根善之進殿を討つたは水司又市と私は考  
える、彼あの日逐電して行方知れず、落書らくがきだらけの扇子おうぎが善之進  
殿の死骸の側に落ちて有つたが、その扇子は部屋で又市が持つて  
いた事を私は承知して居いるから、敵かたきは私の考えでは又市に相違な  
し、お国表へ立廻る彼あアいう悪い心な奴、殊に腕前が宜しいから

ど  
何んな事を仕出しかすかも知れん、故に私が改めて貴公に頼むは、  
何うか隠おんみつ密になつてお国表へ参つて、貴公が何うか又市を取押  
えて呉れんか……照お前は何処迄も又市を探たずねて討たんければな  
らぬが、私から山平殿と一緒に下さいとは、何うも養子に  
来て間もなし、頼む訳には表おもてむき向いかんから、お前はお父様  
やお母様つかさまへの申訳に、私も武士の家へ生れ女ながらも敵討を致  
したい故、池の端の弁天様へ、兄の仇あだを討たぬ中うちは決して良人おつとを  
持ちませんと命に懸けての心願である処へ、強たつて養子をしろと  
仰しやるから養子をしたが、重二郎とは未いまだ同ひと衾つねを致しません  
のは、是まで私が思い立つた事を果はたさずば、何うも私が心に濟み  
ません、神に誓つた事もあり、仇あだうち討うちに出立致す不孝の段はどの



様にもお詫致す、無沙汰で家出致す重々不埒はお宥ゆるし下さいと、  
 文面は私わしが教えるから私の云う通りに書きなさい、また山平殿は  
 ……貴公ともに俱ともに行つて下さいとは云われないが、山平殿は国表へ  
 参つて彼かれを取調べ、助太刀をしてお照が仇討をして帰る時、貴公  
 も共に其の所へ行合ゆきあわし、幸い助太刀をして本意を遂げさせしと  
 云つてお歸りになれば、貴公の家はどうか潰つぶさぬ様に致そう、重  
 二郎刀に掛けても致すから、二人へ改めて頼む訳にはいかんが、  
 然うして仇あだを討たせて望のぞみを叶かなえてやつて下さい：お前は奉公した  
 事がないからお父様お母様に我儘を云うが、山平殿は親切なれど  
 も長旅の事、我儘な事を云つて山平殿に見捨なてられぬ様に中好なかよう、  
 なにさ若もし捨もてられては仇は討てず、亦これから先は長い旅、水

も異かわり氣候も違ちがうから、詰つらん物を食たべて腹はらを傷いためぬ様にしなさい、左ひだり様さまじゃアないか、何でも身みを大切たいせつにして歸かへつて来てくれなければ困こまりますぞ、縦たてえあゝは仰うやしやるが、二人で居ゐたから密通おぼしめと思おぼ召めすに違ちがいない、密通おぼしめもせぬに然しかう思おもわれては残念ざんねんと刃物やいば三昧さんまいでもすると、お父様お母様に猶なほ更さら濟さみませんぞよ、必ずとも道中みちのちゆうにて悪い物を食たべて、腹はらに中あたらぬ様にしなさるが宜よいのう、お照おしほ」

と五いつ月つきになるお照おしほの身重みぢゆうの腹はらを、重ぢゆう二郎にらうに持もつて居ゐります扇あふぎでそつと突つかれた時は、はツとお照おしほは有あり難がた涙なみだに思おもわず声こゑが出て泣な伏ふしました。

山平も面目なく、

山「何なにと共申訳はござらぬ、重々不埒至極な事拙者……」

重「いゝや少しも不埒な事はござらん、国表おいに於て又市どが何んな事を為するか知れん、万一重役あざむを欺あざむき、大事は小事より起る譬喩たとえの通りで捨置かれん……お父様お母様へも書置したを認ためるが宜よい……  
硯すざりばこ箱すを持って来な」

きん「はい」

重「硯箱を早く」

きん「はい」

重「何んだ是は、松魚節箱だわ」

きん「はい」

と漸く硯箱を取寄せて、紙筆を把らせましても、お照は紙の上に涙をぼろ／＼こぼしますから、墨がにじみ幾度も書損ない、よう／＼重二郎の云う儘に書終り、封を固く致しました。

重「これは私がお母様の何時も大切に遊ばす彼の手箱の中へ入れて置く……きん、何うも長い間度々照が来てお前の家でも迷惑だろう、主人の娘が貸してくれと云うものを出来ぬとは義理ずくで往かんし、親切に世話をしてくれ忝ない、多分に礼をしたいが、帰り掛であるからう、是は誠に心ばかりだが世話になった恩を謝するから」

きん「何う致しまして私わたくしがそれを戴いては済みません、何うかそれだけは」

重「いゝや、其の替り頼みがあるが、今日私わしが来て照と山平殿に頼んで旅立をさせた事は、是程も口外して呉れては困る、少しも云つてはならぬよ、口外して他ほかから知れゝば、お前より外ほかに知る者はないから抛よんどころなくお前を手に掛けて殺さなければならんよ」

きん「はいくくくどう致しまして申しません」

重「じゃア宜しい、さア山平殿、照早く表へ出なさい、宜しいから先に立つて出なさい」

二人は何事も只ただ有難いと面目ないで前後不覚ようの様になつて、重二郎の云う儘に表へ出に掛る。台所口の腰障子あを開け、

重「大きに厄介になつた……さア心配しなくも宜よい、出なさい」

照「はい：金や長々お世話になりました」

きん「それじゃア直ぐに遠い田舎へいらつしやいますか、親切にあゝ仰しやつて下さるから、本当に敵かたきを討つてお出でなさいよ」

照「誠に面目次第もございません」

重「口をきいてはいかん、さア〜」

と二人を連れて出ると、傳助は提灯を持つて路地に待つて居りまして、

傳「誠に何うも宜く御勘弁なすつて」

重「これ静かに致せ、ふたり兩人を手討に致し他たを騒がしては宜しくないから」

傳「へい……」

重「人知れぬ処へ行つてりようにん兩人とも討果すから袂たもとを押えて遁にがさぬよ  
うに」

傳「へえ……へ宜しゅう」

重「これ提灯を腰へさせ」

傳「へい」

と兩人の袂を押えて重二郎に従つて、池の端弁天通りから穴の  
稻荷の前へ参りますと、

重「これく、もう往来も途切れたな」

傳「へえー何うぞ御勘弁の出来ます事なれば願ひとう、わたくしこ私は斯う  
云う事とは心得ませんで」

重「静しずかに致せ、照、山平、不埒至極な奴、予かねて覚悟があるう、それへ直れ」

と云いながらすらりと長いのを抜きましたから、二人は彼あは云つて出たが、是で手討にされることかと覚悟をして、両手を合わせ頸くびを伸ばして居る。

重「女から先まず先へ斬らなければならん、傳助広小路の方から人が来やアしないか」

傳「いゝえ」

と覗うかがう傳助の素頭すこうべを、すぽんと抜打ぬきうちにしましたが、傳助は  
 好い面の皮。

重「あゝいや驚かんでも宜しい、主人の事を有る事無い事告つげぐち口



を致す傳助、家に害をなす奴、此処こゝで切殺きりころせば誰たれも知る者はな  
い、試ためし切ぎりか何かに遭あつたのだからうで済んでしまふ」

と小菊の紙を出して血を拭ぬぐい、鞆さやに納め、有合せの金子を出し  
て、

重「多分に持参すれば宜かつたが、今まで心得なかつた故、ほん  
の持合せで二十金ある、路銀の足しにも成るまいが、是でお前が  
仇あだを討つて帰つてくれんでは、私わしが一生不孝者で終らんければな  
らん、お前の家も絶えてはならん、照も実に道に背いた女と云わ  
れるもお前の心一つであるぞよ……我儘者だが何卒どうぞ面倒を見て下  
さるようにお頼み申すぞ」

山「あゝ忝かたじけのうござる」

と重二郎の心底何とも申し様もございせんから、貰いました路銀を戴きます。

重「達者で行つて参れよ」

とちやらく雪駄穿せったばきで行くのを、二人は両手を合せて泣きながら見送ります。重二郎は深い了簡がある事で、其の儘屋敷へ帰りましたが、二人は何うしても仇を討たんでは帰られません。これから仇討出立に相成りますが、一寸ちよつと一息つきまして。

## 十二

さて、儲お話は二に分れまして、水司又市は恋の遺恨で中根善之進を

討つて立退たちきました。本もとはと云えば増田屋の小増と云う別嬪べっぴんからで、婦人に逢つては何どんな堅い人でも騒動が出来ますもので、だがこの小増は余程勤めに掛つては能よく取つた女と見えて、その事を後あとで聞いて、

小増「彼あの時私があゝ云う事をした故斯こう云う事になつたのだらう、中根はんは可愛相な事をした、氣の毒な」

とくよくよふさ鬱ぎまして見世を引いて居りますから、朋輩は「くよくよふさしないでお線香でも上げて、お前まはんお題目の一遍もあげてお遣やなはい」

と勧められ、くよくよふさして客を取る気もなく情じょうのある様ふりな振ふりをするも外見みえかは知れませんが、皆来ては悔くやみを云う。処がが翌年に

なつて風ふうと来た客は湯島六丁目藤屋七兵衛と云うあきゆうど商人、糸いと紙みを卸おろす好よい身代で、その頃此の人は女房なくなが亡つて、子供二人ありまして鬱ふさいで居るから、仲間の者が参会の崩れ

「根津へ行つて遊んで御覧なさらんか、ちようど桜時で惣門内を花魁おいらんの姿はちもんじで八文字を踏むのはなか／＼品が好く、吉原も跣足はだしで、美くしいから行つて御覧なさい」

と誘よわれて行くと、悪縁と云うものは妙なもので、増田屋の小増は藤屋七兵衛の敵娼あいかたに出る、藤屋七兵衛の年は二十九だが、品が好い男で、中根善之進に似ている処から一寸ちよつと初会よに宜く取つたから足を近く通う氣になり、女房はなし、遠慮なしに二会うらな馴染じみをつけ、是から近ちかしく来るうち互あに深くなり、もう年季あとは後二

年と云うから、そんなら身請みうけしようと言ひ、大金を出して其の翌年の二月藤屋の家うちへ入る。手に採とるな矢張野に置け蓮華草れんげそう、家へ入ると矢張並の内儀おかみさんなれども、女郎に似合わぬ親切に七兵衛の用をするが、二つになるお繼つぎという女の子に九つになる正しょう太郎たろうという男の子で悪戯いたずら盛り、可愛がつては居りますけれど、何どうも悪態をつき、男の子はいかんもので、正おら「己とこん処かあのお母はお女郎だ、本当の好よい花魁ではない、すべた女郎だ」

なんとと申しますから、

増「小憎らしい、此の子供がきは悪態をつく」

と頬ほ片ぺたを捻つねる、股たぶらを捻る、女郎は捻るのが得手かむろで、禿

などに、

「此の子供がきアようじれつてえよ」

など、捻ぢるものでございます。正太郎を其の如くに捻ぢつたり打ちようちやく

擲なを致しますから痣あざだらけになります。さア奉公人は鼻ひいき貞ぢんを

する者もあり、又先せんの内儀おが居れば斯こんな事はないなどと云い、

中には今度の内儀は惣菜の中に松魚かつおぶし節みりんに味淋あじを入れるから宜いい

などと小遣こづかいを貰もらうを悦よろこぶ者もあり、小僧あちらも彼方こちら此方あちらへ付きまし

て内うちがもめます。先妻かさいは葛西こいの小岩井村いむらの百姓ぶんざえもん文左衛門もんざえもんの娘むすめで、

大根だいこん畠はたけという処あそいに浅井様あさいと云うお旗はたもと下したがございまして其の

処ところへ十一歳から奉公をして居りましたから、江戸言葉になりました。て、それに極堅ごくくい人で、家を治めて居りました処ところが、天わか死かしを致いた

しましたけれども、田舎は堅いから娘を嫁付けますと盆暮には屹きつと参りますが、此方こちらでは女房が死んでからは少しも音信おとづれをしない、けれども、向うには二人の孫があるので、柿時には柿を脊負しよつて婆様ばあさまが出掛けて来ます。

婆「はア御免なせえ」

男「へいお出でなさい、久しくお出でなさいませんね」

婆「誠に無沙汰みなアしました、皆みんなは変りねえか」

男「へい皆みな変る事もござりません：あの坊ちやん田舎のお婆さんがお出でなすつたよ」

と云うと嬉しいから、ちよこくと駈出して来て、

正「お婆さんおいで」

婆「何うした、毎度来てえ〜と思つても忙しくて来られねえで、  
汝<sup>われ</sup>が顔を見てえと思つて来たが、なにかお繼は達者か、なにか店  
へも出ねえが瘡<sup>ほうそう</sup>瘡<sup>そう</sup>したか、然<sup>そ</sup>うだつてえ話<sup>わ</sup>い聞いた、それ汝<sup>われ</sup>が  
に柿<sup>かき</sup>を持つて来た、はア喰<sup>く</sup>え」

正「柿、有難う、田舎のお婆さんが柿を持つて来てくれると宜<sup>い</sup>  
つて然<sup>しか</sup>ういつて居<sup>ゐ</sup>たが、お父<sup>とつ</sup>さんが、あのまだ青<sup>あ</sup>いから最<sup>も</sup>う少し  
たつて、お月見時分には赤<sup>あか</sup>くなるからつてそう云<sup>い</sup>つたよ」

婆「何<sup>なに</sup>だか知<sup>し</sup>らねえがお母<sup>つかあ</sup>が異<sup>ちが</sup>つて何<sup>なに</sup>うせ旨<sup>あじ</sup>くは治<sup>おさ</sup>まるめえ、汝<sup>われ</sup>が  
憎<sup>にく</sup>まれ口<sup>くち</sup>でも叩<sup>たた</sup>いて、何<sup>なに</sup>うせな家<sup>うち</sup>もうなやにやア往<sup>い</sup>くめえと文<sup>ぶん</sup>  
吉<sup>ち</sup>も心配<sup>しんぱ</sup>して居<sup>ゐ</sup>るが、何<sup>なに</sup>うも仕<sup>し</sup>方がねえ、早<sup>はや</sup>く女親<sup>むすめ</sup>に別<sup>わか</sup>れる汝<sup>われ</sup>  
だから、何<sup>なに</sup>うせ運<sup>うん</sup>は好<sup>よ</sup>くねえと思<sup>おも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るが、何<sup>なに</sup>でも逆<sup>さか</sup>らわずに



はいくと云つて居ろよ」

十三

正「はいくと云つて居るの、あのねえお手習に往くのも六つの六月から往くと宜いて云つたけれども早いからてね、七つの七月から往く様になつたから、先にはお弁当なんぞも届けて呉れるのだが、今度のお母さんが来てからは然う往かないの、お父さんが何処かへ行つてもお土産に絵だの玩具だの買つて来たが、此の頃は買つて来ないでお母さんの物計り簪だの櫛だのを買つて来て、坊には何にも買つて来てくれないよ」

婆「汝われのような可愛い子があつても子に構わず後妻のちぞいを持ちてえて、おすみの三回忌も経たねえうち、女房を持ったあから、汝よりは女郎じやうろの方が可愛いわ……虐いじめるか」

正「怖ろしく虐めるの、縁側から突飛つきとばしたり……こんなに疵きずがあるよ、あのね裁縫しじふが出来ないに出来る振をして、お父さんが帰ると広げて出来る振をして居るの、お父さんが出て行くと、突然片付けてえんどうまめ 豆まめが好きで、湯呑へ入れて店の若衆わかいしに隠して食べて居るから、お母さんお呉やれつて云つたら、遣やらないと云つてね、広がつて居るから縫物しじふを踏んだら突飛して此処こゝを打つて、顛あごへ疵が出来たの」

婆「呆でかれた、大い疵があるに気が注つかねえで居た、それで汝われ黙つ

て居たか、父ちやんに云わねえか」

正「云つた、云つたけれどもお母さんが旨く云つて、おのお前の着物を縫しゅうつていと踏んだから、いけないと云つたら、態わざと踏んだから縫物を引張ひっぱつたら滑すべつて転そんだつて然そういつて嘘をつくの、先せんのお母さんが生きていと宜いいんだけれども、お婆さんの処へ逃いげて行いこうと思つた、連れてつて呉いれねえか」

婆「おゝ連れて行かねえで、見殺しにする様なもんだから、可愛そうに、汝われに食くわせべえと思つて柿かきを持って来たゞ」

正「あのね 麦むぎ 焦がしが来ても、自分で砂糖を入れて塩を入れて搔か廻ましてね、隠かして食べて、私には食べさせないの、柿かきもね、皆みんなな心安やすい人に遣やつて坊ぼには一つしか呉いれないの、渋しぶくツていけない

のを呉れたの」

婆「それは父ちゃんに汝われいうが宜よい」

正「云つたつていけない、いろんな嘘をついて云つけるからお父さんは本当と思つて、あのお母さんは義理が有るのだから大事にしなければならぬ、優しくすれば増長する、今からそれじゃアいけないつてねえ、一緒になつてお父さんが拳骨ぶで打つて痛いやア」

婆「あれえ一緒になつて、呆れたなア本当にまア、好ええ、七兵衛どんおれに己逢つて、汝われだけはお婆さんが連れて行く、田舎だアから食くいもの物アねえが不自由はさせねえ、十四五になれば立派とけな処へ奉公に遣つて、藤屋の別家を出させるか、然そうでなければ己が方の

別家えさせるから一緒に行くかべっけ

正「行きたいやア、だから田舎で食物が無くつてもお母さんにつね抓られるより宜いから行くよ」

七「何方かお出でなすつた……おやお出でなさい、榮二郎お茶えいじろう

を持つて来てお婆さんに上げな、田舎の人だから餅菓子の方が宜いから……宜くお出でなすつたね、お噂ばかり致して居りまして、此方から一寸上らなければ成らんですが、何分忙がしいので店を空けられないで、御無沙汰ばかり、まア此方へ」

婆「はい御免なせえ、御無沙汰アして何時も御繁昌と聞きましたいつが、文吉も上らあがんではならねえてえ云いますが、秋口は用が多いで参り損めえなつて済まねえてえ噂ばかりで、お前めえさんも達者で」

七「まことに宜くお出でなすつた、帝たいしやくさま釈しやく様へお詣まいりに行こう

と思つて、歸りがけにお寄り申そうとお梅うめとも話をして居たが：

：お梅」

梅「おや宜く入いらつしやいました、宜く田舎の人は重い物を脊負しよつてねえ」

婆「はい御無沙汰、はい己おらが屋敷内に実なりました柿で、重くもあ

るが何どうかまア渋が抜けたら孫に呉れべえと、孫に食わしてえ

つかりで、重おもえも厭いとわず引提ひっさげて来ましたよ……はア最う構わず、

飯も食つて来ましたから、途中で足つかい労れるから蕎麦ア食うべえ

と思つて、両国まで来て蕎麦ア食つたから腹がくちい、構つて下

さるな……七兵衛さん、私わしめえ参つて相談致しますが、惣領の正太郎は

私が方へ引取るから」

七「何なんで、何どういう訳で」

十四

婆「何ういう訳もねえ、おらが方へ来てえだ云うが、おらが方へ置きたくはねえが、お前めえさま様ア留守勝うちで家の事は御存じござんねえが、悪いたずら戯はたは果すかは知らねえが、頑がんぜ是とおがねえ十にもなんねえ正太郎だから、少しぐれえの事は勘弁して下さえ」

七「あれさお婆さん極りを云つて居るぜ、来ると愚痴を云うが、私わしの子だもの、奉公人も付いて居るわね……正太は又田舎のお婆

さんに何か云ツつけたな」

正「何も云ツつけやアしない、お婆さんが彼方あつちへ連れて行くてえから行きてえや」

七「行きたいと」

婆「何ういう訳で大事の親父おやじをまず捨て、己おらが方の田舎へ来て

え、不自由してもと児こまごろ心にも思うは能くくよだんべえと思うか

らお呉んなさえ、縁えんきり切でお呉んなさえ」

七「そんな馬鹿な事を云つてはいけません」

婆「何故なぜそんならぞんぜえに育てるよ」

七「ぞんざいに育てはしませんよ」

梅「旦那……正太郎が云ツつけたのでお婆さんは然そうと思つて居



るのでしよう、私だつても頑是がないから、それは彼れも我儘を致しますが、邪慳じやけんに育てることは出来ません、仏様の前も有りますから、私も来たての身の上で私が邪慳に育てるようなことは有りませんよ」

婆「邪慳にしないでえ、これが顛あじの疵きずは何うした、なぜ縁側から突つき落おとした、お女じやうろ郎らだアから子を持つたことが無なえから、子の

可愛い事は知りますめえが、あんたに子が出来て御覽おらなさえ、一つでも打はくたことは出来ねえよ、辛いから兎心にも己おらア方かたへ行きてえと云うのだ、おらは正太を此こゝ処ところへは置かれましねえよ」

七「お婆さん何処どこまでも正太は連れて行くと云うが、家督させよと云うので何う有つても遣やらぬてえば何うする」

婆「遣らぬと云えば命に掛けても連れて行きやすべえ、打つたり擲<sup>たて</sup>えたりして疵を付けるような内へは置かれやしねえじやアござんねえか、何処へ出てもお代官様へ出ても連れて行く<sup>い</sup>だア、はア」

七「そんな事を云つて……正太手前<sup>てめえ</sup>お婆さんの方へ行きたいか」

正「行きたいや」

婆「それ見なさえよ、善<sup>よ</sup>く云つた、何うあつても縁切で」

七「そんなら上げましょう、其の代<sup>なん</sup>り何<sup>なん</sup>ですぜ、お前<sup>まえ</sup>さんの処とは絶交ですぜ」

婆「絶交でも何でも連帰りやすべえ」

七「行<sup>ゆき</sup>通<sup>かよ</sup>いしませんよ」

婆「当りまえ、おらア方で誰<sup>こ</sup>が来<sup>こ</sup>べえ、お前<sup>めえ</sup>さんのような女房が

死んで一周忌も経たねえ中、女郎を買って子供に泣きを掛ける  
ような人では、何んな事が有つてもお前さんの側へは参りませ  
よ、碌な物も喰わせねえではア

梅「あゝ云うことを云つて、正太が云ツつけるからですよ」

婆「何云つたつて是が皆な知つて居らア、何だ、さア正太来い」

と中々田舎のお婆さんで何と云つても聴きません。到頭強情で、  
正太郎を負つて連れて帰つた。さア一つ災が出来ますと、それか  
らとんく拍子に悪くなります。

## 十五

翌年湯島六丁目の藤屋火事と申して、自宅から出火で、土蔵二たとまえ戸前あざぶ焼け落ち、自火じかだから元の通り建てる事も出来ませんで、麻布へ越しましたが、それから九ヶ年過ぎますると寛政四壬子みずのえ年ねどし麻布大火でござります。市兵衛町いちべえちようの火事に全焼まるやけと成りまして、たちま忽ちの間に土蔵を落す、災難がある、引続き商法上では損ばかり致して忽ち微禄あきんどがたして、只今の商人方ちがと異つて其の頃は落るも早く、借財かさいも嵩み、仕方が無いから分散して、夫婦の中に十歳えつちゆうになりますお繼いみずごおりたかおかという娘を連れて、行く処ゆところもなく、越中えつちゆうの国射水郡高岡まんすけと云う処に、萬助まんすけという以前の奉公人が達者で居ると云うから、これを頼ゆつて行き、大工町だいくちようという片側町かたかわまちで、片側はお寺ばかりある処へ荒物店あらものみせを出し、詰らぬ物を売つ

て商い致す中うちに、お梅もだんく慣れまして、外ほかに致いたしかた方も無  
いから人仕事ひとしごとを致しますし、碌には出来ませんが、前町まえまちは寺  
が多いからお寺の仕事つしよべやをします。和尚さんの着物を縫つたり、納な  
所部屋つしよべやの洗濯うちをしたり、ようくと細い煙りを立てまして居り  
ます中、お話は早いもので、もう此の高岡へ来ましてから三年に  
なりますが、大工町そうじじに宗慈寺えいぜんという真言宗の和尚さんは、永禪  
と申して年三十七でございます。此の人は誠に調子の宜いい和尚さ  
んで、檀家の者の扱あつかいが宜しいから信じまして、畳を替える本堂  
の障子を張替はりかえる、諸処を修繕するなど皆檀家の者が各番かくばんに致  
す、田舎寺で大黒の一人ぐらゐは置くが、この和尚は謹慎つししみのよ  
い人故仕事はお梅を頼み、七兵衛が来ると調子宜くして、

永「お前は以前もとたいけ大家と云うが、災わざわいに遭あつて微禄して困るだろう、資本もとでは沢山は出来ぬが十両か廿両も貸そう」

と云つて金を貸す。苦し紛れに借ると返せないから言訳に行く  
と、

永「もう十両も持つて行け」

と三四十両も借財が出来ましたから、お梅は大事にしてはお寺へ手てづた伝たいに行き宜く勤めます。ちようど九月節句前、鼠木綿の着物あがを縫上げて持つて行くと、人が居ないから台所から上り、

梅「あの眞しんたつ達さん、庄しょうきち吉さん……居ないの、何方どなたも入いらつしやいませんか」

永「誰たれじや」

梅「はい」

永「お、お梅さんか、此方こつちへ来なさい」

梅「はい、まことに御無沙汰致しました」

永「い、いや最もう何どうも、もう出来でたかえ、早いう、今ねえ皆つかい使に遣やつたゞ、眞達も庄吉も居ないで退屈じゃア有るし、それに雨が降つて来た故」

梅「い、え大した雨でもございませぬ、どうと来るようで又あがりそうでございますよ」

永「そうかえ、檀家の者も来ぬから一人で一杯遣つて居たのよ、お、着物きにくがもう出来でたか、好よう出来た」

梅「お着きにく悪うございませうが……お着きにく悪ければ又縫直しますか

ら召して御覽なさいまし」

永「好う出来た、一盃酌いで呉れんかえ、何ぼう坊主でも酒の酌は女子が宜え、妙なものだ、出家になつても女子は断念出来ぬが、何うも自然に有るもので、出家しても諦められぬと云うが、女子は何うも妙に感じが違う」

梅「旨いことを仰しやること、あなた此の間の松魚節味噌ね、あれは知れませんか又て来ましょう」

永「あれか、旨かつた、あれ宜えのう……一盃遣りなさい」

と一盃飲んでお梅に献す、お梅が飲んで和尚に献す。その中酒の酔が廻つて来まして、

永「眞達は帰りませんわ、大門まで遣つたが、お梅はんお前も



まア一昨年から前町へ来て、彼のあのようにまア夫婦暮しで宜よく稼かぎ  
 なさるが、七兵衛さんは以前もと大家の人ですが、運悪く田舎へ来て  
 なア気の毒じや、なれど此の高岡は家数やかかずも八千軒もある処で、良  
 い船ふなつき着とこの処じやが、けれども江戸御府内にいた者は何処どこへ行つ  
 ても自由の足りぬものじや、さぞ不自由は察しますぞよ……お梅  
 はん私わしをお前忘れたかえ、覚えて居まいのう」

## 十六

梅「はい覚えてと仰しやるは」

永「私わしの顔を忘れたかえ、十三年も逢わぬからなア」

梅「そうでございますか、じゃア旦那江戸にいらつしやいましたことが有るの」

永「お前は以前もと根津の増田屋の小増という女じょうろ郎だね」

梅「あれ不思議な、旦那何どうして知れますの」

永「何うしたつて、それは知れる、忘れもしない十三年あと前、九月つきずえの月末からお前の処へ私わしも足を近く通つた、私は水司又市だが忘れたかえ」

梅「おやまア何うも、旦那然そう仰しやれば覚えて居ますよ、だけれどもお髪ぐしが變つたから些ちつとも分りませんよ……何うもねえ」

永「何うもたつて私わしは忘れはせんぜ、お前此こゝ処へ来ると直すぐ知れた、若いうち惚れたから知れるも道理、私は頭そり了り剃りこかして此の

宗慈寺へ直つて、住職して最う九年じやアが、斯うなつてから今  
 まで女子おなごは勿論なまくさ腥い物も食わぬも皆お前故じやア」

梅「私ゆえとは」

永「忘れやアしまい、お前かようが斯様じやア、榊原藩の中根善之進は  
ふかま間夫じやアからと云うて、金わしを私の膝へ叩き付けてな忘れやアし  
 まい」

梅「あれ昔の事を云つては困りますね、年の往いかない中うちは下くだらな  
 いもので、女郎じよろう子供とは宜よく云つたもので、冥利みよりが悪いことで、  
 その冥利で今は斯うやつて斯う云う処へ来て、貧乏しよたいの世帯しよたいにわ  
 くくするも昔の罰ばちと思つて居りますよ」

永「丁度あのそれ忘れやアせんで、あの時叩付けられたばかりで

ない、大勢で悪あつこう口云われ、田舎武士と云つて、手前などが女子おなごを買つても惚れられようと思うは押おしが強いなどと云つて、重役の権けんを振ふるつて中根ちようちやくが打擲うちやくして、扇子かなめの要かなめでな面部まぢぶせを打割られたを残念と思つて、私わしは七軒町の曲角まがりかどで待伏まちぶせして、あの朝善之進を一刀に切つたのは私じゃアぜ」

梅「あれまアどうも」

永「宜よえか、斯こう打明けた話じやが切つてしまつて眼さが醒さめて、あゝ飛んだ事をしたと思つたがもう為してしまひ是非がない、とても屋敷には居いられない、外ほかに知己しるべがないから風ふうつと思ひ付き、此こ処ゝに伯父が住職して居るから金まで盗んで高飛たかとびし、頭そつを剃そつこかして改心するから弟子にしてと云うて、成らぬと云うを強たつて頼み、

斯う遣つて今では住職になつて、十三年も衣を着て居るもお前故  
じやないか、人を殺したのもお前故じや」

梅「何うもねえ、然うで、何うもねえまア、何うもねえ、元は私  
が悪いばかりで中根さんも然ういう事になり、罪作りを仕ました  
ねえ」

永「七兵衛さんは知るまいが、金を貸すもお前故だ、是まで出家  
を遂げても、お前を見て私は煩惱が発つて出家は遂げられません  
ぜ」

梅「お前さん……あれ、何をなさる、いけませんよ、眞達さんが  
帰るといけません、あれ」

永「私ももう隠居しても宜えじやア、どの様な事が有つても此処

は離れやアせんじや、後住ごじゆうを直して、裏路うらみちの寂しい処いんぎへ隠  
 居家よやア建て、大黒の一人ぐらいあつても宜えじやア、七兵衛  
 さんが得心なれば何うでもなる、此方こつちへ来て金も沢山貯めて居る  
 が、嫌かえ、私はお前故斯う遣つて人を殺して出家になり、お前  
 が又来て迷わせる、罪じやアないか」

とぐつと手を引き、お梅の脊中へ手を掛けて膝つきよを突寄せた時は、  
 お梅はあゝ嫌と云うたら人を殺すくらいの悪僧、どんな事をする  
 か知れぬ、何うかして此処を切抜け様と心配致すが、此の挨拶は  
 何うなりますか、一寸ちよつとひといき一息つきまして。

藤屋の女房お梅は、十三年振ではか図らずも永禪和尚に邂逅めぐりあいま  
 して、始めの程は憎らしい坊主と思ひましたなれども、亭主が借  
 財も有りますから一か遁れいッのがと思ひましたも、固もとより汚よごれた身体ゆ  
 え、何うかして欺だまし遂おおせて遁れようと言いくるめて居ります中うちに、  
 度々参ると、彼方むこうでも親切に致しますも惚れて居りますから、  
 何事もお梅の云う通りに行ゆきとゞ届き、亭主は窮して居りますから、  
 固より不実意の女と見えて、永禪和尚の情にひかされて宗慈寺へ  
ひじまり日泊を致す様に成りましたが、お梅は年三十になりますから少  
 ししがれて見えますが、色ある花は匂い失せずの譬たとえ、殊ことに以前  
 勤めを致した身でございますから取廻しはよし、永禪和尚の法衣ころも

を縫い直すと申して、九月から十月の中頃まで泊り切りで、家はお繼という十二歳になる娘ばかりで、一日も帰つて来ませんで、まことに不都合だから、藤屋七兵衛は腹立紛れに寺へ来て見ると、台所に誰も居りません。

七「庄吉さん……お留守でげすか……御免なせえ」

と納所部屋へ上つて、

七「開けても宜うがすか……おや眞達さんも誰も居ない、何処へ

お出でなさつた……旦那様お留守でげすか、お梅は居りませんか」

と納所部屋から段々庫裏から本堂の方へ来ると、本堂の後に一

寸した小座敷がございます、此処にお梅と二人で差向い、畜生

めという四つ足の置火燵で、ちんく鴨だか鶯だか小鍋立の



楽しみ酒、そうつと立たちぎ聴きをするとお梅だから、七兵衛はむつと  
 致しますのも道理、身代を傾け、こんな遠国へ来て苦勞するも此  
 の女ゆえ、実に斯こう云うあまツちよとは知らなんだ、不実な奴と  
 癩かんべき癩べきが込上げ、直ぐに飛込んで髻たぶさを把つてと云う訳にもいきま  
 せん、坊主ですから鉄鍋の様に両方の耳でも把るか、鼻でも劊そご  
 うかと既に飛込みに掛りましたが、いや〜お梅もまさか永禪和  
 尚に惚れた訳でも無かろう、この和尚に借金もあり、身代の為  
 した事かと己うぬぼれ惚ぼて、遠くから差配人が雪隠せっちんへ這入った様にえ  
 へん〜咳せき払いして、

七「御免なさい」

永「お、誰たれかと思うたら七兵衛さん、此方こつちやへお這入りなさい」

七「へい御無沙汰を致しました、お梅が毎度御厄介に成りまして」  
 永「いゝやお前も不自由だろうが綿わた入物いれものが沢山有るので、着物を直すにもなア、あまり暮の節季になると困るから、今の中うちにと云うてな斯こうやって精出してくれる、私わしも今日は好よい塩梅あんばいに寺に居て、今気がつきるから一杯と云うて居たが、好い処へ来たのう、相手欲しやの処へ幸いじやアのう、さア一杯、さア此方こつちへ這入りなさい」

七「へい：有難うございます、お梅時々家うちへ歸つて呉んな、もう子供ばかり残して店を明あけツ放ばなしにして、頑是がんぜねえお繼ばかりでは困るだろうじやアねえか、此方こつちさまへ来ていても宜いいが、家からを空あきでは困るから云うのだ」

梅「あゝ、だからさ、もう沢山たんとお仕事もないから私は一寸ちよつと帰ろうと思つたが、けれどもねえ、綿入物もして置こうと思つて、二三日に仕舞になると思つて、一時いちじきに慾張つて縫つて居るのさ、さぞ不自由だろうね」

七「不自由だつて此方こちらさまでも仕事は夜でも宜いいやアな、昼の中うち店を明ツ放しにして、年も往いかねえ子供を置いて来て居ては困るからな、それに此方では夜の御用が多いのだろうから夜業よなべしごと仕事にしねえな、昼は家で店番をして夜だけ此方さまへ来きねえな、おれも困るからよ」

永「あゝそれは然そうじゃア、内は夜で宜よい、まア詰らん物じゃアが一杯遣りなさい」

七「有難う……此のお座敷は今まで存じませんでした、こんな小座敷はないと思つて居りました、へえ此の頃お手入で、なるほど斯こう云う処がなければ不自由でしょうね、大層お庭の様子が違いましたな」

永「あゝ彼あそこ処に墓場が有るから参詣人が有るで、墓参りのお方に見えぬように垣根して囲かこつたので」

七「なるほど左様で、墓場から覗のぞかれては困りましたよ、旦那は薬喰いと云うが、此の頃は大層腥なまぐさ物を喰あがりますが、腥物を食つたつて坊様が縛られる訳でもないからねえ、当あたりまえ然で、旨い物は喰つた方が宜ようがすね」

永「はい実はな時々養いに喰やるじや、魚喰うたとて何も咎とがめはな

いが、仏の云うた事じゃアから喰わぬ事に斯う絶つて居るが、喰うたからつて何も其の道に違たごうてえ訳ではないのよ」

七「然そうでしょうね、これは然うでしょう、些ちっとは精分を付けなければなりませんね、旦那今日は御馳走に成ります積りで」

永「左様ともね」

七「実は旦那お願いが有りますが、お前さんにも拝借致しましたし、その上こんな事を云つては済みませんが、包つゝみを脊負しよつて僅わずか

旅籠町はたごまちを歩いたぐらいでは何程の事も有りませんで、此の頃は

萬助の世話で替女町ごぜまちへ行きゆますが、旅籠屋も有りますから些とは

商いも、替女町だけにまア小間物は売れますが、荒物屋じゃア仕

様がございません、それに今度金沢から大聖寺山たいしようじやまなか中の温泉の

方へ商いに行きたいと思ひますのき、就ては小間物を仕込みたく存じますが、資本が有りませんから、拝借のあるに願つては濟みませんが沢山たんとは入りません、まア五十両有れば山中の温泉場へ行つて、商いに少し利があれば金沢で物を買つて来る、大きい方の商いは今までに覚えが有りますので、元私わたくしはお梅も知つて居ますが、奉公人の十四五人も使つた身の上で、此奴こいつは今は婆アですが若い中うちに了簡違りょうかんちがひいをして、此奴が来たからと云う訳でも有りませんが此様こんなに零落れいらくして、斯う云う処へ引込みひっこ、運の悪いので、する事なす事損ばかり、誠に旦那濟まねえが御贔屓ついで序ついででに五十両貸して呉くんなさいな」

永「貸して遣ろうとも、お前が資本もとでにするなれば貸しましょう、宜よいわ、宜よいが然そう云う事は緩ゆっくり相談しなければならん、何どの様ようにも相談しよう……お、酒が無くなつたが折角七兵衛さんが来てのじや、酒がなければ話も出来ぬ、お梅さん御苦労ながら、門前では肴さかなが悪いから重箱を持って瞽女町へ往いつて、うまい肴を買つて七兵衛さんに御馳走して……お前遠くも瞽女町へ往いつて来て呉れんか、とてもうまいものは近辺にはないからのう」

梅「じやア往つて来きましよう」

七「往つて来きねえ、御馳走に成るのだから……旦那え、お梅も追お

いく々婆アに成りましたが、あの通りの奴でね、また私も萬助より他に馴染がないので心細うございます、お梅も此方こちらへ上るあがのを樂しみにして居ります、旦那可愛がつて遣つて、あんな奴でも一寸と泥水へ這入った奴で、おつう小利口なことをいうが、人間は余り怜悧りこうではないがね、もし旦那、お相手によければ差上げますぜ、だが上げる訳にもいきませんかね、私も苦勞を腹一杯した人間ですから、旦那が私わたしを鼻屑わたくしにして下されば、話合いで貴方あなたは隠居でもなすつてねえ、隠居料を取つて樂に出来るお身の上きりに成つたら、その時にやア御不自由ならお梅は仕事に上げツ切きりにしても構わねえという心さ」

永「そりやまさか他人ひとの女房を借りて置く訳には往いかんが、仕事



も出来る大黒の一人も置きたいが、他見たけんが悪いから不自由しよこは詮と事とがないよ」

七「もしそれはお前さんの事だから屹度きつと差上げますよ、それにお梅はお前さんに惚れて居りますぜ、ねえ宗慈寺の旦那様は何どうも御苦労なすったお方だから違ちがう、あれでお頭つむりに毛けが有あったら何どうだろうなんぞと云いいますぜ」

永「こりや、その様な詰つらぬ事を云いうて」

七「それは女じょうろ郎らうの癖くせが有ありますから……浮気も無理は無ないので、もう酒は有ありませんか」

永「今来るが、私わしはねえ酒を飲のむと酒しこなしを為しなければいかぬから、腹はらこなしを為する、お前見まへみておいで」

と藁草履わらぞうりを穿はいてじんじん端折ばしよりをして庭へ下りましたが、和尚様のじんじん端折まるぐけは、丸帯の間へ裾すそを上から挟はさんで、後うしろ鉢巻はちまきをして、本堂の裏の物置から薪割まきわりの柄えの長いのを持つて来て、ぽかんくと薪を割り始めましたが、丁度十月の十五日こはるなぎ小春風で暖かい日でございます。

七「旦那妙なことをなさるね」

永「いや庄吉は怠わしけていかぬから私が折おり々割くるのさ、酒を飲んだ時はこなれて宜いいよ」

七「なるほど是れは宜ようございましょう、跣足はだしで土を踏むと養生くすりだと云いますが、旦那が薪を割るのですか」

永「七兵衛さん薪炭を使わんか、檀家から持つて来るが、炭は大だ

分いづ良いい炭いじやア、来て見みなんせ……此こ方ちやに下駄げが有あるぞえ」

七「何ど処こに下駄げが」

永「それ其そ処こに見みなさい」

七「成程なりこれは面白おい妙めな形なりで、旦那だんなの姿すがたが好こいねえ、何なんうもあなた虚み飾えなしに、方丈ほうじやう様さまとか旦那だんな様さまとか云いわれる人の、薪きを割わるてえなア面白おいや」

永「七兵衛しちべゐさん、先刻さつきお前まへ、私わしにおつう云い掛かけたが、お前まへはお梅うめはんと私わしと訝おかしな事ことでも有あると思おもつて疑うたぐつて居ゐやアせぬか」

七「旦那だんなもし、私わしが疑うぐるも何なんもねえ、貴方あなたが隠居いんきよなさればお梅うめを上あ切きりにしても宜いいので、疾とうに当人あたりにも其そのの心こころが有あるのだから、その代しろりにねえ貴方あなた」

永「おい、私はお前はんな女房を貰い切りになりたいと何時頼みました」

七「頼まねえと、頼んでも宜いじやアねえか、吸漕しではお気に入りに入りませんか」

永「これ私も一箇寺の住職の身の上、納所坊主とは違うぞえ、それはお前はんがお梅さんと私が訝しいと云うては、夫ある身で此の儘には捨置かれんが」

七「捨置かれんたつてお前さんも分りませんね、お梅はお前さんと何うなつて居ると云うのは眼が有りますから知つては居ますが、何も苦勞人の藤屋七兵衛知らねえでいる氣遣いはねえのさ」

永「こりや私は覚えなぞ、え、や何う有つても、そんな事をし

た覚えないわ」

と大声を揚げて云うより早く、柄の長い大割おおわりという薪割で、七兵衛の頭上を力に任せ、ずうーんと打つと、

七「うーん」

と云いつゝ虚空を掴つかんで身を顫ふるわしたなりで、只ただ一ひとつ打うちに致いたしました、これが悪い事を致すと己おのれの罪を隠そうと思うので、また悪事を重ねるのでございますから、少しの悪事も致すもので有りません。少しの悪事でも隠そうと思つて又重ねる、又其の罪を隠そうと思つては悪事を次第々々に重ねて猶なほまた悪事に陥ります。毛筋ほどでも人は悪い事は出来ませんものでございます。永禪和尚は毒喰わば皿ねぶまで舐れと、死骸をごろ／＼転がして、本堂

の床下へ薪割で突込みますのは、今に奉公人が帰つて来てはならぬと急いで床下へ深く突入れました。

## 十九

お繼という七兵衛の娘は今年十三になりますが、孝心な者でございませぬ。母親おふくろが居りませんに、また父親おやしが見えませぬから、屹度きつと宗慈寺様へ行つて居るので有ろうと、自分も何時いつも此の寺へ参りますと、和尚に物を貰つて可愛がられるから度々たびく参りますので、勝手を存じて居りますから、  
繼「お父様とっさんは居りませんか、お母さんつかは」

と納所部屋を捜しても居りません。すると本堂の次が開いて居りますから、其処へ来ると草履ぞうりが有りますから庭へ下りまして、

繼「おや和尚様お母さんは居りませんか、お父様は」

と屈こんで云いましたが、女の子は能く頭かしらを斯う横にして下を覗のぞく様にして口を利くものでございますが、永禪は只見ると飛んだ処へ来た、年は往いかぬが伶俐りこうな娘、こりや見たなと思つたから、物をも云わず永禪和尚柄の長い薪割を振上げて追掛おっかけたが、人を殺そうという劍幕、何なんともどうも怖いから、

繼「あれえ」

ばた／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼と庭を逃げる、跡を追掛けて行ゆき、門の処まで追掛け、既に出ようとする時お梅が帰つて来て、

梅「まあ旦那何うなすつたよ、みつともないよ」

永「お、宜い処へ来た」

梅「もし何ですよ、お繼はキエくと云つて駈けて往きましたが、

貴方もみつともないよ跣足でさ」

永「一寸お前此処へ来な……お梅はん、お繼が逃げたから最

是までじゃア、詮事が無い、さア私も最早命はない、お前も同

罪じやでなア、七兵衛さんはお前と私の間を知つて五十両金の無

心、二つ三つ云合うたが、知られては一大事、薪割でお前の亭主

を打殺したぜ」

梅「あれまあお前さん、何だつてねえ」

永「さアく殺す気もなかったが、是も仏説で云う因縁じゃア、



お前はんに迷ったからじゃア、お前は藤屋七兵衛さんを大事に思  
う余り私の云う事を聴いたろうが、お繼が駈けて来て床下を覗い  
てお父様はと云うたから、見たと思うて追掛けたが、お繼を欺し  
て共に打殺し、私と一緒に逃げ延びて遠い処へ身を隠すか、否じ  
やアと云えば 弑 心じゃア、お前も打殺さなければならん」  
梅「何だつてまア、そんな事を云つたつて、お繼はお前さんが可  
愛がるから仮令見たとつて、よもや貴方が親父を殺したとは気が  
付くまいと思ひますから、其処がまだ子供だから分る氣遣は有  
りませんよ、私が篤くり彼の子の胸を聞きますからさ」  
永「じゃアお前が連れて来れば宜い」

梅「まアお待ちなさい、当人を連れて来て全く見たなら詮方もな

いが、見なければ殺さなくつても宜いじやアないか」

永「知らぬければ宜いが、ありやお前の実の子じや有るまいが」

梅「だつて三歳の時から育て、異つた子でも可愛いと思つて目を掛けましたから、彼の子も本当の親の様にするから、私も何うか助けとうございますわ、あれまア何うでもするから待つて下さいよ」

と話をして居る処へ寺男が歸つて来て、

庄吉「は、只今歸りました」

永「お、歸つたか」

男「へえ、彼方様へ参りますと何れ此方から出向かれまして、

えずれ御相談致しますと、そりやはや何事も此方から出向れまし

てと斯かよう様にしばくと申されまして、宜しくと仰せ有りましたじやと」

永「おゝ手前あのなに何へ行つて大仏前へ行つてな、常ひたちや陸屋の主あ人に夜よになつたら一寸ちよつと和尚が出て相談が有るからと云うて、早く行つて」

男「はい左様さよか、行て参まいりますと」

永「お梅早く先へ帰りな」

梅「じゃア私は先へ帰ります」

永「潜ひそかに今宵忍んでお前の処ゆへ行くぜ」

梅「そうして死骸は」

永「しい、死骸で庭が血のりだらけに成ってるから、泥の処は知れぬ

ように取片とりかたづ付けて置いた、なそれ、縁の下へ彼の様あに入れて置いたから知れやアせん、江戸と違つて犬は居ず、埋めるうずはまア後あとでも宜よい、お前は先へ帰りな」

梅「はいく」

と云いますが、お梅は此処こゝに長居もしませんのは脛すねに疵きず持ちや笹ささ原はら走るの譬たとえで、直すぐに門前へ出まして、これからお繼を捜して歩あきましたらが、何処どこへ行つたか頓とんと知れなかつたが、漸ようやく片かた

原町らまちの宗円寺そうえんじという禅宗寺から連れて来ました。この宗円寺の和尚さんは老人でございますからお繼を可愛がりますので、此の寺に隠れて居りましたのを連れて帰り、

梅「まアお前何処へ行つて居たかと思つて方々ほう／＼捜したよ」

繼「はい宗円寺様へ行つて居たのでございますわ」

梅「何でお前逃出したのだよ」

繼「あのお母様つかさん怖いこと、宗慈寺の和尚様が薪割を提さげて殺して仕舞うつてね、怖くつて一生懸命に逃げたけれど、行く処ゆがないから宗円寺様へ逃込んだの」

梅「お前本当じゃアないよ、嚇おどかしだよ、からかつたのだね」

繼「いゝえ、おからかいでないの、一生懸命の顔で怖いことく」  
梅「一生懸命だつて、お前まいを可愛がつて御供物おもりものや何か下さる日

那さまだもの、ほんのお酒の上だよ」

繼「然そう、私わたしやねお父様とっさんを捜しに往つたの」

## 二十

梅「お父様とっさんはあのお商いも隙ひまだから、あの金沢から山中の温泉場の方へ商いに往つて、事に依つたら大阪へ廻つて買出しを致したいからと云つて、些ちつとばかり宗慈寺様からね資本もとでを拝借したのだよ、そうして買出ししかた／＼お商いに往つたから、半年や一年では帰らないかも知れないよ、その代り確しつかり仕入れて、以も前の半分にも成れば、お繼にも着物を拵こしらえて遣やられると云つて、お前が可愛いからだね」

繼「そう、お父様が半年も帰らないと私は一人で寝るの」  
梅「宜いいじゃないか、私が抱いて寝るから」

繼「嬉しい事ね、あの他<sup>よ</sup>処<sup>そ</sup>の子と異<sup>ちが</sup>つて私は少<sup>ちい</sup>さい時からお父様とばかり一緒に寝ましたわ、お母<sup>つか</sup>さんと一緒に寝られるなら何時<sup>いつ</sup>までもお父様は帰らないでも宜<sup>よ</sup>いの」

梅「然<sup>そ</sup>うかえ、私と寝られ、ばお父様は帰らないでも嬉しいとお思いかえ、然<sup>そ</sup>うお云いだと誠にお前がなア 憫<sup>かわい</sup> 然<sup>そう</sup>で、なに可愛くなつてね、どんなに私が嬉しいか知れないよ、本当に少<sup>ちい</sup>さいうちから抱いて寝たいけれども、何だか隔て、いる中で、己<sup>おれ</sup>が抱いて寝るとお父<sup>とつ</sup>さんに云われたが、お前の方から抱<sup>だか</sup>つて寝たいと云うのは真<sup>しん</sup>に私は可愛<sup>い</sup>よ」

繼「私も本当に嬉しいの」

梅「あのお前私がお膳<sup>ぜん</sup>立<sup>だて</sup>するから、お前仏様へお線香を上げな

よ、お父様へ、いえなにお先祖様へ」

とお梅は不便ふびんに思いますから膳立をして、常ちがと異つてやさしく

お繼ゆづめしに夕飯を食くべさせ、あとで台所を片付けてしまい、

梅「お繼お前表口の締りをおしよ」

繼「はい」

とお繼は表の戸締とじまりを為しようと致しますると、表から永禪和尚

が忍んで参りまして、

永「お梅く」

梅「はい今開けます、旦那でございますかえ」

と表を開あける。永禪が這入るを見るとお繼は驚おどろきまして、

繼「あゝれ」



と鉄切声かなきりごえで跣足はだしでばたくと逃出しますので。

永「あゝ恟びつくりした、何なんじやい」

梅「今お前さんの顔を見てお繼が逃出したので」

永「おゝ左様そうか、お繼は最前の事は何どうじや、死骸を隠した事は  
伶俐りこうだから見たで有ろう」

梅「いゝえ見ませんよ」

永「いや見たじや」

梅「見やアしませんよ、お前さんは心配していらっしやるが大丈  
夫ですよ」

永「然うかえ」

梅「お父様はと聞きますからお父様は山中の温泉場から上方へ往

ったから、一二年帰らないと云つたら、私に抱かつて寝られ、ば  
 帰らないでも宜いと云います、お父さんは何処へ往つたと聞くと  
 らいだから知りませんよ」

永「知らぬか」

梅「大丈夫でございます、知る氣遣ないと私は見抜いたから御  
 安心なさいよ」

と云うので、是から亭主が無いから毎晩藤屋の家へ永禪和尚忍  
 んで来ては逢引を致します。心棒が曲りますと附いて居る者が  
 皆な曲ります、眞達という弟子坊主が曲り、庄吉という寺男が曲  
 る。旅魚屋の傳次という者が此の寺へ来て、納所部屋でそろ／  
 天下御制禁の賭博を為る、怪しからぬ事で、眞達は少しも

知らぬのに勧められて為ると負ける。

傳「眞達さん冗談じゃねえ、おいお前金を返さなくつちやアいけねえ」

眞「今は無えよ」

傳「今無くつちやア困るじゃアねえか」

眞「無え物を無理に取ろうて云うも無理じゃアねえか、だらくさい事を云いおるな」

傳「無えたつてお前己おれが受ければ払いを付けなければ成らねえ」

眞「今無えなから袈裟文庫けさぶんこを抵当かたに預ける」

傳「こう袈裟文庫なんぞ己おらつちが抵当に預かつても仕様がねえ」

眞「是が無くては法事に往いくにも困るから、是をまア払うまで預

かつて」

傳「そんな事を云つて困るよ、おい眞達さん一寸ちよつと聞きねえ、ま

ア此処こゝへ来きねえ」

と次の間へ連れて往いきまして

「こうお前めえ和尚に借りねえ」

眞「師匠だつて貸しはしなえ」

傳「貸すよ」

眞「いや此の間私わしが一両貸しやさせと云うたら何に入るてえ怖

ろしい眼まなこして睨ねらんだよ、貸しはせんぞ」

傳「お前めえいけねえ、和尚は弱い足元を見られて居るぜ、お前知ら

ねえのか、藤屋の亭主は留守で和尚は毎晩しけ込んで居る、一箇いっ

寺かしの住職が女犯によはんじやア遠島になる、己おらア二度見たぜ」

眞「じやア藤屋じゃあまの女房じゃあまと悪い事やつて居るか」

傳「やつて居るよ、己ア見たよ」

眞「それははや些ちつとも知らぬじや」

傳「斯こう為しねえ、彼あすこ処へ往つてお前が金を貸してと云えば、否いやお

応うなしに貸そうじやアねえか」

眞「成程、じやア私わしが師匠おに逢うてお前様お梅はんと寝て居りみ

すから、私に何ぼくちうか賭博もとでの資本を貸してお呉んなさませと云うか」

傳「そんな事を云つちやア貸すものか、そこがおおつう訝おしく云う

のだ、人間は楽しみが無くつてはいけません、私わたくしも女を抱いては

寝ませんが、替女町へ往つて芸者を買ったとか、娼妓しょうぎを買ったと

か、旨いものが喰いたいから、二十両とか三十両とか貸せと云えば、直じきに三十両ぐらえは貸すよ、お前めえさんはお梅さんの酌しやくでお楽たのしみぐらいの事を云いねえ」

眞「むう、巧うまい事を教えて呉れた、有難ありがたい〜」

と悦よろこびまして、馬鹿な坊主で、じん〜端はし折よりで出掛け、藤屋の裏口の戸の節穴のぞからそつと覗くと、前に膳のぞを置いて差向いで酒を飲んで居りますから、小声で、

眞「もしお梅はん〜」

梅 「誰だえ」

眞 「ちよつと開けてくださませ」

梅 「誰だえ」

眞 「眞達で、旦那に逢いたいので、一ちよつと寸なア」

永 「居ないてえ云え」

梅 「あの旦那は此方こちらにおいでなさいませんが」

眞 「その様なことを云うてもいかぬ、そこに並んで居るじゃ」

永 「あゝ覗のぞいて居やアがる」

梅 「おや覗いたり何かして人が悪いよ」

永 「障子閉たてゝ置けば宜よいに」

梅 「さア此方こちへお這入んなさい」

永「いや今近江屋へ往つてのう、本堂の修繕かた／＼相談に往つて、帰り掛に一寸寄つたら、詰らぬ物だが一杯と云うて馳走になつて居るじや、今帰るよ」

眞「帰らぬでも宜えので、檀家の者が来ればお師匠さんが程の宜え事云うて畳替えも出来、飛石が斯うなつたとか何とか云えば檀家の者が寄進に付く、じやけれど此方も骨が折れる、檀家の機嫌氣づまどるは容易なものじやアないじやて、だから折々は氣晴しも無ければ成らん、氣を晴さんでは毒じや、泊つても宜えがじや、眞達が檀家の者は宜え様にするから泊つても宜えがにして置くじや」

永「いや直に帰ります」



眞「もしお梅はん、大事に氣晴しのなるようにして呉れんなさま  
せ：あゝ私わしやなア済まぬが金かね十兩借りたいが、袈裟文庫を抵かた当に置  
くから十兩貸してくんなさませ」

永「此こいつ奴此こないだ間三兩貸せてえから貸したが返さぬで、袈裟文庫、  
何なんじやえ、出家の身の上で十兩などと、汝われが身に何で金が入いる」

眞「此こないだ間瞽女町へ往て芸者を買こうたが、面白くつて抱いて寝る  
のではないが遊んだので、借金が有るから袈裟文庫を預けようと  
思うたが、明日あした法事が有つても困りますから、是を貴方あんたへ預けて  
置いて、明日法事が有れば勤めてお布施で差引く」

永「黙れ、何だ二三百のお布施で埒らちが明くかえ、貸されぬ、うー  
ん悪い処ところへ往ゆき居おつて、瞽女町で芸者買うなんて不埒千万な奴じ

やア」

眞「然そう云いやすなね、人は楽たのみが無ければ成らぬ、葬とも式らいが有

れば通夜に往いて眠い眼めで直すぐに迎むかい僧そうを勤こめ、又本堂へ坐まつて経きやうを

読よむは随分辛つらいが、偶たまには芸者芸者の顔かほも見みたい、人間人間に生なれて何も

出家しんじやアつて人間人間じやア、釈迦しやも私わも同おなじ事ことじや、済すまぬがち

よつと、貴方あなただつて種いろく々こつちや此方こなたへ来きてお梅お梅はんとねえ、何事なにもない

じやアねえ、お梅お梅はんと気晴きせいしに一杯いっぱいやれば甘うまいから、お互お互に一

寸すんは楽たのしみをして気きを晴せいらさんでは辛つらい勤こめは出で来けん、お梅お梅はん

の処ところへ泊とどつても庄吉しやうきちにも云いわぬじや、私わたしが心こころ一つで」

永とこ「うーん種いろく々な事ことを云いうな……貸かすが跡あとで返かへせ、それ持もつて往ゆ

け」

眞「有難い、これども……お梅はん余り<sup>あんま</sup>大切に<sup>だいじ</sup>仕過ぎて、旦那の身体悪うしては成らぬから、こりやはやおやかましゆう」

とさあツくと帰つて来て、

眞「傳次さん貸したぜ」

傳「え」

眞「貸した」

傳「何うだい貸したろう」

眞「えらいもんじやア十両貸した」

傳「なんだ十両か、たったそればかり」

眞「いや初めてだから十両、又追々<sup>おい</sup>と云うて貸りるのじや」

などと是から納所部屋にて勝負事をする。予て<sup>かね</sup>二番町<sup>まち</sup>の会所小

川様から探索が行届ゆきとぎき、十分手が廻いつて居るから突だしぬけ然に手が入りました。

「御用くく」

と云う声に驚きました。旅魚屋の傳次は斯う云う事には度々たび出会あつて馴なれて居るから、場ばせん銭ひつさらを引攪ひつさらつて逃出す、庄吉も逃に出し、眞達まんだも往ゆく処ところがないから庫裏くらから庭へ飛下り、物置へ這入こつて隠れますと、旅魚屋の傳次は本堂へ出ましたが、勝手を知らんから木魚つまづに躓つき、前へのめる機はずみに鉄灯籠かなどうろうを突飛まし、円まるば柱しらで頭を打ちまして、經きようづくえ机の上へ尻餅をつく。須弥壇しゆみだんへ駈かけ上ると大日如来が転覆ひっくりかえる。お位牌はばたく落おちて参る。がらくどんと云う騒さわぎ。庄吉は無闇に本堂の縁の下へ這込みま

す。傳次は馴れて居るから逃げましたが、庄吉は怖々縁の下へ段々這入りますと、先に誰か逃込んで居るから其の人の帯へ掴まると、捕物の上手な源藏と申す者が潜つて入り、庄吉の帯を捕えて、

源「さア出ろ〜」

と引出す。

庄「こりやはい逆も〜、どもはや私は見て居ったので」

自分の掴まえて居る帯を放せば宜いに、先の人の帯を確かりと捉えて居たからさずると共に引摺られて出るのを見ると、顔色変じて血に染みた七兵衛の死骸が出ますと云う、これから永

禪和尚悪事露頭のお話、一寸一息つきまして。

## 二十二

お話は両ふたつに分れました、大工町の藤屋七兵衛の宅へ毎夜参りまして、永禪和尚がお梅と楽しんで居ります。すると丁度真夜中の頃に表の方から来ましたのは眞達と申す納所坊主…とんく、眞「お梅はんくちよと明けてお呉くんなさい」

梅「はい…旦那、眞達はんが来ましたよ」

永「あゝ来やアがったか、居ないてえ云え、なに、いゝえ来ぬてえ云えよ」

梅「あの眞達さん、何の御用でございますか」

眞「旦那にお目に懸りたいのでございますが、何うぞ一寸和尚さんに逢わしてお呉んなさい」

梅「旦那はあの今夜は此方にお出でなさいませんよ」

眞「そんな事を云うても来てえるのは知っているからえけません、宵にお目に懸つて此方に泊つても宜いと云うたのだから」

永「じゃア仕方がない、明けて遣れ」

と云うので、仕様がなからお梅が立つて裏口の雨戸を明けますと、眞達はすつと冠りにじんじん端折をして、跣足で飛込んで来ました。

永「何じゃ、どうした」

眞「お梅はん、後をびったり締めてお呉んなさい、足が泥になつ

てるから此の雑巾で拭きますからな」

永「何う為しよつたじやア、深しんこう更になつてまア其の跣足で、そないな姿なりで此処こゝへ来ると云う事が有るかな、困もんつた者じやア、此処へ来い、何うした」

眞「和尚さん最前なア、私わしア瞽女町で芸者買つて金が足りないから貴方あなたに十両貸してお呉んなさいましと、まアお願い申しましたが、あの金と云うものは実はその芸者じようろや女郎を買つたのではないので、実はその庄吉の部屋でな賭博ばくちが始まつて居ります所うへ浮かり手を出して負けた穴あな塞ぎふさぎの金でございます」

永「此こゝ奴悪い奴じやアぞ、己おのれ出家の身の上で賭博ばくちを為するとは怪けしからん、えゝ何じやア其様そんな穴塞ぎの金を私わしにを借かりるとは何う



いう心得じやア」

眞「それは重々じゅうくく悪いがな、あれから帰つて庄吉の部屋で賭博して居りますと、其処そこへ二番町の町会所から手が這入つたので」  
 永「それ見ろ、えらい事になつた、寺へ手の這入るといふは此の上もない恥な事じやアないか、どゞゞ何うした」

眞「私も慌あわてゝな庭の物置の中へ隠れまして、薪の間に身を潜めて居りますると、庄吉め本堂の縁いんの下へ逃げて這込んで見ると、先に一人隠れて居える奴が、ちまゝと其処そこに身を潜めて寝ねまつて居ります所へ、庄吉が其奴そやつの帯へ一心に噛かじり付いて居える所へ、どかゝと御用聞ごようきが這入はえつて来て、庄吉の帯を取つてずるゝと引出すと、庄吉が手を放せば宜えいに、手を放さぬで居えたから、先に

這入<sup>はえ</sup>った奴と一緒に引ずり出されて来る、庄吉は直<sup>すぐ</sup>に縛られてし

まい、又是は何者か顔を揚げいと髻<sup>たぶさ</sup>を取つて引起すと若<sup>も</sup>し……此<sup>こ</sup>

処<sup>うち</sup>な家の夫<sup>と</sup>の七兵衛さんの死骸が出たのじやが」

永「えゝ何……死骸それは……どゞどうして出た」

眞「何うして出たもないもんじや、あんたは此<sup>こ</sup>所<sup>と</sup>なお梅はんと深

い中<sup>ちゆう</sup>になつて、七兵衛さんが在<sup>あ</sup>つては邪魔になるからと云うので、

あんた七兵衛さんを殺して縁<sup>いん</sup>の下へ隠したじやろう、隠さいでも

宜<sup>え</sup>いじやアないか、えゝ左<sup>そ</sup>様<sup>う</sup>じやないか、直ぐに庄吉は縛られて

二番町の町会所へ送られ、私<sup>わし</sup>は物置の中に隠<sup>え</sup>れて居て見付からな

かつたから、漸<sup>ようよ</sup>う這出して、皆出<sup>あ</sup>た後<sup>と</sup>でそうつと抜出して此<sup>こ</sup>処<sup>ち</sup>ま

で来たのでげすがな、私<sup>わ</sup>がぐずぐずしてると直<sup>すぐ</sup>に捕<sup>つか</sup>まります、捕

まつて打ぶち叩たたきされて見れば、庄吉は知らぬでも私は貴方あなたが楽しんで居える事は知って居えるから、義理は済まぬと思ひながらも打ぶたれては痛いから、実は師匠の永禪和尚はお梅はんと悪い事をして居ります、それ故七兵衛さんを殺して縁いんの下へ隠したのでございましょうと私が云うたら、あんたも直に縛られて行つて、お処し刑おきを受けんではなるまいが、そうじゃないか

永「ふうーん」

眞「ふうーんじゃない、斯うしてお呉わんなさい、私は遠い処へ身を隠しますから旅銀ろぎんをお呉わんなさい、三十両お呉わんなさい」

永「そりやまア宜く知らしてくれた、眞達悪い事は出来でぬものじやな」

眞「出来ぬたつて殺さいでも宜いじやないか、仮令殺しても墓場へでも埋れば知れやアせんのだじや」

永「庄吉にも汝にも隠し、汝たちの居ぬ折に埋めようと思つて少しの間、凌ぎに縁の下へ入れると、絶えず人が来るし、汝や庄吉が絶えず側に居るから、見られては成らぬと思つて、抛ろなく床下へ入れた儘にして置いたが私の過りぢやな」

眞「過りでも宜いが、路銀をお呉んなさいよ」

永「路銀だつて今此処に無いからな、その路銀を隠して有る所から持つて来るが、死人が出たので其処へ張番でも付きやアしないか」

眞「張番所でない、手先の者も怖い怖いと思つて、庄吉を縛つて

皆附いて行つてしもうて、誰も居ませんわ」  
 永「お梅、何をぶるく、慄える事はない、其様にめそく泣いた  
 つて仕様が無い、是れ七兵衛さんの襦袢を貸しな、左様して何か  
 帯でも三尺でも宜いから貸しな、己はちよつと往つて金を持つて  
 来るから、少し待つてろ、其の間にどうせ山越しで逃げなければ  
 成らぬから、草鞋に紐を付けて、竹皮包でも宜いから握飯を拵  
 えて、松魚節も入るからな、食物の支度して梅干なども詰めて置  
 け、己は一寸往つて来るから」

永禪和尚も最<sup>も</sup>う是までと諦<sup>あきら</sup>め、逐電致<sup>も</sup>すより外<sup>ほか</sup>はないと心得  
 ましたから、覗<sup>のぞ</sup>きの手拭<sup>ほく</sup>で冠<sup>かぶ</sup>りを致<sup>おこ</sup>し、七兵衛の襜<sup>どてら</sup>袍<sup>ばう</sup>を着<sup>き</sup>て  
 三尺を締め、だく／＼した股<sup>ばつち</sup>引<sup>ひ</sup>を穿<sup>は</sup>きまして、どうだ気が利<sup>い</sup>  
 てるだろうと裾<sup>すそ</sup>をからげて、大工町の裏道へ出<sup>で</sup>まして、寺の門へ  
 こわ／＼這<sup>は</sup>入<sup>り</sup>つて見ると、一向人がいる様子もござりませんか  
 ら、勝手を知<sup>し</sup>つた庭伝<sup>にわでん</sup>いに卵塔<sup>らんとう</sup>場<sup>ば</sup>へ廻<sup>まわ</sup>つて自分の居間<sup>いま</sup>へ参<sup>ま</sup>り、  
 隠<sup>かく</sup>して有<sup>あ</sup>りました所の金<sup>かね</sup>包<sup>づみ</sup>を取<sup>と</sup>り出して、丁度百六拾金<sup>ひゃくろくじゅう</sup>ばかり  
 有<sup>あ</sup>りますのを、是を懐中<sup>わい</sup>へ入<sup>い</sup>れて、そつと抜<sup>ひ</sup>け出<sup>で</sup>して来<sup>き</sup>ました。  
 又<sup>また</sup>災<sup>わざい</sup>も三年置<sup>お</sup>けばと申<sup>ま</sup>す譬<sup>たと</sup>えの通<sup>とお</sup>りで、二十<sup>にじゅう</sup>五<sup>ご</sup>歳<sup>さい</sup>の折<sup>せ</sup>に逃<sup>に</sup>げて来<sup>き</sup>  
 ました其<sup>その</sup>の時に、大<sup>おほ</sup>の方は長<sup>なが</sup>くつていかぬから幾<sup>いく</sup>許<sup>くち</sup>かに売<sup>う</sup>払<sup>ら</sup>つた  
 が、小<sup>こ</sup>が一本残<sup>のこ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>りましたから、まさかの時の用心<sup>いんしん</sup>にと思<sup>おも</sup>つ

て短かいのを一本差して、  
 恐々、藤屋七兵衛の宅へ歸つて来ま  
 して、

永「さア早く急げ〜」

と云うので、お梅は男の様な姿に致しまして、自分も頭にはぐ  
 るりと米屋冠こめやかぶりに手拭を巻き付けて皆形なりを変えましたが、眞達  
 も其の後あとからすつと冠かぶりを致し、予かねて袈裟文庫を預けて有つた  
 が、これはまた何処どこへ行つても役に立つと思つて、その文庫をひ  
 つ脊負しよつて、せつせと逃出しました。これから富山とやまへ掛つて行け  
 ば道順なれども、富山へ行くまでには追分おいわけから堺さかいに関所がござ  
 いますから、あれから道を斜はすに切れて立山たてやまを北に見て、だん／  
 〃＼といすの宮から大杓川おおくつがわへ掛つて、飛驒ひだの高山たかやま越こえをいたす

心でございますから、神通川しんつうがわの川上の渡しを越える、その頃の渡しわすしは僅か八文で、今から考えると誠にやす安いものでござります。無暗むやみに駄通しに駄けまして、五里足らずの道でございますが、恐おそいが一生懸命、疵持きずつ足に笹原走ると、草くたびれ臥を忘れて夜通し無暗に逃げて、丁度大沓へ掛つて来ますと、神通川の水音がどうーどつと聞える。山から雲が吹出しますと、ぱらくくくとみぞれ霽が額へ当ります。

永「あゝー寒い、大分遅だいぶんれた様子じやな、眞達はまだ来ぬかな…  
…眞達ようーく」

眞「おおい」

永「早う来んかなア」



眞「来うと云うたてもなア、お梅はんが歩けんと云うから、手を引張ひっぱつたり腰を押ししたりするので、共に草臥れるがな、とてもノ

ノ足も腰も痛んで、どうも歩けぬので」

永「確しつかりして歩かんではいかぬじゃアないか」

梅「歩かぬじゃいかぬと云ったつてお前さん、休みもしないで延の続つづけに歩くのだもの、何どうして歩けやアしませんよ」

永「しらりと夜が明け掛つて来て、もうぼんやり人ひと顔がおが見える様に成つて来るが、この囊ふっかの吹掛ふっかけでぱつたりと往来は止まつて居いるが、今にも渡しが開あいて、渡しを渡つて此こゝ処ところへ来る者が有れば、何でも三人だと、何う姿を隠しても坊主頭うしろは後うしろから見れば毛の無いのは分るから、眞達手前はなア三拾両金かね遣やるがなア、此処

から別れて一人で行んでくれ、己はお梅を連れて高山越えをする積りだから」

眞「私も其の方が宜いのでげす、斯うやつて三人で歩くと、私はお梅はんを労り、あんたは無暗に駈けるから歩けやアしない、どうも私は草臥れていかぬ、それじゃア三十両お呉んなさい、その方が私は仕合せじゃ」

永「うん然うか、今金を遣るから、若し渡し口の方から此方へ人でも来ると何うも成らぬから、模様を見て居てくれ、金の勘定をするからよう、封を切つて算える間向うを見て居ろよ」

眞「まだ渡しは開きやアしません、この囊の吹ツかけでは向うから渡つて来やアしますまい」

と眞達が浮うっかり渡し口に眼を着けて居りますると、腰に差しして居りましたる重ね厚あつの一刀を抜くより早く、ぷすりつと肩先深あびく浴あびせますと、ごろり横に倒れましたが、眞達は一生懸命、

眞「やアお師匠さん、私わしを殺す気じゃな」

とどん／＼／＼／＼と死物しにもぐる狂い、縋すがり付いて来る奴を、

永「え、知れたこつちや、静かにしろ」

と鳩尾みぞうちの辺あたりをどんと突きます。突かれて仰向あおむきに倒れる処ところを乗掛のっかつて止めを刺としました処ところが、側に居りましたお梅は驚おどろいて、ぺた／＼と腰の抜けたように草原くさはらへ坐りまして、

梅「旦那」

永「え、確しっかりせえ」

梅「確かりせえと云つたつて、お前さん酷いひど事をするじやないか、眞達さんを殺すなら殺すと云つてお呉れなら宜いいに、突だしぬけ然で私は腰が抜けたよ」

永「えゝもう宜よいや、そんな意気地いくじのない事ことで成るか」

と眞達の着物で血のりを拭つて鞆たもとに納め、

永「さア来い」

と無暗に手を引いて渡場わたしばへ参り、少しの手当を遣つて渡しを

越え、此処こゝから笹沢ささざわ、のり原ぼら、いぼり谷たに、片掛かたかけ、湯ゆの谷たにと六

里半余の道でござりますが、これから先は極難ごくなんじよ所ところで、小さい関

所ところがござりますから、湯の谷の利助りすけと云う家うちへ泊りました。是れ

は本当の宿屋ではない、その頃は百姓家やで人を留めました。此処

で、

永「お梅、厭いやでも有ろうけれど頭を剃いつて呉れえ、どうも女を連れて行ゆけば足が付くから」

と厭がるお梅を無理無体に勧めて頭を剃いらせましたが、年はまだ三十で、滅相美しいお比びくさま丘様が出来ました。当人も厭ではあるうが、矢張身が怖いから致し方がない。

永「さ、幸い下に着て居る己の無地の着物が有るから、是を内うちあ揚あげをして着るが宜よい」

と云うので、是から永禪和尚の着物を直してお梅が着て、その上に眞達の持つて居りました文庫の中より衣を出して着、端折はしよりを高く取つて袈裟を掛けさせ、又袈裟文庫を頭陀袋ずだぶくろの様にして頸くび

に掛けさせ、先まずこれで宜いと云うので、俄にわかにお比丘尼様が一人出  
来ました。

## 二十四

永禪は縞しまの着物に坊主頭へ米屋被こめやかぶりを致し、小長いのを一本  
差して、これから湯の谷を出しましたが、その頃百疋びきも出しますと  
どどうやら斯こうやら書付こしらを拵こしらえて呉れますから、かに寺まで往ゆく処  
の関所は金さえ遣やれば越えられたものでござります。漸ようやく金で関  
所を越えて、かゞぞへ出て小豆沢あずきざわ、杉原すぎはら、鞆うつぼ、三河原みかわばらと五  
里少々余の道を来て、足も疲れて居ります。殊ことに飛驒なんじよは難なん処じよが

多くて歩けませんから、三河原の又九郎またくろうという家に宿を取りました。

永「まあ此処こゝは静かで宜よい、殊に夫婦とも誠に親切な者であるから、暫しばらく此処に足を留めようじゃアないか、おれも頭の毛の長く生えるまでは居なければならぬ、此処なれば決して知れる氣遣いは有るまい、汝てまえも剃そりたて頭では青過ぎて目に立つから、少し毛の生えるまでは此処にしよう、只少し足溜あしだまりの手当さえすれば宜い、併しかし此処には食い物が無いが、これから古河町ふるかわまちへ往ゆけば米も有るから米を買つて、又酒や味噌醤油などの手当をして」

梅「それじゃア然そうしてお呉ななさい」

と云うので多分に手当を遣やつて、米や酒醤油を買いに遣るから、

是は大したお客様と又九郎爺おやじが悦びまして、米を買つたり何かして、来年まで居ても差支えないように成りました。その中うちに彼あの辺は雪がますます降つて来ますると、旅人の往来が止ります事で、丁度足溜りには都合が好よいと云つて、九月の二十日からいたして十一月の三日の日まで泊つて居りましたが、段々と頭の毛も生えるが、けれども急には生えは致しません。宿屋の亭主は氣が利いていて、年はとつて居るが。多分に手当をして呉れるから有難いお客だと云つて、何か御馳走をしたいと山へ往つて、小鹿を一匹撃つて来まして、

又「おい婆さんく」

婆「あい何だえ」



又「小鹿を一匹撃つて来たよ」

婆「何処どこで」

又「あの雪崩なだれぐち口でな、何もお客様に愛想がねえから、温あつたまる様

に是れを上げたいものだ、己がこしらえるからお前味噌で溜りを  
拵こしらえて、爛鍋かんなべの支度をして呉んな」

とこれから亭主が料理をしてちやんと膳立ても出来ましたから、  
六畳の部屋へ来て破れ障子を明けて、

又「はい御免」

永「いや御亭主か」

又「まことに続いてお寒いことでございます、なれども沢山も降  
りませんでまあ宜うございますが、是からもう月つきすえ末になつて、

度々たび雪が降りますると道も止りませんが、まあ、今年こゝろは雪が少  
ないので仕合せでござります、さぞ日々御退屈でございましょう  
永「いゝやもう種々いろくお世話に成りまして、それに此の尼様が坂  
道で足を痛めて歩けぬと云うこと、殊に寒さは寒しするから、気  
の毒ながら来年の三月迄は御厄介じゃア」

又「へい有難いことでございます、毎日婆アともはア然そう申して  
居ります、あなた方がお泊りでございますから、斯こうやって米の  
お飯めしのお余りや上じょうしゆ酒しゆが戴おいて居られる、こんな有難い事はご  
ざいませんと云つて、婆アも悦んで居ります、何どうかなんなら二  
三年もおいでなすつて下されば猶宜いと存じます、なんで此の山や  
家まがでは何もございせんが、鹿を一匹撃つて参りまして調こしらえま

したが、何うか鹿で一杯召上つて、あの何ですかお比丘尼様は鹿は召上りませんか」

永「いや、何<sup>なん</sup>じや、それは何とも、まア一体は食われぬのじやけれどもなア、旅をする中<sup>うち</sup>は仕方がない、却<sup>かえ</sup>つて寒氣を凌<sup>しの</sup>ぐ為に勧めて食わせるくらいだから、藥<sup>くすりぐい</sup> 喰<sup>く</sup>には宜<sup>え</sup>いわな」

又「左様でげすか、鹿は木<sup>きの</sup>実<sup>のみ</sup>や清らかな草を好んで喰うと申すこととで、鹿の肉は魚よりも潔<sup>きよ</sup>いから召上れ、御婦人には尚お薬でございます……おい婆さん何を持って来て、ソレこれへ打<sup>ぶ</sup>込<sup>こ</sup>みねえ、それその麁<sup>そ</sup>朶<sup>だ</sup>を燻<sup>く</sup>べてな、ぱツくと燃<sup>も</sup>しな……さア召上りまし、此方<sup>こち</sup>の肉<sup>み</sup>が柔かなのでございますから、さア御比丘様」

梅「有難う存じます、まア本当に斯<sup>こ</sup>う長くお世話に成りますとも

思いませんでした、余あんまり御夫婦のお手当が宜よいから、つい泊る気になりました」

婆「何う致しまして、もうこんな爺婆じいばあアで何もお役には立ちませんから、どうか御退屈でない様にと申しましても、家もない山の中でございますから、外ほかに仕方もございません、どうか何時いつまでもいらしつて下されば仕合せでと、爺も一層蔭でお噂致して居りますよ……爺さんお相手をなさいよ」

又「さアこの御酒を召上りませ、それから鍋は一つしかございませんから取分けて上げましょう」

永「いや皆此こゝ処で一緒の方が宜えいから」

又「左様でげすか、いろ／＼又爺婆じいばあの昔話もございますから、少

しはお慰みにもなりましようと思ひまして……婆さん、どうも美  
 い酒だのう、宜かろう何うだえ、え、この御酒はあの古河町へ往  
 かなければないので、又醬油したじが好よいから甘うまいねえ、これでね旦那  
 様、江戸の様な旨い味噌で造つたたれを打ぶちこ込んで、獸肉屋もくじいやの様  
 にぐつぐ遺やれば旨いが、それだけの事はいきません、どうも是  
 では旨くはないが、これへ蕨わらびを入れるもおかしいから止しましよ  
 う……へえお盃を戴わたくしきます、私も若い時分には随分大酒たいしゆもいた  
 しましたが、もう年を取つては直すくに酔よいますなア、それでも毎晩  
 酣鍋かんなべに一杯位いずつは遺やらかします」  
 と差さえつ押おさえつ話をしながら酒宴さかもりをして居りましたが、其の  
 内にだんぐと爺さん婆さんも微酔ほろよいになりました。

永「何うだい、お前方は何うも山の中にいる人とは違い、また言葉遣いも分るから屹度苦勞人の果じやろう、万事に宜く届くと云うて噂をして居ることだが、生れは何処だね」

又「え、旦那様お馴染に成りましたから斯んな事を伺いますが、あなたは元は御出家様でございますかえ」

永「私<sup>わし</sup>は出家じゃア無い」

又「へえー左様でげすかえ、貴方<sup>あなた</sup>は其の頭髪<sup>おぐし</sup>がだんく延びますけれども、元御出家様で是からだんくお生<sup>はや</sup>しなさるのではないかと存じまして」

永「なに私<sup>わし</sup>は百姓だが、旅をする時にはむしやくしやして鬢陶<sup>うっとう</sup>しいから剃るのじや、それに寺へ奉公をして居るから、頭を剃る

事などは頓と構わぬじやア」

又「へえー左様で、お比丘尼様はこの頃御剃髪ごていはつなすつたのでげすな」

永「えゝいゝえ……なに然そう云う訳じやアないのじや」

又「へえ左様でげすかえ」

永「尤もつとも幼少の時分からと云う訳じやアないが、七八年前あとから少々因縁有つて御出家にならつしやツたじや」

又「へえー左様で、私わたくしども共うちの家には御出家様が時々お泊りにな

ります、御膳の時はお経を誦よんで御膳をお蓋きせに取分けて召上ります、あなたも此の間お遣あいだりなすつたしお経もお読みなさいま

すが、お比丘尼様の方はそう云う事をなさる所を見ませんから、

それで貴方は御出家お比丘尼様は此の頃御剃髪と思ひまして」

永「それは門前の小僧習わぬ経を誦よむで、寺にいと自然と覺えて読んで見たいのだが、また此方こなたは御出家じゃアが、もう旅へ出ると経を読まぬてえ、是こが紺屋こうやの白袴しらばかまという譬たとえじゃアのう」  
又「そうでございますかえ、私わたくしはまた御苦勞の果じゃア無いかと思つて、のう婆さん」

婆「お止しよ、ひちくどくお聞きで無いよ、鬱陶おぼしめしく思召おぼしめすよ  
う」

又「でもお互に昔は……旦那私わたくしはねえ、ちよつと気がさすので、然そういう事を云いますが、この婆ばあを連れて私が逃げまする時にやア、この婆が若い時分だのにくりく坊主に致しましてねえ、私



も頭を剃すつこかして逃げたことが有るね、えゝ是は昔話でござい  
ますかねえ」

婆「爺さんお止しよ、詰らない事を言い出すね、よしなよ」

又「なに、いゝや、旦那の御退屈しの凌しのぎだ、爺婆じばばあの昔話だから忌いやら  
しい事も何もねえじゃねえか」

二十五

又「旦那此こゝの婆ばあはもと根津の増田屋で小澤こさわと云つた女じやうろ郎ろでござ  
います」

婆「およしよ爺さん」

又「いゝやな、昔は鶯うぐいすを啼かして止まらした事もある……今はこんな梅干婆で見る影も有りませんがね、これでも二十三四の時分には中々薄手のあまつちよで、一寸ちよつとその氣象が宜うがしたね、時々、今日は帰さねえよと部屋着や笄こうがいなどを質に入れて、そうして遊んで呉れると云うから、ついとぼけて遊ぶ気になり、爪つめ弾びき位は静かに遣やると云う、中々粹いきな女でございます」

婆「およろよう、詰らない事を言つて間が悪いやね、恥かしいよ」

又「恥かしいも無いものだ、もう恥かしいのは通り過ぎて居るわ」

永「おや左様かえ、何でも然そうじやろうと思つた、中々お前苦勞人の果でなければ、あの取廻しは出来ぬと思つた、あゝ左様かえ、一旦泥水に這入つた事がなければなア」

梅「おや然うかね、長く御厄介になつて見ると私はどうも御当地の方じやないと実は思つて居ましたが、然うでございますか、不思議なものだねえ増田屋に、どうも妙だね、然うかね」

永「どうも妙だのう、それじやアお前何かえ、江戸の者かえ」

又「いゝえ私わたくしはねえ旦那様富山稲荷いなりまち町の加賀屋平六と云う荒物

御用で、江戸のお前さん下した谷茅町やかやちようの富山様のお屋敷がござい

ますから、出雲様いずもへ御機嫌伺いに参りまして、下谷ひつばに宿を取つて

居る時に、見物かた／＼根津へ往つて引張ひっぱられて登あがつたのが縁

さねえ、処こいつが此奴中々てくだ手管が有つて帰さないから、とうとうそれ

がお前さん道楽はじまの初ひどりで酷いめに遭あいましたけれども、此奴の気

象いが宜いいものだから借金だらけで、漸だん々／＼年季が増して長いが、

私の様な者でも女房にようぼにして呉れないかと云いますから、本当かと云うと本当だと申しますから、借金があつては迎とてもいかぬから、連れて逃げようと無分別にも相談をしたのが丁度三十七の時ですよ、それからお前さん連れて逃げたんだ、国には女房子にようぼこが有るのに無茶苦茶に此奴を引張ひっぱつて逃げましたが、年季は長いし、借金おつてが有るから追手の掛るのを恐れて、逃げてく信州路へ掛つても間に合わぬから、此奴をくりく坊主にして私も坊主になつてとうとう飛驒口へ逃込んだのよ」

永「ふうん然うかえ」

又「それがお前さん面白い話でどうも高山にもうつかり居いられないで、だんく廻つて落合の渡しを越えて、此の三河原と云う此こ

処こゝの家いえへ泊とつたが不思議ふしぎの縁ゆかりでございます、先せんに又また九郎くわうと云いう  
 夫婦ふうふが有あつてそれが私が泊とつて翌あした日ひ立たとうかと思おもうと、寒ふせさの時とき  
 分ぶんでは有あるが、誠まことに天あまの罰ばちで、人ひとが高い給たま金かねを出だして抱かかえて居ゐる  
 女じよ郎らうを引ひ浚きつて逃にげた盗たう賊ぞくの罪つみと、国くにに女お房子きを置お放はなしに  
 した罰ばちが一緒いっしょに報はつて来きて私わたしは女こ房れのかの字じを受うけたと見みえて痲り  
 病びように痔じと来きました、これこゝがまた二に度どめめの半はん病びよう床とやと来きて発たつこ  
 とが出来きませんで、此こゝ処こゝの爺じ婆ばあに厄やく介あになつて居ゐりますると、先  
 の又また九郎くわう夫ふう婦ふが誠まことに親あや切まに二に人にんの看かん病びようをして呉くれ、その親あや切まが有  
 難がたいと思おもつて稍や半はん年ねんも此こゝ処こゝに居ゐりまして、漸ようく二に人にんの病び氣きが癒なお  
 と、此こゝ処こゝの爺お婆ばあが煩わづい付らいて、迎とても助たすからねえ様さまになると、その  
 時とき私わたし共どもを枕まくら邊もとへ喚よんで、誠まことに不思議ふしぎな縁ゆかりでお前まへ方かたは長ながく泊とつ

て下すつたが、私はもう迎も助からねえ、どうもお前方は駈落者の  
 様だが、段々月日も経つて跡から追手も掛らぬ様子、何処か足  
 から指して行く所がありますかと云うから、私共は何処も行  
 く所はないが、まア越後の方へでも行こうと実は思うと云うと、  
 そんなら沢山も有りません、金は僅かだが、この後の山の焚木は  
 家の物だから、山の蕨を取つても夫婦が食つて行くには沢山ある、  
 また此所を斯うすれば此所で獸物が獲れる、冬の凌ぎは斯うノ  
 へとすつぱり教えて、さて私の家には身寄もなし婆も弱くれて居  
 るから、私が命のない後はお前さん私を親と思つて香花を手向  
 け、此処な家の絶えぬようにしてお呉んなさらんか、と云う頼み  
 の遺言をして死んだので、すると婆様が又続いて看病疲れかし

て病氣になり、その死ぬ前に何分頼むと言つて死んだから、前に披露ひろめもしてあつたので、近辺の者も皆得心して爺さん婆さんを見送つたから、つい其の儘ずるくべつたりに二代目又九郎夫婦に成つたのでございます、あなたちようと今年で二十三年になるが、住めば都と云う譬たとえの通りで、蕨を食つて此処に斯う遣やつて潜んで居ますがねえ、随分苦勞をしましたよ」

永「そうかねえ、苦勞の果じやがら万事に届く訳じやのう、でも内儀かみさんと真実思おもいお合あうての中じやから、斯うして此の山の中に住んで居るとは、情じようあい合あだね」

又「情合だつて婆さんも私も私いも厭いやだつたが、外ほかに行く所がなし詮しかた方がないから居たので」

永「じゃア富山の稲荷町で良い商人あきんどで有つたらうが、女房子は  
前の此処こゝに居る事を知らぬかえ、此の飛驒へは富山の方の者が滅  
多おほに来ないから知らぬのじやなア」

又「えゝそれは私が家を出てから行方が知れぬと云つて、家内が  
心配して亡なくなり、それから続いて家は潰うちれる様な訳で、悴せがれが一人  
ありましたが、その悴平太郎と云う者は、仕様がなくなつて到頭お  
寺様か何かへ貰われて仕まつたと云う事を、ぼんやり聞いて居り  
ましたが、妙な事で、去年富山の薬屋、それお前さん反魂丹はんごんたんを  
売せいべえる清兵衛さんと云う人が家へ来て、一晩泊つて段々話を聞きま  
した所が、私共の悴は妙な訳でねえ、良い出家に成られそうでご  
ざいまして、越中の国高岡の大工町にある宗慈寺と云う寺の納所



になつて、立派な衣を着て居るそうで」

永「はアそれは妙な事だなア、大工町だいくまちの宗慈寺と云うは真言寺じやアないか」

又「はい真言寺で」

永「そこにお前の忪が出家を遂とげて居るのかえ」

又「はい名は何とか云つたなア、婆さんお前めえ知つて居るか、あゝ、  
そうよ……いゝや、真達と云う名の納所でございます」

永「左様か」

とじろりつと横眼でお梅と顔を見合あわした計ばかり、ぎっくり胸むねに  
こたえて、流石さすがの悪党永禪和尚も、これは飛んだ所へ泊つたと思  
いました。

## 二十六

又「それで婆さんの云うのには、前の事をあやまつて尋ねて行つたら宜かろうと云いますが、何だか今更親子とも云い難にくいと云うのは、女房子を打遣うつちやつて女郎じよろうを連れて駈落する身の越度おちど、本人が和尚さんとか納所とか云われる身の上になつたからと云つて、今私わしが親父おやじだと云つても、顔を知りませんまいし、殊ことに向うは出家で堅固な処へ、何だか気が詰つて往いけませんなれども、その話を聞いて一度尋ねて行いきたいとは思つて心掛けては居りますが、たとえ是れで死にました処が、旦那様何でございます、まア其の本む

人が坊主でございますから、死んだと云う事を風の便りに聞いて、  
 本当の親と思えば、死んだ後でも悪いとは思いますが、お  
 経の一遍位は上げてくれるかと思つて、それを楽しみに致して居  
 る訳で」

永「なるほど然うかえ」

又「へえ……まことに長つ話を致しまして」

婆「本当にお退屈様で嘸お眠うございましょう、此の通り酔うと  
 しつこう御座いまして、繰返し一つことを申しまして……さア、  
 此方へお出でよう」

又「宜やな」

婆「誠にお邪魔さまで……さア……此方へお出でよ、また飲みたけ

ればお飲あがりな」

と手を引いてお澤さわと云う婆さんが又九郎を連れて部屋へ参りま  
した跡で、

梅「旦那々々」

永「えゝ」

梅「もう、此処ここには居られないからお立ちよ、早くお立ちよ」

永「立つと云つても直すぐに立つ訳にはゆかん」

梅「いかぬたつてお前さん怖いじやア無いか、此処つるぎは剣の中に這

入つて居るような心持がして、眞達の親父と云う事が知れては」

永「これゝ黙あしたつてろ、明日直あしたに立つと、おかしいと勘付かれや

アしないかと脛すねに疵きずじや、此の間も頼んで置いたが、広瀬ひろせの追おいわ

分を越える手形を拵えて貰つて、急には立たぬ振をして、二三日の中にそうつと立つとしようじや無いか」

梅「何うかしてお呉んなさい、私は怖いから」

とその晩は寝ましたが、翌朝になりますと金を遣つて瞞かして、何うか斯うか広瀬の追分を越える手形を拵えて貰い、明日立とうか明後日に為ようかと、こそく支度をして居りますると、翌日申の刻下りになりまして峠を下つて参つたのは、越中富山の反魂丹を売る薬屋さん、富山の薬屋さんは風呂敷包を脊負うのに結目を堅く縛りませんで、両肩の脇へ一寸挟みまして、先をぱらりと下げて居ります。懐には合口をのんで居る位に心掛けて、怪しい者が来ると脊負て居る包を放ねて置いて、懐中の合口

を引抜くと云う事で始終山<sup>やまぐに</sup>国を歩くから油断はしません。よく旅慣れて居るもので御座ります。一体飛騨は医者と薬屋が少ないので薬が能<sup>よ</sup>く売れますから、寒いのも厭<sup>いと</sup>わずになだれ下りに来まして。

薬屋清「やア御免なさいませ」

又「おやこれはお珍らしい……去年お泊りの清兵衛さんがお出<sup>いで</sup>なすつた、さア奥へお通りなさい、いやどうも能く」

清「誠に、是れははや、去年は来<sup>け</sup>まして、え、長<sup>なが</sup>えこと御厄介ねなり居<sup>お</sup>りみした、いやもう二度<sup>ねど</sup>と再び山坂を越えて斯<sup>こ</sup>う云う所へは来<sup>け</sup>ますまいと思つて居りみすが、又慾と二人連れで来<sup>け</sup>ました……おや婆様この前は御厄介になりみした、もうとてもくこの山

は下りは楽だが、登りと云うたら足も腰もめきり／＼と致して、  
やアどうも草臥くたぶれました、とても／＼」

又「今夜はお泊りでげしよう」

清「いや然そうでない、今日は切せみて落合まで行く積つもりで」

又「婆さん今日は落合までいらっしやるてえが仕方が無いのう、

まア今夜はお泊りなさいな、この頃は米が有ります、それに良い

酒もありますからお泊りなさい、お裙すそわけ分をしますから」

清「いや然そうは往よきませぬ、何どうでも彼こうでも落合まで未まだ日も

高いから行よこ積つもりりで」

又「それは仕方が無いなア、然そうでしようがまア一杯飲んで」

清「いゝや……」

又「そんな事を云わずに、これ婆さん早く一杯……」

婆「能くお出でなさいました、去年は誠にお草々そうくをしたって昨ゆうべ宵もお噂をして居りました」

又「清兵衛さん、去年お泊とまりの時に、私の悴は高岡の大工町の宗慈寺と云う寺に這入つて、弟子に成つて居ると云う貴方あなたのお話が有つたが、眞達と云う悴は達者で居りますかな」

清「いや何うも是こりやはや、それを云おうくと思つて来たが、お前まさん余あんまり草臥くたぶれたので忘れてしまつたが、いや眞達さんの事に就ついてはえらい事になりみした」

又「へいどうか成りましたか」

清「いやもうらちくちのつかない事に成りみしたと云う訳は、お



前まさん宗慈寺の永禪和尚と云う者はえらい悪党でありみすと、前町の藤屋七兵衛と云う荒物屋が有つて、その女房じやアのお梅まアというのと悪われえ事をしたと思いなさませ、永禪和尚とお梅と間男をして居りみして、七兵衛が在あつては邪魔になるといふて、夫とまの七兵衛を薪割で打ぶち殺ころし、本堂の縁いんの下へ隠かこしたところが、悪われえ事は出来ぬものぢやなア、心棒が狂まごい曲まうたから、まア寺男からお前まさんの子じやア有るけれども眞達さんまでも悪われえ事に染そまりまして、それからお前まさん此の頃寺で賭博ぼくちを為しますと」

又「賭博を、ふうん〜成程」

清「ところがお前まさん二番町の小川様から探索が届いて居いるもんじやから直すぐに手が這入つて、手が這入ると寺男の庄吉という者が

お前まさん本堂の床よかした下へ逃のげたところが、先に藤屋七兵衛の死骸しげえが隠かこして在あるのを死骸しげえとは知らいで、寺男の庄吉が先へ誰か逃のげこ込んで床よかした下に此の通りちまくと寝ねつて居おりみすと思つて、帯おべの処へ後生大事にお前まさん取付とついて居りみすと、さ、するとお前まさん出ろくと云うので役人やこねんが来て庄吉の帯おべを取つて引ひずり出すと、藤屋の夫とくまの死骸しげえが出たと思いなさませ、さアこれはうさんな寺である、賭博どころではない、床よかした下から死骸しげえが出る所を見ると、屹度けつと調べを為しなければ成らぬと、お役所やこしよまで参まれと忽たちまちきりくつと縛いましめられて、庄吉が引かれみしたと、もう事が破れたと思つて永禪和尚が藤屋じやアまアの女房の手を取つて逃のげた時に、お前まさんの御子息の眞達どんも一緒に逃のげたに相違ないのじやが、それ

が此の世の生涯で、大沓の渡しを越える渡口の所に、いや最<sup>も</sup>うは  
 や見る影もない姿で誠に情<sup>なさけ</sup>ない、それはく<sup>とて</sup>逆<sup>とて</sup>もく<sup>とて</sup>何とも云い  
 様のない姿に斬<sup>けれ</sup>殺<sup>ころ</sup>されて居りみしたが」

又「えー忪<sup>きり</sup>が斬殺<sup>ころ</sup>されて」

清「いやもう何とも」

又「誰が殺しました」

二十七

清「あとで小川様がだん／＼お調べに成つたところが、流石<sup>さすが</sup>が  
 奉行様だから、永禪和尚が藤屋<sup>じやア</sup>の女房<sup>まア</sup>お梅を連れて逃<sup>の</sup>げる時のこ

とを知つて居るから、これを生かして置いては露顯する本という  
 て、斬つて逃げたに違いないと云うので、足を付けたが今に知れ  
 ぬと云いますわ」

又「それはまア何うも有難う存じます、お前さんがお通り掛りで  
 寄つて下さらなければ、私は忤が殺された事も知らずにしまいま  
 す、それは何時の事でございましたか」

清「えーとえーつい先々月十九日の曉方でありみしたか」

又「十九日の明方……そうとは知りませんでのう婆さん、昨宵余  
 り寒いからと云つて、山へ鹿を打ちに往きまして、よう／＼能い  
 塩梅に一足の小鹿を打つて、ふん縛つて鉄砲で担いで来ました  
 が、その親鹿で有りましたよう峰にうろ／＼哀れな声をして鳴きま

して、小鹿を探して居る様子で、その時親鹿も打とうと思いましたが、何だか虫が知らして、子を探して啼いて居るから哀れな事と思つて、打たずに歸つて来ましたが、四足よしあしでせえも、あゝ遣やつて子を打たれゝば、うろくして獵人りようしの傍そばまでも山を下つて探しに来るのに、人間の身の上で唯たつた一人の悴せがを置いて遁にげると云うは、あゝ若い時分は無分別な事だつた……のう婆さん……昨ゆ宵婆んぼと話をして居りましたが、まことに有難んげんうございます、亡なくなりました日が知れますれば、線香の一本も上げ、念仏の一つも唱えられます、有難んげんうございます、あゝ誠に何うも……何と云つたつて一人の子にも逢えず、あなたが去年お出で下すつてお話ですから、雪でも解けたら尋ねて行ゆこうと存じて、婆さんとも然そう申

して居りました」

清「え、私わしやもう直そくに帰りましよう、まことに飛んだ事をお耳めみに

入れてお氣けの毒に思いますが、云えわぬでも成りませんから詮しょうこ

方となしにお知らせ申した訳で、能よくまア念仏ども唱えてお遣やり

なされ、私や帰りみすから」

又「じゃア帰りには屹度きつとお寄よりなすつて」

清「はい屹度けつと寄つて御厄介に成りみすよ、左様さよなれば」

婆「どうぞお帰りにお待ち申します」

清「大けおおにお妨げを致しみました、左様さよならば」

又「お前さん山手の方へよつてお出いでなさいませんと、道が悪うご

ざいますよ、崩れ掛つた所が有りますから、何時もいう通りにね、

あの寄生木やどりの出た大木の方に附いてお出でなさいよ……あゝまア  
 思い掛がけなく清兵衛さんがお出でなすつて、一晩お泊め申して緩ゆるく  
 り話を聞きたいが、お急ぎと見えてハイもう影も見えなく成つた、  
 のう婆さん悴せまの殺されたのは十九日の明方大沓の渡口だったのう  
 婆さん」

婆「あい」

又「奥に泊つて居る客人は己おれの所ところへ幾いっか日に泊つたつけな」

婆「あれは先々月のちようど、二十日はつかの晩に泊りました」

又「二十日……えー十九日の明方に川を渡つて湯の谷泊りと仰おつしや  
 ったが、ちようど二十日が己の所へお泊りと……婆さん、あのお  
 比丘さんの名はお梅という名じゃないか」

婆「何だか惠梅様えばいくと云つたり、またお梅と呼びなさる事もあ  
るよ」

又「はゝア何でも此の頃頭髪あたまを剃すつた比丘様さんに違ちがひない、毛の生  
えるまで足溜あしだまりに己の家うちへ泊とつて居ゐるのだ、彼奴あいつら二人が永禪  
和尚にお梅かも知れねえぜ、のう婆さん」

婆「それア何とも云えないよ」

又「酒をつけれ」

婆「酒をつけれたつてお前」

又「宜いいからつけれ、表の戸締りをすつぱりして仕舞え、一寸ちよつと

明あけられねえ様に、しん張はりをかつてしまいな、酒をつけれ」

婆「酒をつけれたつてお前さん無理酒むりざけを飲んではいけないよ、無



理酒は身体あに中たるから、悴が死んだからつてもやけ酒はいけないよう」

又「もう死んだつても構うものか、身体に中ちつたつてよいくになつて打ぶ倒たれて死んだつて、何も此の世に思い置く事はない、然うじやないか、お前めは己えが死んだつて、一生食うに困るような事はねえから心配しなさんな、己おはもう何なにも此の世の中に楽しみはねえから、酒をつけろ」

と爛鍋で酒あを温ため、爛の出来るも待てないから、茶碗でぐいぐいと五六杯引つかけて、年は五十九でございませうが、中々きかない爺じ、欄間いに掛かつた鉄砲てつぱうを下おして玉込たまごめをしましたから。

婆「爺さんお前何をするのだえ、また鹿でも打ちゆに往くのかえ」

又「えゝ黙つて居ろ、婆さん己は奥へ行つて掛合つてな、何処までも彼奴ら二人に白状させるつもりだが、きやアとかぱアとか云つて逃げめえものでもねえ、若し逃げに掛つたら、手前は此の細ほ口くちから駈出して、落合の渡しへ知らせろ、此方は山手だから逃げる氣遣きづかいはない、えゝ心配するな」

と山やま刀やまがたなを帯さして片手に鉄砲を提さげ、忍しのび足あしで来て破れ障子に手を掛けまして、窃そうつと明けて永禪和尚とお梅の居ります所の部屋へ参つて、これから掛合かけあいに成りますところ、一寸一息つきまして。

又九郎は年五十九でございませうが、中々きかん気の爺おやじで、鉄砲すくちの筒口を押し握すくちつてそつと破れ障子を開けると、此方こちらはこそく荷にぶしら拵しらえを致して居る処ところへ這入とこつて来ましたから、覺さとられまいと荷を脇へ片付けながら、

永「誰じや」

又「へい爺じいでございます」

永「おや是はく、さア此方こちらへお這入りなさい、未だま寝やすずかいのう」

又「まだ貴方あなたがたもお寝やすみでございませんか」

永「寝やすようと思つても寒やうて寝やすられないで、まだ起きて居ました」

又「へい早速お聞き申したいことが有つて参りましたが、貴方がたのお国は、何処どちらでございますかな」

永「うーん何なんじや、私わしは大聖寺だいしょうじの者じや」

又「大聖寺へえー、大聖寺じやアありますまい、貴方がたは越中の高岡のお方でございませうがな」

永「うゝんイヤ私わしは大聖寺の薬師堂の尼様のお供をして来た者じやア、何で高岡の者とお前が疑つて云いなさるか」

又「お隠しなさつてもいかねえ、貴方は高岡の大工町宗慈寺という真言寺の和尚様で、永禪さんと仰しやるだらうね」

永「何を言うのじや、そんな詰らぬ事をそれは覚えな、何どういう事で私わしを然そう云うか知らぬけれども、それは人違いだらう」

又「隠してもいけません、そちらの惠梅様というお比丘尼様さんは前町の藤屋という荒物屋の七兵衛さんのお内儀かみさんで、お梅さんと云いましような」

永「何を詰らぬ事……飛んだ間違いでお前の事をあないな事を云う」

梅「まあ何うもねえ、どう云うまあその間違だか知れませんが、けれどもねそんな何うもその、私共は尼の身の上で居いる者を、荒物屋にようぼの女房にようぼなんてまあ何う云う何かなんね……お前さん」

永「さア何ういう訳そないなで其様そないなことを、さア誰がそんな事を言ったえ」  
又「隠しちやアいけねえ、あなたはいっかじ一箇寺住職の身の上で、このお梅さんと間男をするのみならず、亭主の七兵衛が邪魔になると

いうので、薪割で打ぶち殺して縁の下へ隠した事が、博奕ばくちの混雑から割れて、居いられねえのでお梅さんの手を引いて逃げて来なすつた時に、私の悴の眞達と何処どこでお別れなすつたい」

永「これ何を云う、何を云うのじゃ、思い掛けない事を云つて、眞達なんて、それはまるで人違いじゃア無いか、何ういう訳じゃ、眞達さんと云うのは昨夜話ゆうべに聞いたが、私わしは知りアせぬが」

又「とぼけちやアいけねえ、お前さん、しらアきつたつて種あがが上つて居るから役に立たねえ、眞達を連れて逃げては足手まといだから、神通川かみの上大沓の渡口で悴を殺して逃げたと言つてしまいなせえ、おい隠したつても役に立たねえ」

永「何うもこれは思いがけないことを言つて、まアそんな事を言

つて何うもどゞ何ういう理窟で其様な事を云うか……のう惠梅様」  
 梅「本当に何だつて其様事を云いますか、私どもの身に覚えのな  
 い事を言いかけられて、何うも何ういう訳で、その何だか、それ  
 が実に、それはお前は何ういう訳で」

又「何ういう訳だつてもいかねえ、種が上つて居るから隠さずに  
 云え、云わなければ詮方がねえ、お前方二人をふん縛つて落合の  
 役所へ引いても白状させずには置かねえ、さア云わねえか、云わ  
 なければ了簡が有る、おい云わねえか」

と云われこの時は永禪和尚もこれは隠悪が顕れたわい、もう是  
 れまでと思つて爺い婆を切殺して逃げるより外はないと、道中  
 差の胴金を膝の元へ引寄せて半身構えに成つて坐り、居合で

抜く了簡、柄つかへ手をかけ身構える。爺も持つて参つた鉄砲をぐつと片手に膝の側へ引寄せて引金に手を掛けて、すわと云つたら打果そうと云うので斯こう身構えました。互いに竜虎の争いと云おうか、呼吸いきの止るようにうーんと睨にらみ合あいました時は側に居るお梅はわななくふる、慄ふるえて少しも口を利くことも出来ません。永禪は不ふ凶と後うしろに火繩の光るのを見て、此こ奴いつ飛と道び具どうぐを持つて来たと思うからずーんと飛掛り、抜ぬ打きうちに胸のあたりへ切付けました。

## 二十九

又「やア斬りやアがつたな」



と引金を引いてどんと打つ、永禪和尚は身をかわすと運の宜い  
 奴、玉は肩を反れてぷつりと破壁を打貫いて落る。又九郎は  
 汝れ斬りやアがったなと空鉄砲を持って永禪和尚に打って掛る  
 を引つ外して、

永「猪口才な事をするな」

と肩先深く斬下げました。腕は冴えて居るし、刃物は良し、

又九郎横倒れに斃れるのを見て婆は逃出そうと上総戸へ手を掛け

ましたが、余り締りを嚴重にして御座いまして、栓張を取つて、

掛金を外す間もごさいません、処へ永禪は逃げられては溜らぬ

と思ひましたから、土間へ駈下りて、後から一刀婆に浴せかけ、

横倒れになる処を踏掛つてとぐめを刺したが、お梅は畳の上へ

俯伏うつぶしになつて、声も出ませんでぶる／＼慄ふるえて居りました。と

ころへ見けん相そう変へんえて血ちだらけの胴どう金を引ひ提きげて上あつて来きました。

永「あゝ危あやうい事ことじやつたな」

梅「はい」

永「確しつかりせえ」

梅「確しつかりせえたつて私は窃そつと裏うらから逃にげようと思おもつてゐる処ところに、

鉄砲てつぱうの音ねを聞きいて今いま度どばかりは本ほん当とうに死しんだような心こころ持もにななりま  
したよ」

永「毒どく喰くわば皿わまで舐ねれだ、止やむを得えぬ、えゝ悪わるい事ことは出い来きぬも  
のじや、怖おそいものじやア無ないか」

梅「本ほん当とうに怖おそい事ことね」

永「此処こゝに泊つたのが何うして足が附いたか、もう此処に長う足を留めて居る事は出来ぬ、広瀬の追分を越えるだけの手形が有るから差さしつか支えはないが、今夜此処を逃げて仕舞うと、死骸は有るし夜中に山路は越えられないから今夜は此処に寝よう」

梅「怖くつて、寝られやアしません」

永「今夜は誰も尋ねて来きやアせんから」

梅「死骸は何うするの」

永「宜えいわ」

と又九郎夫婦の死骸をごろ／＼土間へ転がして、鉄砲を持って来て爺婆の死骸を縁の下へ入れましたが、能よく死骸を縁の下へ入れる奴です。これから血の掃除を致し、凶ずう々しく残りの酒を飲

んで永禪和尚いびぎは躰いびぎをよくちようかいて寝ましたが、実に剛胆な奴であります、  
 翌朝身支度をして何喰わぬ顔で、此処を出しましたが、出ると急ぎ  
 まして、宜よい塩梅あんばいに広瀬わたしの渡を越して、もう是れまで来れば宜  
 いと思うと益々雪の降る気候に向つて、行く事も出来ませんから、  
 人知れず千島村ちしまむらという処へ参つて、水無瀬みなせの神社の片かたほとり傍の  
かくれが隠家に身を潜め、翌年雪も解け二月の月末つきすえに越後地へ掛つて  
 来ます。芦屋あしやより平湯ひらゆえき駅に出で、大峠おおとうげを越し、信州松  
もと本に出まして、稲荷山いなりやまより野尻のじり、夫それより越後の国関川せきがわへ出  
 て、高田たかたを横に見て、岡田村おかだむらから水沢みずさわに出まして、川口かわぐちと  
 云う処に幸い無住むじゆうの薬師堂が有ると云うので、これへ惠梅比丘  
 尼を入れて、又市が寺男になつて居てお経を教えて居る。其の中うち

に尼はだん／＼覚えてお経を読むようになると、村方から麦或いは稗ひえなどを持つて来て呉れるから、貰う物を喰くつて漸ようやく此処に身を潜めて居る中に又市も頭髪かみは生えて寺男の姿になり、片方かた／＼は坊主馴れて出家らしく口もきく此処に足掛三年の間居りますから、誰有つて知る者はございません。爰こゝにお話は二つに分れました寛政九年八月十日の事でございますが、信州水内郡白鳥村と申す処むらがございます。是は飯山いいやまの在やまがでございます。大滝おおたき村むらという処に不動様がありまして、その側わきに掛茶屋があつて、これに腰を掛けて居ります武士さむらいは、少し羊羹色ようかんいろではあります。が黒の羽織を着て、大小を差して紺足袋なかぬきに中な拔かの草履はきを穿はき、煙草を呑んで居りますると、此の前を通ります娘は年頃二十一

二でございりますが、色のくつきり白い、山家に似合わぬ人柄の能よい女で、誠におとなしやかなの姿で、前を通つてしきり頬に不動様を拝みお百度を踏んで居ります。武士は余念もなく彼の娘の姿を見て居りますが、お百度だから長うございます。自分も用があるのに出掛けようともしませんで、お百度の済むまで、娘が往つたり来たりするのを見て、頭をくび彼方あっちへふり此方こっちへふり、お百度の歩く通りに左右へ頭を廻して、とうとう仕舞しままで見て居りました。

武士「あゝ美しいな、婆ア今あの不動様へお百度を上げて居た彼の女は、何処どこの女だのう」

婆「はいありやア何なんでござりやすよ、あの白島村の者でござりや  
すが、能よく間があると参詣にひえー参めえりやすが、ありやア信心者  
でござりやして、何でも廿八日には暴風雨あらしがあつても欠かさない  
でござりやしてな、ひやア」

武士「宜いい女だね」

婆「ひやア此こけい処らにはまア沢山はねえ女でござりやすよ、ひやア」  
武士「何どこ処の何者の娘かな」

婆「何だか知りやしねえが武さむらい士の娘で有りやすが、浪人してひ  
やア此の山家へ引ひっこ込んだ者じゃアはと評判ぶつて居りやす、ひや  
ア」

武士「はア左様かのう」

男「ちよつとくゝ旦那え」

と後に腰を掛けて居りましたいなせ鯨背の男、木綿のこべんけい小弁慶のひとえ単衣ものにひろそで広袖のはんでん半纏をはおつて居る、年三十五六の色の浅黒い氣の利いた男でございませう。

武士「いやお前はナニとんと心付かぬで、何処にお居いでかな」

男「この衝立ついたての後に有あり合物あいもので一杯やつて居ります、へー、碌な物は有りませんが、此の家の婆うちさんは綺麗好ずいきで芋を煮ても牛蒡ごぼうを煮ても中々加減が上手でげす、それに綺麗好だから喰い心がよううございませう」

武士「はゝあ貴公何だね、言葉の様子では江戸御ごしゅつしよう出生の様子



だね」

男「へい旦那も江戸児えどっこのようなお言葉遣いでげすね」

武士「久しく山やまぐに国へ来て居て田舎者に成りました」

男「今の娘を美しい女だと賞ほめておいでなすつたが、あれは白島村の何なんです元は武士さむらいだと云いますが、何どういう訳か伯父が有ると

云うので、姉きょうだい弟で伯父の世話になつて居ますが、弟は十六七

でございしますが、色の白い好いい男で、女の様でございします、それで姉弟やで遣つてるのだが彼の位あのは沢山たんとはありませんな」

武士「はゝあ、貴公は御存知かえ」

男「へい、私は白島村の廣ひろ藏親分の厄介えんじで、傳次と申す元は魚

屋でございしますが、江戸を喰詰くいつめてこんな処ところへ這入つて、山の中

を歩き廻り、極りが悪くつて成らねえが、金が出来ませんじゃア、江戸へ帰る事も出来ません身の上で」

武士「は、ア左様かえ、じゃ彼の婦人を御存知で」

傳「へい朝晩顔を見合せますからね」

武士「あ、左様かえ、貴公ちつ些と遊びに来て下さらんかえ、私は桑く  
わながわむら名川村だから」

傳「じゃ隣り村で造作アございません」

武士「拙者も江戸兎で、江戸府内で産れた者に逢うと、江戸兎は了簡りょうかんが小さいせえか、懐かしく親類のような心持がしますよ」

傳「そうです、変な言葉の奴ばかりいますから貴方あなたのような方に逢うと氣丈夫でげす、閑ひまで遊んで居りますから何時いつでも参ります」

武士「何うだえ拙者宅へ是を御縁としてな、拙者は柳田典藏うと申す武骨者だが、何うやら斯うやら村方の子供を相手にして暮して居ります」

傳「何で、何方の御藩どちらごはんでげす」

典「なに元は神田橋近辺に居た者だ、櫻井監物さくらいけんもつの用人役をも

勤めた者の悴だが、放蕩を致して府内にも居られないで、斯ういう処へ参るくらいだから、別して野暮な事は言わぬが、兎も角も一緒に、直じき近い細川を渡ると直すぐだ」

傳「御一緒に参りましょう」

とずうくしい奴で、ぴよこくく付いて来ました。

典「さア、此方こっちへ這入りなさい……庄吉、今お客様をお連れ申し

たから」

庄「はい大層お早くお帰りで、今日は此の様にお早くお帰りはあるまいと思つて居りました……さア此方こちらへお客様お這入りなさい」

傳「へいこれは何うも、御免なさい……おや庄吉さんか」

庄「や、こりやア傳次さんか、いゝやア是れははや、何うも」

傳「何うした思い掛けねえ」

庄「何時も変りも無のうて目出とうありますと」

傳「いやア何うも、何とも彼なんとも、お前かんにも逢めえいたかつたが、彼あ

れから行端ゆきはがねえので」

典「庄吉手前てめえは馴染か」

庄「いや馴染だつて互いに打明けて埒らちくちもない事をした身の上で……まア無事で宜いいな」

傳「何時いつ此方こつちへ来たのだえ」

庄「何時と云うてお前も此方へ何時来たでありますと」

傳「いや何どうも私わっちもからきし形かたはねえので、仕ようが無いから来たんだ」

庄「旦那妙なもので、これは本当に真の友達で、銭が無けりやア貸して遣やろう、己おらが持もち合せあわが有れば貸そうという中で有りますと」

傳「随分此の人の部屋で燻くずぶつた事もあるのでねえ」

典「左様かえ、兎も角も」

とはから有あり合物あいのもので何かみつくるつてと云つて一杯始めると、

傳次は改めて手を突き、

傳「私わっちア旅魚屋の傳次と申す者で、何うか御贔屓になすつて……

大層机などが有りますね」

典「あゝ田舎は様々やらでは成らんから、出来はしないが、村方の子供などを集めてな、それに以前少しばかり易えき学がくを学んだかなうらない売うトをやる、それに又また少しは薬屋のような事も心得て居おるから医者いしやの真似もするて」

傳「へえー手習の師匠に医者いしやに売うトに薬屋いしやでがすかこれは大丈夫

でげす、どうも結構なお住居すまいですな」

典「田舎では種いろく々な事を遣らぬではいかぬ、荒物屋は荒物ばかりと極きめてはいかぬて」

傳「妙でげすな」

典「さアお酌を致しましょう」

傳「へえ：有難う」

典「まずい物だが召上れ」

傳「頂戴致します…：庄吉さん久し振で酌をして呉んねえ、何うも懐かしいなア、何うして来たかなア」

庄「本当に思掛けなくゆやはや恥かしいな、何うしてお前も此こ処いへ来たか」

傳「旦那おかしい事があればあるものさ、此の人はね越中の高岡で宗慈寺という寺に居りました寺男でね、賭博ばくちをしておかしい事がありやした……今では過去すぎきつた事だが、あれは何うなつたえ」庄「何うたつて何うにも彼こうにも酷ひどい目に遭おうたぜ、私わし縁の下に隠れて、然そうしてお前様死人しびととは知らぬから先に逃げた奴が隠れて居ると思うたから、其奴そいつの帯を掴つかんでちまゝと隠れて居ると、さア出ろ、さア出ろと云うので帯を取つて引かれるから、ずるゝと引摺ひきずられて出ると、あの一件が出たので」傳「旦那もう過去つたから構わねえが、此の人が死人しびとと知らずに帯つかまに掴つかつて出ると、死人しにんが出たので到頭しんぼくが割れて縛いられて往いきました」



庄「すると彼れから其の響けで永禪和尚が逃のげたので、逃げる時  
 藤屋じやアマアの女房と眞達を連れて逃げたのだが、眞達を途中で切殺して  
 逃げたので、ところが眞達は死人しにんに口なしで罪を負うて仕舞い、  
こちら此方は小川様が情深い役人で、調べも軽かろくなつて出る事は出たが、  
えつたん一旦人殺しと賭博とばく騒さわぎが出来たから、誰あつて一えつしよ緒しよに飯い喰  
 う者もないから、これは逆とても仕様がねえ、と色々えろく考え、何処どこか  
ほか外へ行いこうと少しばかりの錢を貰うて流れくくて此処へ来て、不  
 思議な縁で、今は旦那の厄介になつて居いるじや」  
 傳「旦那、……寺の坊主が前町の荒物屋にようぼうの女房と悪いことをしや  
 アがつて、亭主を殺して堂の縁の下へ死人しびとを隠して置いたのさ、  
 ところで其の死人に此奴こいつが掴つかまって出たと云う可笑おかしい話だが、

彼の時おれは一生懸命本堂へ逃げ上つたが、本堂の様子が分らねえから、木魚に蹴躓けつまずいてがらく音でしたので、驚いて跡から追掛おっかけるのかと思つたが、然そうじゃアないので、又逃げようとすると、がらくらくと位牌が転がり落る騒ぎ、何うか彼こうか逃げましたが、いまだに経机の角で向むこう脛すねを打つた疵きずは暑さ寒さには痛くつてならねえ」

庄「怖おっかねえことであつたのう」

傳「それが此処で遇おうとは思わなかつたが、お互いに苦勞人の果だ」

典「時に改つて貴公にお頼み申したいことがあるが、今の婦人は主ぬしはないのか」

傳「えゝ主はない、たつた姉きようだい 弟二人で弟は十六七で美しい男さ、此の弟は姉さん孝行姉は弟孝行で二人ぎりです」

典「親はないのか」

傳「ないので、伯父さんの厄介になつて機はたを織つたり糸を繰とつたり、彼のあくらい稼ぐ者は有りませんが、柔やさしくつて人柄が宜いい、いやに生なまつ世辞せじを云うのではないから、あれが宜ようございます」

典「拙者てまえも当地へ来て何うやら斯うやら彼こうやつて、家うちを持つて、聊いさゝか田畑を持つ様になつて村方でも何うか居おり着いて呉れと云うのだが、永住致すには妻さいがなければなり成らぬが、貴公今の婦人てに手て蔓づるが有るなれば話をして、拙者の処の妻にしたいが、何うだろう、話をして貴公が媒なこうど介人にでも、橋渡しにでもなつて、貰もらう受けて

呉れ、ば多分にお礼は出来んが、貴公に二十金進上致すが、その金を遣つてしまつてはいかぬけれども、貴公も左様して遊んで居るより村外れで荒物店でも出して、一軒の主になつて女房子でも持つようになれば、親類交際に末永く行き通いも出来るから傳「有難うがす、私も斯う遣つてぐずついて居ても仕様がねえから女房も置去にしましたが、これは下谷の上野町に居りますが、音信もしませんので、向うでも諦らめて、今では団子を拵えて遣つて居るそうですが、そうなれば有難い、力に成つて下されば二十両戴かなくつても宜い、併し苦しい処だから下されば貰います、それは有難い、私が話せば造作なく出来るに相違ありませんから、行つて話をしましょう」

典「早いいが宜いいが」

傳「えゝすぐなに直すぐに往いきましよう」

と止せば宜よいに直よに柳田典藏りゅうでんの処ところを出て、これから娘むすめの処ところへ掛合かあひに参る。是こゝが間違まちがひの端緒はなはち、この娘むすめお山やまは前ぜん申まを上げた白島山平しらかじまやまひらの娘むすめで、弟あには山さん之助のすけと申して、親山平おやまひらは十六年前じゅうろくねんから行方知れずになり、母ははは亡なくなつて、この白島村しらかじまむらの伯父おぢの世話せわになつて居りますが、これから姉きょうだい妹まいが大難おほいに遭あひますお話おはなし、一寸一息つきまして。

おやま山之助の姉きょうだい弟は、白島山平が江戸詰になりましたから行方知れずになり、母は心配致して病死致した時はおやまが八歳、山之助が三歳でござりますから、年の往ゆきません二人の子供は家の潰れる訳ではないが、白島村の伯父多右衛門たえもんが引取り、伯父の手許てもとで十五ヶ年の間養育を受けて成人致しまして、姉は二十二歳おとこ弟は十七で、小造こづくりな華者きやしやな男で、まだ前髪だちでございませす。姉も島田で居りますが、堅い氣象で、姉弟してひよつとおとつさま父様がお歸りの有った時は、伺うかがわずに元服しては濟まないと云うので二十二で、大島田に結つて居ると申す真実正しい者で、互いに姉弟が力おもいあに思合いました、山之助は馬を引きあるい或は人の牛を牽ひきまして、山歩きをして鹿そだ朶を積んで歸る。姉は織物をしたり糸

を繰とつたりして隙すきはございませんが、少し閑ひまが有れば大滝村の不  
 動様おやじへ親父おやじの生いきしに死行方が知れますようにと信心して、姉弟二人  
 中ちゆうようして暮して居ります。門口から旅魚屋の傳次がひよこく  
 お辞儀をして。

傳「へい御免なさい」

山之助「はいお出でなさい」

傳「今日は結構なお天気で」

山「はい、何どなたさま方様で」

傳「へい私わつちも久しく此地こちらに居りますからお顔は知って居ります、

私は廣藏親分の処ところに居る傳次と云う魚屋でございませすが親分の厄や  
 つけえもの

介者つけえもので」

山「へえそうでございますか」

傳「どうも感心でげすね、姉様ねえさんを大事になすつて、お中が宜いいつて実に姉弟で斯こう睦むつましく行く家うちはねえてえ村中の評判でござい  
ますよ、へえ御免なさいよ」

やま「さアお掛けなさい、何か御用でございますか」

傳「へえ姉様ねえさんまアね藪やぶから棒ぼうに斯こんな事を申しては極りが悪う  
ございですが、頼まれたからお前さんの胸だけを聞きに來ました  
が、あの大滝の不動様へお百度を踏みにいらつしやいますね」

やま「はい」

傳「今日お百度を踏んで帰んなさる時、葎よしずつぱり張はりの居酒屋でそれ  
御ぞんじでげしようね、詰あすこらねえ物を売る、彼あすこ処こにね腰こしを掛けて



居た、黒の羽織を着て大小を差し色の浅黒いさかやき月代の生えた人柄の宜い旦那をいごらんすつたか」

やま「はいわたくし私は何だか急ぎましたから、薩張さつぱり存じません」

傳「彼あの方は元お使番つかいばんを勤めた櫻井監物の家来で、柳田典藏

と仰しやる大した者、今は桑名川村へ来て手習てなれえの師匠で医者いを

してそれで売うらないトをするさんてんぱり三点張で、立派な家うちに這入つて居て、

これから追々おい田地でんじでも買おうと云うのだが、一人の身みのうえ上では

不自由勝だから、傳次女房を持ちてえが百姓の娘では否いやだが、聞

けば何か此方こちらの姉ねえさんは元武士さむれえのお嬢さんで、今は御運が悪くつ

て山家へ這入つて居る様子だが、彼の姉さんを嫁よめに貰もれえてえが傳

次お前は同じ村に居るなら相談して貰もれいてえと頼たのまれましたが、

そうすれば弟御様おとゝごさまは一緒に引取り、先方むこうで世話をしようと言う、お前さんも弟様にいさんも仕合せしやあで、此の上もねえ結構な事、お前さんの為を思つて私わちきは相談に来たんだが、早速お話になるよう善は急げだが何うどでげしよう」

やま「まことに御親切は有難うございますが、私わたくしの身の上は伯父に任して居りますから、伯父さえ得心なれば私は何うでも宜よいので」

傳「へえ伯父さんあの多右衛門さんでげすかえ、へえ然そうで、堅い方で、長い茶の羽織を着て居るお人かね、時々逢います、あの伯父さんさえ得心なれば宜しいの、宜しい、左様なら」

と直すぐに伯父の処へ行きまして。

傳「へえ御免なさい」

多「はい何方どちらから、さア此方こちらへ」

傳「へえ私わっちは廣藏親分の処に居ります、傳次てえ不調法者で」

多「左様で御ざりやすか、御近所に居りましても碌にお言葉も交かわしませんで、何分不調法者で、此の後ごともお心安く願います」

傳「へえ私わっちも何分お心易く願います、就ついてはね、今姉ねえさんの処へ往つたのですが……あなたには姪御めいごさんでありますね」

多「へえ、おやまに」

傳「へえ姪御さんに逢つてお話をした処が、伯父さんさえ得心になれば宜いいと云う嫁の口が出来たので、誠に良いい口で、桑名川村の柳田典藏と云う大した立派な武士さむらいだが、運が悪いとは云いなが

ら此方こつちへ来て田地や何かも余程有り、また是から段々ふや殖ふやそうとい  
 う売うらないトに手てなれえ習えの師匠に医者いしやの三点張と云う此このくらしい結構な  
 事は有りませんが、彼あすこ処へお遣やりなすつては何うで、弟おとこ御ごぐる  
 み引取ると云うので、随分お為になる処でございしますが」  
 多「おやまが貴方あなたに御挨拶致すに伯父が得心なれば構わぬと言  
 いましたか」

傳「え、言いました」

多「何うも自分ではお断りが仕憎しにくいから、大概の事は私わしの処へ行  
 って相談して呉れと、まず言いいぬけ拔ぬに云いますよ、彼あれはなアとて  
 もな無駄でございます」

傳「へえ何う云う訳で」

## 三十三

多「いえ十六年前あとに親父おやじが行方知れずになつて、今に死んだか生きたか知れない、音も沙汰もねえでございしますが、ひよつと親父が存ぞん生しょうで歸つた時は、親父に一言の話もしないで聲を取つたり嫁に行つては濟まぬと云つて、姉きょうだい弟だいで、あゝ遣やつて、元服もせずなんに居りますくらいでござりやすから、何処どこから何と云つても駄目なでござりやす、聲でも取つて遣りたいが中々左様そう言つたつて聴ききアしませんから」

傳「それじゃアお父とつさんが歸らねえでは相談は出来ませんか」

多「へえ親父が帰れば直すぐに相談が出来ますが、帰らぬうちは駄目でござりやして、ひやア」

傳「弱りましたね、左様なら」

と呆ぼんやり然帰って来て。

傳「へえ往つて来ました」

典「いやもう待つて居ました」

傳「へえ」

典「何どうもね、お前は弁舌が宜よし、何かの調子が宜いいから先方で得心するなら、多分のお礼は出来ぬが、直にうんと得心の上からは失礼の様だが、まア当座十金差上げるつもりで目録包にして此こ処こに有るので」

傳「へえー、からどうも仕様がねえね、誠に何うもいけません、幾ら金を包んでも仕様がねえあれば」

典「何ういう訳で」

傳「何うたつていけません、誠に話は無しだねえ、親父が十六年あとに行方知れずに成つたから、親父の歸けえらぬうちは嫁いにも行かぬ聲も取らぬ、元服もしねえ、親父に聴かねえうちにしては済まぬてえ彼あれは変もんり者でげす、いけませんよ、へえ」

典「いかぬと云うのか」

傳「えー往いかねえと云うのでげす」

典「左様か仕様がな、それは仕方がない、それは先方むこうで厭いやなんでげしようが、然そう云わなければ断り様がないからだ、今時の者

が親父が十六年も行方知れず音沙汰のない者を待つて元服もせず  
に居るなんて、そんなら二十年も三十年も四十年も歸らぬ時は何  
うする、白髪しらがになつて島田で居る訳にもいかぬが、それは先方が  
断り様がないから、然う云うのだ、宜しいく、宜しいけれども  
実は事を極めて来たら直に礼をする心得で、ちやんと金も包んで  
置いたが、仕方がない、是までの事だ」

傳「から何うも仕様がねえ変り者もんでげすな、お前めえさんの云う通り  
白髪しらがの島田はないからねえ、何うも仕様がねえ何うも」

典「貴公わし私せんぼうの名前を先方へ言いますまいねえ」

傳「私わっちは左様そうち言いましたよ、柳田典藏さん様と云う手習てなれえの師匠で、  
易たつを立て斯こうとすつかり列ならべ立つたので」



典「それは困りますね、姓名を打明うちあかして呉れては恥入るじやア  
ないか」

傳「だって余程よっぽど受けが宜かろうと思つて列べたので」

典「それはいかぬ、先先方ますで縁談とくのが調うか否いなかを聞いて詳くわしくは云  
わんで、然しかるべき為になる家うちぐらいの事を云つて、お前行ゆくか、  
はい参りますとぼんやりでも云つたら、そくく、姓名を打明けて  
云つても宜いいが、極らぬうちから姓名を打明けては困りますな、  
何うも最もう少し何か事柄わかの解るお方かと思つたら存外考えがなか  
つた、宜しいく、実は荒物屋の店でも貴公に出させようと思つ  
て、二三十金は資本もとでを入れる了簡で、媒介なこうどおや親と頼まんければ成  
らぬと思ひまして……最う少し万事に届く方と思つたが、冒頭のつけに

姓名を明かされては困りますねえ、実に恥入る」

傳「然う怒つたつていけません、旦那、旦那怒つちやいけません、斯う仕ようじやアございせんか、種々いろくわつち私も路々みちく考えたが私の云う事を聴いて然うお前さんまえ云つてしまつてはいけねえ、あれさ、そんな事をぶんく怒つたつていけません、何でも氣を長くしなければ成らねえ、あの娘は不動様へ又お参りに来ましよう、そこでまだ貴方を見ねえのだから先刻さつち私が話を聴いて見ると、斯ういう墨くろの羽織を着て、斯々これくの方を御覧かと云つたら急いだから存じませんと云うから、あの娘に貴方を見せたいや、貴方ね、二十二まで独身ひとりで居るのだから、十九つゞや二十はたちで色いろざかり盛男欲しやで居るけれども、貴方をすうつとして美男いとおとこと知らず、矢張やっぱり

村の百姓と思つて居るから厭だと云うかも知れねえから、お前さんの色白で黒の羽織を着てね、それが見せたい、まだ当人に逢わないからで、娘が逢いさえすれば直すぐだからお逢いなさい」

典「逢うたつて、それ程厭てえものを逢う訳にはいきません」

傳「それは工夫で、お前さんと二人で例の茶見世へ行つて、旨く

もねえ、碌なものはねえが、美いい酒を持つて行つて一ぱい遣やつて、

衝ついたて立の内に居るのだね、それで娘がお百度を踏んで帰けえる所を引

つぱりこ

張込んで、お前さんが乙おつう世辞を云つて一杯飲んでお呉れと盃

をさして、調子の好いい事を云うと、娘はあゝ程の宜いい人だ、あゝ

云う方なら嫁に行きゆたいとずうと斯う胸うかに浮んだ時に、手を取つ

て斯う酔つた紛れに□つてしまふが宜い、こいつは宜い、これは

早い、それで伯父さんに掛合うからいけないが、当人に貴方を見せてえ、これが私は屹度往こうと思つている」

典「だけれども何かどうも赤面の至りだな、無暗に婦人を引張込んで宜しいかねえ」

三十四

傳「宜しいたつて、お前さんの様な人は近村きんそんに有りやアしません、だからお前さんを見せたい、ちよつと斯こう大めかしに着物も着替え、髪も綺麗にしてね」

典「何どうも何なんだか、宜しいかねえ、旨く往いくかねえ」

傳「宜しいてえ是は訳はねえ、明日遣りましよう」

と悪い奴も有るもので、柳田典藏も己惚が強いから、

典「じやア往きましよう」

と翌日は彼の大滝村へ怪しい黒の羽織を引掛けて、葎簧張の

茶屋へ来て酒肴を並べ、衝立の蔭で傳次が様子を窺つて居

ると、おやまが参つて頻りにお百度を踏み、取急いで帰ろうとす

ると飛出して、

傳「姉さん」

やま「はい」

傳「此の間は」

やま「はい此の間は誠に」

傳「此こ間話したね柳田の旦那が彼あ処で一杯飲んで居るが、一ちよつ

寸とお前さんに逢いたいと云つて」

やま「有難うございませうが、私わたくしは急ぎますから」

傳「お急ぎでしようが、そんな事を云つちやアいけねえ、此こ間

ね、旦那にお頼たのみの事はいけねえと云うと、手前てめえは行きもしねえで

嘘だと云つて疑ぐられて居て詰らねえから、お前さん厭でも一寸

上あつて、傳次さん此間はお草そう々でしたと云えば宜いい、然そうすれ

ば私わちが行つたてえのが通じるのだから、彼あ処へ往つて一寸私に挨

拶するだけ」

やま「いけませんよ」

傳「いけねえてえ私わちが困るから、野暮やなことを云わずにお出でな

さい」

と無理に引摺りひきず込んだから仕方なしにひよろ／＼よろ躑あがけながら上り口ぐちへ手を突くと、臀しりを持つて押しますから、厭々上つて来ると、柳田典藏は嬉しいが満ちてはつと赤くなり、お世辞を云うも間が悪かったか反身そりみになつて、無闇に扇で額を叩き、口も利かずに扇を振り廻したりして、きよと／＼して変な塩梅あんばいで有りますから、傳「旦那、旦那お連れ申しました、此方こちらへ／＼、ぐず／＼して居てはいけねえ、姉ねえさんに御挨拶をさ」

典「これは何うも誠に、何か、御信心参りにお出での処ところを斯様な処へお呼立て申して甚だ御迷惑の次第で有ろうと申した処あがが、何か、御迷惑でも御酒を飲あがらぬなれば御膳でも上げたいと思つて、

一寸これへ、何うも恐入ります、一寸只御酒はいけますまいから、  
じやア御膳を」

と云うのを傳次は聞いて、

傳「いけねえね、そんな事ばかり云つて困るな、めかして居て：  
一寸姉さんお盃を、お酌を致しますから」

やま「何をなさる、お前さん方は何をなさるのでございますえ、  
わたくし私の様な馬鹿でございますけれども、あなた方は何もお近ちかづき昵に  
なつた事もない方が無理遣むりやりにこんな処へ手を持って、厭がる者を  
引張込んで、人の用の妨げをして、酒を飲めなんて、わたくし私は酒のお  
相手をする様な宿屋や料理茶屋の女とは違います、余り人を馬鹿  
にした事をなさいますな」



傳「旦那、腹を立つちやアいけねえ……姉さん然そう云つちやアから何うも仕様がねえ、それは然うだがね姉さん人の云う事をお聞きなさいよ、この旦那は早く言えばお前さんに惚れたんだ……旦那、黙つて其方そっちにおいでなせえ、お前さん口を出しちやアいけねえ、黙つて頭を叩いておいでなさい：姉さん、人の云う事をお聞きよ、此こないだ間伯父さんへ掛合つたのだ、宜いいかえ、処ところがそれはお父さんが居ねえので元服もせず待つて居ると云うお話だから、その事を柳田さんに話すと、それは御ごもつとも尤よだてんで、今日も柳田さんがお前さんと呼んでくれと云つたのではない、全く私わっちの了簡で、旦那は誠に感心な娘だと云うので、どうも十六年も音信おとずれをしない親父おやじを待つて、それ程までに元服もせずに居るとは、実に

孝行な事だから嫁が厭なら宜しいが、実にその志操こころざしに傳次や尚惚なほれるじやアねえかと斯こういう旦那の心持で、誠に尤もつともだからそう云う事ならせめて盃の一つも献酬とりやりして、昵ちかづき近に成りたいと云うので、決して引張込んで何う斯うすると云う訳じやアないが、お前さんが得心して嫁になれば弟も引取つて世話をすると云う、実に仕合せだから、うんと云つたら宜いじやアないか」

やま「何をうんと云うのでございますえ、私わたくしの身の上は伯父に」

傳「それは伯父さんに聞いたよ、遁辞いひぬけで伯父かこつさんに托けると云う事は知ってる」

やま「知つて居るなれば何も仰しやらんでも宜いじやア有りませんか、私わたくしも今は浪人しては居りますけれども、やはり以前は少々

御扶持を頂きました者の娘でございます、あなた方の御酒のお相手を致すような芸者や旅稼ぎの娼妓とは違います、余りと申せば失礼を知らぬ馬鹿くしいお方だ」

## 三十五

傳「あれ、それじゃア姉さん、だがね、困るねどうも、然うお前さん言ってしまったては……何とか云い様が有りそうなものだ、何うも困るね、左様じゃア」

やま「左様じゃアって考えて御覧なさい、お前さんは頼まれたか知らないが、此処にいらっしやる方は大小を差した立派なお武家

様で、人の娘を知りもしない処ところへ無理遣むりやりに引摺ひきずり込んで、飲め  
 もしない者に盃をさして何うなさる、彼あの方は本当に馬鹿々々し  
 くて、私わたくしも武士の家に生れたが、武家はそんな乱暴な馬鹿な真似  
 は為しはしません、余あんまり馬鹿な事で呆れて愛想もこそも尽果てた厚  
 かましい人だ」

典「なに厚かましいと、何なんだ、馬鹿々々しいとは何だ、否いやなら否  
 で宜しい、無理に嫁に貰おうと云う訳ではないが、手前てまへが……」  
 やま「厚かましいから厚かましいと申しました、袖をお放しなさ  
 いよ」

と袖を引張るのを、  
 やま「お放しなさい」

と立上りながら振切つて百度の籤くじをぽんと投付けると、柳田典藏の顔へ中あたつたから痛いとうございます。はつと面つらを押えて居るうちおもて戸外へ駈出しました。

典「傳次々々」

傳「へえ、何うも彼のあ通りで仕様がねえ」

典「だからいけぬと云うに、無理遣りに連れ出して、内ない々くならば仕様も無いが、斯こういう茶見世へ参つて恥はを与えるとは怪けしからん事」

傳「お前さん、そう怒いつちやアいけねえ」

典「貴様は最もう己おれの家うちへ来るな」

傳「そんな事を言つてはいけねえ、旦那腹を立ててはいけません、

婆ばあがね、娘の跡を追掛おつかけたが、居ないから最う仕方がないが、お前さん腹を立つちやアいけません、そこは処きむすめ女たといで、仮令向うが惚これていても、氣障きざだよお止しよと振払うのは娘つ子の情で、殊ことには二十二まで何だつて島田で居る様な変り者もんだから、氣短かに何う斯うと云うなア、からもう色をした事もないようで、極りが悪いじゃア有りませんか、何でも氣長に往いかなければいけません、旦那斯うしましょう」

典「もう手前の云う事は聴かぬ、種々いろくの事を云つて籤さしを投付けて」

傳「籤さしなんぞは何でも無い、此の前張倒されて溝どぶへ落ちた人も有るそうでねえ、斯うなさい、娘を何うかして、そーツと他処わきへ連

れて行こう」

典「連れて行つて何うする」

傳「何うすると云つてまアお聞きなさい、何処かへ夜連出して、

酷い様だが私一人ではいけねえ、ぎやア〜云わねえ様に猿

轡でも箆めて、庄吉と二人で葉広山へ担いで行つて、芝原

の綺麗な人の来ねえ処で、さて姉さん、是程惚れて居る者を宜く

此間は大滝村で恥を搔かしたな、殺して仕舞うと云うのだが、

可愛くつて殺せねえ、若し云う事を聴かぬ時は武士が立たぬとか

男が立たぬとか云つて、何でも女房に成つて呉れ否てえは仕方が

ねえから、腕を押えても□□寝るが何うだ、それよりは得心し

て知れない様にと云えば命が惜いから造作アねえ、それから家へ

連れて来て、得心ずくでお前さん□□□寝ちやア何うです宜うが  
すか、それで娘の方で屹度きつと惚れるねえ、初めて男の味を覚えて、  
真にあゝ云う人ならと先方むこうから惚れて、伯父さん嫁に遣やつてよう  
と先方から云うよ」

典「うーん然そう旨く往いくかえ」

傳「それは大丈夫いきますとも」

とそれから様子を窺うかがつて居ると、八月の十八日は白島村の鎮守  
の祭礼で、今日は屹度来るに相違ない、何うかして担かぎ出そうと  
昼から附けて居ると、昼の中うちは用が有るから物見遊山にも出ず、  
不動様へお参りに行くゆだけで、夜よに入いつて山之助と二人で、祭礼  
だから見て来ようと云つて来ると、突だしぬけ然に竹藪の茂みから駈出



して来て、おやまを担ぎ上げて、どん／＼／＼／＼林の小路へ駈こみち  
 上りました事でございますから、山之助は盗賊どろぼう……勾かどわかし引……  
 ……と呼んで跣足はだしで追掛おっかけると山之助は典藏に胸をどんと突かれま  
 したから、田の中へ仰向あおもむけに転がり落ちます。其の中にどん／＼と  
 路みちを走り、葉広山まで担いで駈上ります。折から雨がざあ／＼  
 と降出して来ましたが、その中をどん／＼滑る路を漸々よう／＼と登りま  
 して芝原へおやまを引据ひきすえて、三人で取巻く途端、秋の空の変わり  
 易く忽やすたちまちに雲は晴れ、木の間こまを漏れる月影に三人の顔を睨にらみ詰め、  
 おやまは口惜くやしいから身を慄ふるわして芝原へ泣倒れました。

傳「おい姉さん、泣いたつていけねえ、おい、お前本当に今日斯う遣つて担ぎ上げたのは酷い、盗賊、勾引と思つたらうが、然うでない、実は旦那が又惚れたんだ、お前が籤をぽんと投付けて否だと云つたので、何うも堅い娘だ、感心だ、あんな女を女房に貰わないでは己が一旦口を出したのが恥だから、お父さんの帰つた時はどの様にも詫をする……担ぎ上げたのは酷いが、話を為したいからの事だが、これから柳田の旦那の処へ行つて……なに泊めやアしない、一寸彼処で酒の相手をして、な、否てえば仕方がねえ、私が中へ這入つて旦那に済まねえ、済まねえから二人で腕を押え足を押えて居ても、否でも応でも旦那に思いを遂げ

させなくちやアならねえが、左様そうすればお前得心きずずくでなく疵きずを  
付けられて、他ほかへ縁付く事も出来ねえ、それよりはうんと云つて  
得心おとうとごしあわせさえすれば弟御も仕合、旦那も斯こんな挙動まねを為たくはねえが、  
お前があゝ云う気性だから仕方がねえ、よう後生だ、ようそれで  
連れて来たんだ、私が困るから諾うんと云つて、よう後生だから諾と  
云つて呉んねえ」

やま「さア殺しておしまい、何うも恐しい悪党だ、徒党をして山  
へ連れて来て慰さもうとする気か、舌を嚙んでも人に肌身を汚けがさ  
れるものか、さア殺してしまえ」

傳「それじゃア仕様がねえ、おいそんな事を……お前めえが否だと云  
えば手足を押えても□□ぜ」

やま「慰めば舌を喰切つて」

典「なに」

傳「旦那腹を立つてはいけねえ、おい姉さん、お前否だと云えば

仕方がない」

と無理遣むりやりに手を取りますと、

やま「何を、放せえ」

と手に喰付きますから、

傳「いけねえ、此のあまつちよ、おい庄吉さん□□□□□□□□」

と□□□□押おしこ転かし、庄吉は足を押える。

やま「ひー殺してしまえ、殺せえ」

と云う声は笈こだまに響うしろきます、後の三峰堂みみねどうの中に雨止あまやみをしてい

た行脚あんぎやの旅僧たびそう、今一人は供と見えて菅すげの深い三度笠さんどうがさに廻し  
 合羽あひらで、柄前つかまえへ皮を巻いて、鉄拵てつごしらえの胴金どうがねに手を掛け、  
 千草木綿ちくさきもめんの股引こうがけに甲掛草鞋穿わらじばきで旅馴れた姿、明荷あけにを脇わきに置き、  
 一人は鼠ねずみの頭陀ずだを頸くびに掛け、白しろい脚半きゃはんに甲掛草鞋わらじ。  
 男「あゝ氣いきの毒どくな、助すけけて遣やらん」

と飛出としましたのは前ぜん申ま上げました水司みずし又市またいちの永禪えいぜん和尚おしょう、彼かの  
 川口かわぐちの薬師堂やくしどうに寺男てらおとこになつて居ると、尼様にじやうに寺男てらおとこが御経ごけいを教おしえて  
 居る、あれは寺男てらおとこが本当ほんとうの坊主ぼくしゆの果はで有あろうと段々だんだん噂うわさが高たかくなり、  
 薄氣味うすきみが悪わるいから、川口かわぐちを去さつて越後えちごから倉下道くらげみちを山越やまこをして  
 信濃路しんねいろへ掛かつて、葉広山はひろやまの根方ねかたを通り掛かると村雨むらゆに逢あひ、少しの  
 間雨あまやみ止とと三峰堂さんぷうどうへ這入はつて居ると、雨も止とまりましたから、支度しど

をして出ようと思ふ処へ人殺し、殺してしまえと云う女の鉄切り  
 声ゆえ、つかくと飛出しまして、又市は物をも言わずに、娘の  
 腕を押えて居りました傳次の襟えりがみ髪を取つて引倒し、足を押えて  
 居た庄吉の頤あごを土足で蹴倒しますると、柳田典藏は驚き、何者だ  
 と長いのを引抜いて振上げる。此方こちらも透すかさず道中差をすらりつと  
 引抜き、

又「何者とは何だ、悪い奴らだ、纖弱かよわい女を連れて来て、手前てまいた  
 達ちが何か慰もうと云うのか、ひいゝ泣く者を不埒な奴だ、旅  
 だから許してやる、さつくと行いけ、兎とや角こう云えば承知致さぬ  
 ぞ、さつさつと行け」

傳「あゝ痛いたえ、突だしぬけ然にに無闇と蹴やアがつて、飛んだ奴だ、手前てめえ

は訳を知るめえが己達はかどわかし勾かど引かどでも何でもねえ、この女には訳あまつちよがあつて旦那に済まねえ廉かどが有るから、此方こつちが為になる様に納得させようと思つて居るのに、きいきい云やアがるから嚇おどしに押えるのだ、お前めえは何も知らねえで、何もいらざる所へ邪魔アしやアがるな、旅の者だと吐ぬかしやアがる手前は」

と月影で顔を見合せると、互に見忘れませぬ。又市も傳次も見たようなどと思うと、庄吉は宗慈寺に旧来奉公して居りましたから、永禪和尚の顔を能よく知つて居りますから、

庄「えゝゝゝゝ貴方は高岡の永禪様」

永「庄吉か」

庄「永禪様か」

と此の時は又市も驚きまして、此奴らは吾身わがみのうえ上を知つて居る上からは助けて置いては二人の難儀と思ひ、永禪和尚と声を掛けられるや否や持つて居た刀で庄吉の肩へ深く切付ける、庄吉はきやアと云つて倒れる。傳次は驚いて逃げに掛る処を袈裟掛けさがけに切りましたから、ぼつたり倒れると、柳田典藏は残念に思ひ、この乱暴人と自分の乱暴人を忘れ振冠ふりかぶつて切掛ける。又市は受損じ、蹠よろめく機はずみに又市が小鬢こびんをはすつて頭かしらへ少し切込まれたが、又市は覚えの腕前返す刀に典藏が肱ひじの辺あたりへ切込みますと、典藏は驚き、抜刀を持ちながらばらばらくくくく山から駈下かけおりました。傳次は面部きずへ疵を受けながら、

「太ふてえ奴だ人殺し」



と又市の足へ縋り付く処を。

又「放せえ、うーん」

と止めを刺しましたから、其の儘息は絶えました。

永「惠梅々々」

梅「はい怖りました」

又「宜いかえ」

梅「あゝ怖い」

又「お前は嘸怖かつたで有ろうのう、斯様な奴を助けて置くと村方を騒がして何の様な事を為るかも知れぬから、土地の助けに殺したのだ」

やま「有難うございます、命の親でございます」

と手を合せたが、おやまは後あとへ下さがる、是は又市が刃物を持って居りますから氣味が悪いから後へ下る。

又「何も心配は無いから」

と血のりを拭ぬぐつて鞆さやに納め、額の疵へ頭陀の中より膏こうやく薬を出して

貼付け、後鉢うしろはちまき巻まきをして、

又「さア是うちから家まで送ろう」

とおやまの手を取つて白島村へ帰ろうとする途中、山之助が歸つて伯父に知らせたから、村方の百姓ばか二十人許りおやまの行方を捜しに来る者に途中で出逢い、これから家まで送り届けると云う。

是が縁に成つて惠梅と水司又市の二人がおやま山之助の家へ来て永く足を留める。これが又一つ仇あだうち討うちに成りまする端緒いとぐちでござい

ます。

三十七

おやまの危あやうといころを助けて、水司又市と惠梅比丘尼は彼かのおやまの家うちまで送つて参る途中で出会いました者は、弟山之助に村方の者でございます。

山「姉は何ど処こへ担がれて参つたかと、伯父多右衛門と大きに心配して尋ねに参る処で、貴方が助けて下さつたか有難う存じます」  
皆々も大悦びでございます。

又「実は斯こう云う訳で、はかからずも通り掛つてお助け申したが実に

危あぶない事であつた、併しかしお怪我もなくして幸いの事で有りましたが、就ついでては私わしも止むを得ず二人まで殺したからは其の届を出さなければ成るまいが」

多「はい／＼届けましても御心配はございません、重々悪い事が有る奴でございませうから」

と是から名主へ届けました処が、素もとより悪人という事は村方で大概ほしの付いて居ります旅魚屋の傳次なり、おやまを辱はぢかしめようとした廉かどがあり、直すぐに桑名川村へ調べに参ると、典藏は家を畳み、急に逐電致しました故、此の事は山家ではあるし、事なく済みましたが、此方こつちは急ぐ旅でないから疵きずの癒なおる間逗留して下さいと云われ、おやま山之助二人暮しの田舎住居すまい、又市は幸いにし

て膏藥を貼つて此の家に逗留して居る間は、惠梅比丘尼は方々へ齋ときに頼まれて参り、種いろく々な因縁話を致しまして、

梅「私も因縁あつて尼になり、誠に私は若い時分種々の苦勞も有つたが、只今では仏道に入いつて胸の雲も晴れて、実に世の中を氣樂に渡る、是が極樂と申します」

などと、尤もつともらしい事を云うと、田舎の百姓衆は此方こちらへ何卒どうぞいらつしやつて、私の親類が三里先に有りますが、是へもと云つてお布施を貰い、諸方へ参つてお齋を致しますと、お布施の外ほかに割ひききわめるいああひえ麦あ或いは粟稗あなどを貰つて、おやまの家うちの物を食つて居るから、  
 実いは何時いつまでも置いて貰いたいと思つて居りますうちうちに疵ひも癒り、  
 或ある日ひ惠梅比丘尼は山之助と隣村まで参りまして、又市は疵口の膏

薬を貼替えまして、白布で巻いては居りますが、疵も大方癒たから酒好さげずきと云う事を知り、膳立ぜんだてをして種々の肴こしらを拵えまして、やま「もしあなた、一杯お酒を癩つけましたから召上りませんか、お医者様も少し位召上つても障さわりには成らないと仰しやりますから、一口召上りまして」

又「いや誠に有難う、大した事ではなし、一体酒が好すきで旅をするには一杯飲めば気が晴れるから、宿で一杯出せば尼様に隠なして内いしよ所で飲むこともある、これはく有難う……え、お前はまア姉きようだいしゆう  
弟 衆二人ながら仲よう稼はたぎなさる、暗いうちから起きて糸を繰はたつたり機はたを織はたつたり、また山之助さんは牛馬ぎゆうばを牽ひいて姉弟で斯う稼ぐ人は余り見た事がない、実に感心の事じゃ」

やま「いゝえもう二人ながら未だ子供のようでございます、彼あれが  
年も往いきませんから届きません、只私を大事にして呉れます、日  
々あゝやつて御城下へ参りまして、荷を置いて参ります、又彼方あちら  
から参る物は此方こちらへ積んで参りまして少々の賃ちん銭せんを戴かきます、  
はい宜く稼かぎますが、丁度飯山の御城下へまいり、お酒の美よいの  
を買かつて参りましたが、お肴なは何なんにもございせんが、召上まつて  
下さいまし」

又「いや此こ処ところらは山家でも御城下近いから便利でございます、一  
杯頂戴致たしましょう、是こははいい御馳走ちしうに成なります……一杯酌しやくいで  
下さい、四五日酒を止やめて居たので酔よいはせんかな」

やま「どうぞ召上まつて」

となみくくとつぐ。素もとより好きな酒、又市二三杯飲むうち、少し止めて居たから顔へ色がぼうと出ましたけれども、桜色という訳にはいきません、栗皮茶くりかわちやのような色に成りましたが、だん／＼酔えいが廻りますと、もとより邪淫奸智じやいんかんちの曲くせもの者、おやまは年とし齡二十二でございます、美くしい盛りで、莞爾にっこりと笑います顔を、余念なく見て居りましたが、

又「あゝ見惚みとれますねえ、お前さんの其の、品の良いこつちやなア：あゝ最う十分に酔えいました、もしおやまさんく」

やま「はい」

又「あの何なんで、この先に伯父さんが有るが、彼あれはあなたの眞実の伯父さんかえ」



やま「はいわたくし私の真実の伯父でございます」

又「御両親はないのかえ」

やま「はい両親はまアない様なものでございます、母は亡なりましたが、親父は私わたくしちいの小さい時分行方知れずに成りましてから、いまだに音沙汰がございません、死んだと存じまして出た日を命日として居りますが、ひよつとして存命で帰つて来たらと 姉きょうだい 弟で信心して居ります位で」

又「はア左様かえ、お前さんまだ御亭主ごていしは持たずに」

やま「はい」

又「二十二に成つて亭主ていしゆを持たずに、此のどうも花なら半開という処その何うも露を含める処を、斯う遣やつて置くは実に惜しい

ものじゃアね、お前さん」

やま「はい」

又「お前まアねえ、一杯飲みなさいな」

やま「いゝえわたくし私は御酒は少しも戴きません」

又「其そん様な事云わんでも宜よい、私わしのじゃアに依よつて半分ぐらい飲んで呉れても宜よいじゃないか」

三十八

やま「いゝえ半分などと仰しやつては困ります、お厭なれば何卒どうぞ其そこ処へお残し遊ばして」

又「おやまさん、私は最うこれ四十に近い年をして、お前のよう  
 な若い女子おなごを想うても是は無駄と知っては居るが、真実お前のよ  
 うな柔やさしい、器量といい、其のどうも取廻しなり口の利きようと  
 いい別じやアて、心に想うて居ても私はまア今まで口に出して言  
 やせぬが何うどだえ、私は真実お前に惚れたぜ」

とおやまの手を取つてぐつと引寄せに掛りましたから堅い娘で  
 驚きまして、振払つて後あとへずうと下りさがまして、呆れて又市の顔を  
 見て居りました。

又「怖がつて逃げんでも宜えいじやないか」

やま「あらまア貴方あなた御冗談ばかり仰しやつて困りますよ」

又「困る訳はない、宜よいじやアないか、えゝ只たった一度でもお前わし私

の云う事を聴いて呉れたら、お前の為には何のど様ようにも情じよう合あいを  
尽そうと思つて居る」

やま「御冗談でございましょう、貴方の様な方が私のわたくし様な者にそ  
んな事を仰しやつても私は本当とは思いません」

又「何故なぜ、私は年を取つて冗談やおどけにお前さん此こん様な事を言  
掛ける事はない、お前さん、実は疾とうから真まに想つても云出し兼  
ていたが、酔うた紛れに云うじゃアないけれども、お前さん私は  
只ただた一度で諦めませうぜ」

やま「あなた本当に仰しやるのですか」

又「本当だつて今まで如何いかにも好よい娘じゃアと思つても色気も何  
も出やアせぬが、けれども朝夕膏藥を貼替えて呉れる其の優しい

手で額を斯う押えて呉れまする、其のどうも手当に私は惚れた、  
さア最う斯う云い出したら恥も外聞もないじやア、誰も居らぬは  
幸いじやア、只た一度で諦めるから」

やま「あら呆れたお方様で、それでは折角の貴方御親切も水の泡  
になります、伯父も彼様なお方はない、額に疵を受けるまで命懸  
で助けて下さったから、その御恩を忘れては濟まないよと伯父も  
申しますから、私も有難いお方と存じて居りまして、実に届かぬ  
ながらお世話致します心得でございますに、そんな事を仰しやつ  
て下さると実に腹が立ちます」

又「腹が立ちますと云ったつて、恩義に掛けるわけではないが、  
けれども、宜いじやアないか、私も命懸で彼処へ這入つて助け、

私を通り掛らぬ時は、悪者に押え付けられて、否いやでも応でも三人のため瑕きず瑾が付くじやアないか、それを助けて上げたから、彼処で□□□□れたと思うて素性の知れた私に一度ぐらい云う事を聴いても宜いじやアないか」

やま「貴方にはお内儀かみさんがお有んなさるではございませんか」

又「女房は有りやせん」

やま「あら惠梅様は貴方のお内儀でございます、お比丘尼様に済みませんから貴方の側へは参りません」

又「比丘だつて彼あれは女房ではない、彼れは山口の薬師堂に居た時に私わしは寺男に這入つたので」

やま「それでも夜分は一緒に御寝げしなるじやアございませんか」

又「御寝なるたつて彼奴あいつが薬師堂に居た時、私は奉公わしに這入ったが、彼奴も未だ老朽おいくちる年でもないから、肌寒いよつて、この夜着の中へ這入つて寝ろと云うので、抛よんどころなく這入つて寝たが、婆ア比丘尼じゃアから厭いやでくくならん、お前がうんと云うてくれ、ば、惠梅に別れて、私は此処こゝの家へ這入つて働き男になり、牛馬うちまを牽ひいたり、山で麩そだ朶だをこなし、田畑へ出て鋤すき鋤わ取つても随分お前の手助けしようじやアないか、然そうして置いて下さい」

やま「そんな事を仰しやつては困ります、それでは明日あしたにも直すぐにお発たち足遊ちばして下さい、私わたくしは御恩になつたお方ゆえ大事と思うから手厚くお世話をするのでございます、それを恩に掛けるなれば、私も随分貴方へ御恩報じと思つて出来ないながらも看病して居る

心得でございます、はい」

又「お前のように堅く出られては面白くない、そんな事を云わずに」

と無理遣りに手を取って引寄せます。この時は腹が立ちますから殴はりつ付けてやりたいと思うが、そこは命を助けられた恩義があるから、余り無下にしても愛想あいそうづか尽し気の毒と存じまして、おやまは何うしようかともじくして居ります。

### 三十九

又市は増長して無理に引付け、髯ひげだらけの頬片ほうぺたをおやまに擦こすり



付けようとすところる処へ、帰つて来たは惠梅に山之助でございりますが、山之助は氣の毒だから後あとへ下さがる。惠梅は腹を立て、鹿そだ朶だを持つて二三度続けて殴つたから胆きもを潰つぶして、

又「いや帰つたか」

梅「まことに呆びれてしまつて……おやまさん、さぞ腹が立ちましたろう、私も恟びりつくしました、山之助さんにも誠にお氣の毒で、お前さん何をするのだよ、おやまさんにさ」

又「誠に困つたなア、今御馳走が出たので一杯遣やつた処ところ、つい酔うてそのな、酒を飲めば若い女子おなごに冗談冗談をするは酒さけ飲のみの当り前まへだ、突然いきなり打ちやアがつて、打たんでも宜えいわ」

梅「おやまさんお腹も立ちましたろうが堪忍して下さいよ、私は

少し云う事が有りますから彼方あちらへ行つて居て下さい、余あんまりやれ

これ云つて下さると増長するのでございますから、どうぞ其方そちらへ

……又市さん今の真似はあれは何なんだえ」

又「酔うたのだよ、酔うて居るから宥ゆるせと云うに……困つたね、

いきなりいきなりぶ突然打つとは酷えらい、疵きずが出来たらどうも成らん、みともないわ」

梅「何だえ今の真似は、ようお前いくつ幾歳にお成りだよ、命を助けた

の何のと恩義に掛けて、あの娘こが彼様あんなに厭がるものを無理に引寄

せてなぐさむ了簡かえ、呆れた人だね、怖い人だね」

又「怖い事は有りやせん、若い娘にからかうは酒飲の当り前だ」

梅「当り前だつて宿屋の女中や芸者じやアない、一軒あるしの主じやア

ないか、然そうして姉きょうだい弟だいで堅くして彼あアやつて、温和おとなしくして

居る堅<sup>かたじん</sup>人だよ、伯父さんも村方で何<sup>なん</sup>とか彼<sup>かん</sup>とか云われる人で失礼ではないか、お前さんを主人の様に、姉弟二人で私の事を尼様々々と大事に云つて呉れるじゃアないか、それに恩を被<sup>き</sup>せてあんな真似をすれば、今までの事は水の泡に成るじゃアないか」

又「己が悪いから宥せ」

梅「宥せじゃアない、お前さんは何だね、あの娘<sup>こ</sup>がもし義理に引かされて、仕方なしにあいと云つたら、あの娘をなぐさんで、あの娘と訝<sup>おか</sup>しい中になると、私を見捨てる気だね」

又「いゝや見捨てやアせんじゃア、そのような心ではない」

梅「おとぼけでない、嘘ばかり吐<sup>つ</sup>いて、越後の山口でお前の処へ這込んだ助<sup>すけべい</sup>倍比丘尼と云つたらう」

又「あゝ聞いて居たな、酔うた紛れだ……打つな、血が染んで来た」

梅「私はお前さん故で斯こんな様に馴れない旅をして、峠を越したり、

夜夜よるよなか中歩いて怖い思いをするのはお前さん故だよ、お前さんも

元は榊原様の藩中で、水司又市と云う立派な侍では有りませんか、武士に二言はない、決して見捨てない、おれも今までの坊主とは違い、元の武士の了簡に成ったから見捨てないと云うから、亭主にしたけれども、お前さん何だろう、浮気をして私を見捨てる人だと思ふと心細くつて、附いて居るも何だかどうも案じられて、見捨られたら何うしようと思ふと、こんな山の中へ来てと考えると心細くなるよ」

又「見捨てやアせん」

梅「見捨てかねないじゃアないか、見捨てられて難儀するも罰ばちと思うのさ、終ついには七兵衛さんの祟たぐりでも、私の身も未始すえ終碌な事はないと思つては居りますすけれどもね」

又「愚痴をいうな、一寸ちよつと酔うた紛れに云うたのだ：大きな声を  
するなよ」

梅「お前さんも高岡の大工町で永禪和尚という一箇寺の住職の身の上で有りながら、亭主のある私に無理な事を云うから、否いやとも云えない義理詰に、お前さんと斯こういう訳に成つたのが私の因果さ、それで七兵衛さんを薪割で殺して」

又「これ馬鹿、大きな声をするな」

梅「云いたくもないけれどもさ、先刻さつき云う事を聞けば、比丘尼を打捨うちちやつてしもうても、お前がうんと云う事を聴けば、おれは此の家うちへ這入つて、寺男同様な働きをして牛馬うしうまを牽ひいて百姓にもなろうと云つたが、能よくそんな事が云われた義理だと思つて居るよ  
う」

## 四十

又「それは悪いよ、悪いが大きな声をして聞えると悪いやアな」  
梅「いったつて宜いいよ」  
又「馬鹿いうなよ」

梅「言つたつて宜うよございます」

又「宜よいたつて、此の事が世間に知れちやアお互よに」

梅「お互だつて当りまえで、馬鹿々々しいね、本当に能よくあんなことが云われたと思うのだよ、私は本当に高岡を出て、お前に連れられて飛驒の高山たけ越こえに」

又「そんな事を云うな、己おれが悪いよ」

梅「唯ただ悪いと云えば宜いゝかと思つて、お前は見捨する了簡かんになつたね」

又「あいたくく痛いたい、捻ねり上げて痛いたいわ、何なんじやア」

梅「痛いたいてえ余あまりで」

又「また殴う付けやアがる、これ己おれが悪いから宥ゆるせと云うに、おれ

が酔うたのだ、はつと云う機はずみじやア」

梅「わたしはもう厭だ、此処こゝに居るのは厭だよ、立つよ」

又「おれも立つよ、おれが悪いから宥なだせ」

と悋りん氣きでいうが、世間へ漏れては成りませんから、又市は種々いろ／＼に宥なだめて、その晩は共に臥ふせせましたことで、先まず機嫌も直り

ましたが、翌よく朝あさになり、又市は此処に長く居ては都合が悪いと

心得、正午ひる時分までは何事もなくつて居りましたが、昼飯を食つ

てしまつて急に出立と成りましたから、おやまも悦び、いやな奴

だから早く立つた方が宜よい、それでも義理だから伯父を喚よんで詰

らぬ物でも餞別しよなど致します。これを又市が脊負しよいまして暇いとま

乞いをして出立致しました。御案内の通りあれから白島村を出ま



して、青倉あおくらより横倉よこくらへ掛り、筑摩川ちくまがわの川上を越えまして月つきおかむら

岡村へ出まして、あれから城坂峠しろさかとうげへ掛ります。此方こちらを遅く

立ちましたから、月岡へ泊れば少し早いなれども丁度よ宜いのを、

長い峠を越そうと無暗むやみに峠へ掛りますると、松しょうはく柏おいしげ生茂り、

下を見ると谷川の流れも木の間こまより見え、月岡の市街まちを振返つて

見ると、最うちらくあかり灯のつく刻限。

又「あゝまだ月が出ねえで、真闇まつくらになつたのう」

梅「ちよつとくゝ又市さん、私は斯様こんなに暗い処ところではないと思つた

が、斯様に暗くなつては提灯ちようちんがなくなつては歩けないよ」

又「提灯は持つている」

梅「灯火あかりをお点つけな」

又「もう些ちつと先へ行つて」

梅「先へ行くゆたつて真暗まつくらで仕様がな、全体月岡へ泊れば宜いに、この峠を夜越して来たから仕様がな、いよ」

又「己も越したくも何ともないわ、え、汝てめえがぎやア、騒ぎ立てるから彼処あすこの家にも居おられず、急ぐ旅ではなし、彼処あすこに泊つて彼処あすこの物を喰つて居て、お齋ときに出て貰つた物が溜たまれば、後あとの旅をするにも宜よい、後の旅が樂じやア、それを詰らぬ事に嫉妬やきもちでぎやア、云うから居おられないで、拠よんどころなく立つて来たのだ」

梅「よんどころなく立つたにもしろ月岡へ泊れば宜いいのに、夜になつて峠を越すのは困るね」

又「困つて悪ければ是から別れよう」

梅「別れて何うするの」

又「汝おれが横よこ面こつを宜くも人中で打ぶつたな」

梅「打つたつてお前そんな事を何時いつまでも腹を立て居るがね、私も腹立紛れに打つたのじゃアないか、彼の娘あこが義理ぎりづくで、命を助けられた恩義が有るから、お前の云う事を聴けば見捨てかねないよ」

又「仮令たとえ見捨てるたと云つたにもせよ、何故かりそめ苟めにも亭主の横面を打つという事が有るか」

梅「打ぶつたのは悪いが、お前さんも彼様あんなな事をお云いだから、私も打つたのじゃアないか」

又「打つたで済むか、殊ことに面部この此この疵縫きずうた処ほころが綻ほころびたら何う

もならん、亭主の横面をそだ鹿朶で打つてえ事が有るか、太えふて奴じやア汝おのれ」

と拳を固めて、ぽんと惠梅比丘尼の横面よこつらを打つたから眼から火が出るよう。

梅「あゝ……痛い、何をするのだね、何を打つのだよ」

又「打つたが何うした」

梅「呆れてしまふ、腹が立つなればね、宿屋へ泊つておちつ落著いてお

云いな、何もこんな夜道の峠へかゝつて、人も居ない処へ来て打ぶ

擲ちたきするは余あんまりじやアないか、此こゝ処で別れるとお云いのはお前

見捨てる了簡かえ」

又「己は愛想あいそが尽きて厭いとになった、ふつゝ厭いとになった、坊主頭を抱えて好よい年をして嫉妬やきもちを云やアがるし、いやらしい事ばかり云うから腹はらが立つて堪たまらんわい、人中にんちゆうだから耐こらえて居た、殊ことに亭主ていしゆうの頭あたまを打ちやアがつて、さア是れで別れよう」

梅「呆おろれてしまった、私を見捨てる：あ痛い何をするのだね、何どうも怖おそろしい人じゃアないか、腹立はらだ紛まれに打うつたのは悪いと謝あやまるじゃアないか、こんな峠とがへ来て何だねえ、私を見捨てる、行ゆき処ところのない様ようにして何なにうする気だねえ」

又「何なにうも斯こうもない、一大事いちだいじの事を嫉妬やきもちまぎ紛まれにぎやアく云

つて、二人の首の落るを知らぬか、余り馬鹿あんまで愛想が尽きた」

梅「愛想が尽きたつてお前さん」

又「さつくと行けゆ」

梅「あれ危い、胸を突いて谷へでも落ちたら何うするのだね、本  
当に怖い人だ、それじゃア何だね私にお前愛想がつきて邪魔にな  
るから、お前の身の上を知つて居るから谷へ突落して殺す了簡か  
え」

又「えゝ知れた事だ」

と云いながら道中差の小長いのを引抜きましたから、お梅は驚  
きました、ばた／＼／＼逃げかゝりましたなれども、足場の  
悪い城坂峠、殊には夜道でございますから、あれ人殺しと声を立

てに掛つたが、相手は亭主、そこは情と云うものが有るから、人殺しと云つたら人でも出て来て、二人の難儀に成りはしないかと思ひ、

梅「あれ気を静めないか、全く別れるなら話合いに」

と言掛けますが、最<sup>も</sup>取<sup>とりの</sup>上<sup>ほ</sup>せて居りますから、木の根に躓<sup>つまづ</sup>き倒れる処を此方<sup>こちら</sup>は駈<sup>かけ</sup>下りながら一刀浴せ掛ければ、惠梅比丘尼の肩先深く切付けました。

梅「あゝ私を切つたな悪党、お前は私を殺して彼<sup>あ</sup>のおやまさんを又口説こうという了簡だな」

と足にしがみ付くを、

又「おゝ知れた事だ」

と云いながら、刀を逆手に持直し、肩かいらほね 胛せきの所からうんと力に任して突きながら抉り廻したから、只た一突きでぶるくと身を慄わして、其の儘息は絶えましたが、麓ふもとから人は来はせぬかと思いましたが、誰たれあつて来る様子もないから、まず谷へ死骸を突落そうと思うと、又市の裾すそに縋り付いたなりで狂い死じにを致しました故中々放す事が出来ませんから、惠梅の指を二三本切落して、非道にも谷川へごろくくくくと突落し、餓別に貰いましたあずき ひえ小豆や稗ひえは邪魔になりますから谷へ捨て、血のりを拭つて鞆たづに納め、これから支度をして、元来た道を白島村へ帰つて来ました。悪い奴は悪い奴で、おやまの家の軒下へ佇たぐずんで様子を聞くと、おやま山之助は、何かこそく話をしている様子でございます。とん／



くくく。

又「おやまさん」

山「はい誰だえ」

又「一寸開けてお呉んなさい、又市じゃア明けてお呉んなさい」  
ちよつと

やま「又来たよ、又市が何うして来たねえ」

山「はい何でございますか、昼間お立ちなすつた方ですか」

又「一寸開けて下さい、災難事が有つて来たから」

山「はいく」

と山之助が表の半戸はんどを開けますと、きよとくくしながら這入つ

て、

又「此方こちらへ恵梅比丘尼は来ませんか」

山「いゝえお出いでなさいません」

又「はてな何うも、今に此方へ来るに相違ないが、城坂峠へ掛るとね、全体月岡へ泊れば宜かったが、修行の身の上路銀も乏しいから一二里は踏越そうと思つたから、峠の中ばまで掛ると、四人ばかり追剥が outcome して、身ぐるみ脱いで置いて往いけという故、此こ方は修行者でございますから路銀は有りませぬ、お比丘尼を助けてと云うに、然そうは往かぬときらくする刀を抜いて威おどす故、私わしがお比丘に目配めくばせしたら惠梅比丘尼は林の中へ駈込んで逃げたから、最よう宜いと思ひ、種いろく々云つて透すきを見て逃げようと思ひ、只今上げます、些ちつとばかり旅銀ろぎんも有るから差上げますから、手をお放しなさいと云うと、ほつと手が放れるが否いなや、転がり落ちて死

ぬるか生いるか二つ一つと、一生懸命谷へ駈いけ下り逃げたが、比丘尼は外ほかへ行く処ゆはない、お前さんの処ところへ来るに相違ないと思つたが、未だ来ませんか」

## 四十二

やま「あれまア、余あんまり遅うお立で、途中で間違が有つてはいけませんと思いましたが、それはくお比丘様は今にお出いででしようからお上りなすつて……山之助お草鞋わらじでおいでなさるから足を洗つて」

又「いや怖い目に遭いました、あゝ心持が悪い、二三人できら／＼

ゝするのを抜きました故な、此方こつちも命がけで切抜けました故、疵きずを受けたかも知れぬ、着物に血が着いて居るようで」

山「足を洗つてお上りなさい」

又「はい、私は怖わしくて胸の動気が止まらない、どうぞ度胸定めめに酒を一杯下さい」

と是から酒を飲んで空々しい事を云つて寝ましたが、此方こちらは真ま実ことと心得伯父に話をすることと、惠梅比丘尼の行方ゆくえを尋ねますと、月

岡村の雪崩なだれほうじゆいん法寿院ほうじゆいんという寺の山清水の流れに尼の死骸が有ると

云うので、その村の人々が氣の毒な事と云うて、彼方あちらへ是を葬りあちらました事が、翌日の日暮方に分りましたので、

山「何なにともお氣の毒様で申まうそう様ようもございません」

又「いや私も今聞きましたわしが、山之助さん、まあ情ないことに成りました、私は盗人ぬすびとに胸倉を取られて居る、惠梅は取られた胸倉を振切つて先へ駈下りたなれどなア、女子おなごで足は弱し、悪い奴に取囲まれ、切られて死んだかと思えば憫然ふびんじやなア、月岡の寺へ葬りになりましたとは知らずに居りましたが、左様かえ、致し方はない、何うも情ないことで」

山「誠にお気の毒様、嘸さぞお力落しでございましょう」

又「年を取つて女房に別れるは誠に厭な心持じやア、大きに御苦労を掛けましたが何うも仕方がない、不思議の因縁じやアに依つて山之助さん、お前さん方も月岡まで寺参りに往つて下さい、私わしも比丘を葬りました其のお寺で法事でも為して貰わいたたい、よくく

因縁の悪いと見えてまア是れ情ない、出家を遂げても劍難に遭うて死ぬは、何ぞ前世の約束で有りましょう、実に胸が痛うて成らん、お酒を一杯下さらんか」

と其そん様な事を云つては酒ばかり飲んで居りますが其の夜部屋に這入つて寝ますと、水司又市はぐうぐうと空そらいびき 軒をを搔いて寝た振りをして居ります。山之助おやまも寝ました様子でございますから、そうツと起きまして、おやまの寝て居ります後うしろの処へ来まして、横にころりと寝まして、おやまの□□襟の間へ手を入れましたから。おやまは眼さまを覚し、

やま「何をなさる」

又「静かに」

やま「え、<sup>びつ</sup>悔り致しました、何をなさるので」

又「おやまさん、私<sup>わし</sup>はお前さんに面目ないが、実は命がけで年にも恥じずお前さんに惚れました、それ故に此の間酔つた紛れに彼<sup>あ</sup>様な猥<sup>いや</sup>らしい事を云かけて、お前さんが腹を立て、<sup>あいそづか</sup>愛想尽しを云うたが、何と云われても致し方はないと私は真実お前に惚れて、是からは何処へも行く処はない身の上じやアに依つて、私がお前さんの家<sup>うち</sup>の厄介者になり、まア年も往<sup>い</sup>かぬ若い姉<sup>きようだい</sup>弟<sup>だい</sup>衆の力になる心得で、何<sup>ど</sup>の様にも真実を尽すが、なれどもお互いに此の気の置けぬ様に生涯一つ処に居る事は、□□れて居ないでは居られるものではないなア、本<sup>もと</sup>が他人じやアが年を取つて居るから亭主<sup>ていし</sup>に成ろうとは云わぬが、只<sup>たつ</sup>た一度でも□触れて居れば、是から先

お前が亭主を持つとも、どう成つても其<sup>そこ</sup>処が義理じや、追出しもせまい、是程まで思詰めたから只た一度云う事を聴いて下さい」と云われ余りの事に腹が立ちますから起上つて、おやまは又市の顔を睨<sup>にら</sup>みつけ、

やま「只た今出て行つて下さい、呆れたお方だ、怖いお方だ、何ぞと云うと命を助けた疵が出来たと恩がましい事を仰しやつて猥<sup>いや</sup>らしい、此の間は御酒の機嫌と思いましたが、今の様子のは御酒も飲まずに白面<sup>しらふ</sup>の狂<sup>きちがい</sup>人、そんな事を仰しやつては実に困ります、そんなお方とは存じませんで伯父も見損じました、只<sup>た</sup>今出て行つて下さい」

又「お前、何で私<sup>わし</sup>が是程まで惚れたに愛想尽しを云つて、年を取



つて男は醜<sup>わる</sup>くも、それ程まで思うてくれるか憫<sup>ふびん</sup>然な人という情<sup>じょう</sup>がなければ成らぬが何んで其の様に憎いかえ」

## 四十三

やま「はい、あのお前さんが情知らずのお人かと存じます、惠梅様と云う女房<sup>にようぼ</sup>が災難で切殺されて、明日<sup>あした</sup>法事をなさると云う、お寺参りに往<sup>ゆ</sup>く身の上じやア有りませんか、その女房<sup>にようぼう</sup>が死んで七日も経<sup>た</sup>たぬ中<sup>うち</sup>に、私<sup>わたくし</sup>に其様な猥<sup>いや</sup>らしい事を言掛けるのは、余<sup>あんま</sup>り情のない怖<sup>おそ</sup>ろしいお方と、ふつ／＼貴方<sup>あなた</sup>には愛想<sup>あいそ</sup>が尽きました」

又「惠梅も憎くはないが、実は私<sup>わたし</sup>が殺したのじやア」

やま「え……」

又「さア、斯<sup>こ</sup>う私<sup>わし</sup>が悪事を打明けたら致し方はない、実は私が殺したのじやア、お前此の間何と云うた、惠梅さんと云うお方は貴方の女房じやアないか、彼<sup>あ</sup>のお方に義理が立ちません、私の云う事は聴かれませんかと云うから、惠梅がなければ云う事を聴こうかと思うて、殺して此方<sup>こちら</sup>へ歸つて来たのじやア、何うじやア」

やま「まアどうも怖いお方でございます」

と慄<sup>ふる</sup>えながら云うのを山之助は寝た振りをして聞いて居りましたが、うっかり口出しも出来ぬから、何うしよう、こつそり抜出し、伯父の処へ駈けて往<sup>い</sup>こうかと種<sup>いろく</sup>々心配して居りますと、又「お前これ程まで云うても云うことを聴かれぬか」

やま「聴かれませんが、怖くって、恐ろしい、お置き申すわけには  
いきません、只たった今おいでなすって下さい」

又「云う事を聴かれぬ時は仕方がない、今こそは寺男なれども、  
元私わしは武士じゃア、斯う言出して恥かを搔かされては歸られせんわ、  
さア此こゝ処ちに私の刃物がある」

やま「あれ、脇差を持っておいでなすったね」

又「さア、可愛さ余って憎さが百倍で殺す気に成るが、何うじゃ  
ア」

やま「これは面白い、はい、私が云う事を聴かない時は殺すとは  
恐ろしいお方、さア殺すならお殺しなさい」

又「これさ、何うしてお前が可愛くって殺せやあせぬ、殺すまで

お前に惚れたと云うのじゃ」

やま「何を仰しやる、死ぬ程惚れられても私は厭だ、誰が云う事を聴くものか、厭でくゝ愛想が尽きたから行つて下さいよう」

又「愛想が……本当に切る気に成りますぞ」

やま「さアお切りなさい」

又「然<sup>そ</sup>う云われても殺す気ならば、是ほど思やアせんじやアないか、えゝか、ほんに云う事を聴かぬと、私<sup>わし</sup>は思い切つて切りますぞ」

と嚇<sup>おど</sup>す了簡と見えて、道中差を四五寸ばかり抜掛けました。是を見るとおやまは驚きまして、

やま「あれえ人殺し」

と云つて駈出しました。山之助も驚き飛上り、又市の髻たぶきを把とつて、

山「姉あねさんを何うする」

と引きましたが、引かれる途端に斯う脇差が抜けました。一かた方は拔身を見たから、

やま「人殺しイ」

と駈出しますのを又市は、人殺しと云うは惠梅を殺した事を訴そ人にんすると心得ましたから、人を殺し又悪事を重ねても己おのれの罪を隠おのれそうと思う浅ましい心からおやまを遣やつては成らぬと山之助を突つ除きのけて土間へ駈かけお下り、後うしろから飛かゝつて、おやまの肩へ深く切掛きけました。おやまは前へがっぱと倒れる、山之助は姉の切られた

のを見て驚き、うろくして四辺あたりを見廻しますと、枕元に合図の  
 竹法螺たけぼらが有りますから、是を取つて切られる迄もと、ぶうーく  
 と竹法螺を吹きました。山家やまがでは何方どちらにも一本ずつ有りまして、  
 事が有れば必らず是を吹きますから、山之助が吹出すと直隣じきでぶ  
 うーと吹く、すると又向うの方でぶうーと云う、一軒吹出すと離  
 れて居ても山で吹出す、川端の家でも吹出すと、村中いえかずで家数たも沢  
 山んとは有りませんが、ぶうーくと竹法螺を吹出し、何事かとかりゆ 猫  
うど 人も有るから鉄砲かつを担ぎ、又は鎌あるい或は鋤すき鋤わなどを持って段々村  
 中の者が集まるといふ。これから水司又市を取押えようとする、  
 山之助おやま大難のお話でございます。

## 四十四

水司又市は十方でぶうくくくと吹く竹螺たけぼらの音ねを聞きま  
 して、多勢の百姓共に取捲とりまかれては一大事と思ひまして、何処どこを  
 何う潜くぐつたか、窃ひそかに川を渡つて逃げた跡へ村方の百姓衆が集つ  
 て来ましたが、何分にも刃物は利よし、斬人きりては水司又市で、お山は  
 余程の深傷ふかでございますから、もう虫の息になつて居る処へ伯父  
 が参り、

多「あゝ情ない事をした、そんな悪人とは知らずに、恩返しすぐの為  
 だから丹誠をして恩を返さんければならぬと云つて、直すぐに行ゆこう  
 と云うのを無理に留めたが、それが現在自分の連れて来た比丘ま

で殺して、其の上無理恋慕を言掛けて此の始末に及ぶと云うは悪にくい奴、お山何か思い置く事が有りはしないか」

と云うと、山之助も涙ばかり先立ち、胸が閉じて口を利く事も出来ませんが、ようや漸くに氣を取直して。

山「姉さんねえくしつか確りしてお呉んなさいよ、今お医者様を呼びに遣やりましたから、確かりしてお呉んなさいよ」

と云う。伯父もお山の傍そばへ参り耳に口を寄せて、

多「お山やアくしつかりして呉れよ」

と呼びます。その声が耳に入いったから、がくりツと心付いて、起上つて見ると、鼻の先に伯父が居り弟も居りますが、もう目も見えなくなりましたが、やっと這出して山之助の手を握り、



やま「山之助」

山「あい姉さんあね確かりしてお呉んなさいよ伯父さんも此処こゝへ来て居ますよ、村方の百姓衆も大勢来て、手分をして又市の跡を追手おつてを掛けましたから、今にお前さんの敵かたきを捕えて、簀巻すまきにして川へ投り込むか、生埋いきうめにして憂目うきめを見せて遣ります、姉さん今にお医者様が来ますから、確かりしてお呉んなさい」

やま「伯父さん」

多「あい此処に居りやすから心を慥たしかに持つてな、此の位の傷では死にやアしなえから、必ず氣を丈夫に持たねえではいけないぞ」  
 やま「あい伯父さん、永々御厄介になりました、十六年あとにお父様とつさまが屋敷を出て行方知れずになつてから、親子三人でお前様

のお世話になり、其の中うちお母様つかさまも亡くなつてからは、山之助も私もお前様に育てられ、お蔭で是れまでに大きく成りましたから、山之助に嫁を貰つて、私はお前様さんのお力になり、御恩を送る積りで居りましたが、何の因果か悪人の為に、私は伯父さんもう迎とても助かりません、これまで信心をして、何卒御無事でお父様がお帰り遊ばすようにと、無理な願掛がんかけを致しましたが、一目お目に懸らずに死にまするのは誠に残念でございます、私の無い跡では猶更身寄頼りの無い弟、何卒目を掛けて可愛がつて遣つて下さい、よ伯父さんお頼み申しますよ」

多「あほかいよ、そんな心細い事を云つて己も娘ばかりでござりやし、外ほかに身寄頼りの無い身の上、娘はあの通りのやくざ阿魔で力

に成りやアしねえから、お前めえがた方二人が実の娘より優しくして呉れたから、力に思つて居るのに、今汝われに死なれては、年を取つた己は何も楽みが無いだ、よう達者に成つて親父に逢おうと云う心で無くちやアならないぞ」

やま「はい私は何うも助かりません……山之助や、は、は、は、は、又市の額には葉広山で受けた創きずが有るし、元は彼奴あいつも榊原の家来だと云つたが、彼奴の顔は見忘れはしまいなア」

山「あい見忘れはしません」

やま「汝てまえも武士の忤だ、心に懸けて又市の顔を忘れるな」

山「あい決して忘れやしません、姉様確かりして下さいよ」

やま「若もしお父様が御無事でお帰りが有つたら、私は災難で悪人

の為に非業な死を致しました、一目お目に懸らないのが残念だと云つて、お父様に先だつ不孝のお詫をしてお呉れ」

と後<sup>あと</sup>を言い残して、かかかかかつと続けて云うのは、咽喉<sup>のど</sup>が涸<sup>かわ</sup>くから水をと云いたい、口が利けなくなつて手真似を致します。伯父が是を見て、

多「咽喉が涸くだから、水を飲ましたら宜かろう」

と手負いに水を与えてはならぬと申す事は素<sup>もと</sup>より心得て居りますが、伯父は心ある者で、もう逆<sup>とて</sup>も助からぬから、臨終<sup>いまわ</sup>の別れと水を飲ませるのが此の世の別れ、おやまはそれなり息が絶えました。これを見ると山之助はわつと其の場に泣倒れます。なれども伯父は、

多「何うも致し方が無い、幾ら泣いても姉の歸るものじゃアないから諦めるが宜い、若し貴様が煩うような事が有つては己が困る」と云い、村方のお百姓衆も色々と云つて山之助に力を付け、漸くの事で村方の寺院へ野辺の送りを致しました。

#### 四十五

扱さてお話二つに分れました、丁度此の年越中の国射水郡高岡の大工町、宗円寺といふ禅宗寺の和尚は年六十六歳になる信実なお方で、萬助という爺じいを呼びに遣やります。

和「おゝ萬助どんか、来たら此方こちへ這入りなさい」

萬「へへえ何うも誠に御無沙汰を致しました、一寸上らんければならぬと存じましたが、盆前はお忙がしいと思ひまして、それ故にはア存じながら御無沙汰を致しました、それに又婆ばあが病気で足腰が立ちませんで、私わしもまアとて迎もく助からぬと思つて居ります……なに最う取る年でござりますから致しかたは無いと思ひますが、私が先へ死んで婆あとが後へ残つて呉れなければ都合が悪いとへえ存じますが、何うも婆の方が先へ死にそうで……いゝえなに老病としやみでござりましょうから、思うように宜くはなりません、それ故に御無沙汰を、えゝ只今急にお使で急いで出ましたが、何か御用で」

和「あいまア此処こゝへ来なさい」

萬「へえ御免を蒙ります」

和「さて萬助どん、外のほか訳じやア無いが、まアお前の頼みに依つて私がわし処とこへ逃込んで来て、何う云うものか、それなりにずるくべつたりに成つて居るいのは、藤屋ふじやの娘のお繼じやて」

萬「はいくく、何うも御厄介でござりまして、誠にはア私わしが

貧乏な日傭取ひようとりで、育てる事も出来ませぬなれども、私の主人の

娘で何どの様ようにもとは思いましたが、ついはや好よい氣になつて和尚

様へ押付放おしつけばなしにして何なにともお氣の毒様、へえ誠に有難い事でご

ざりまして、若し此方こなたが無ければ致し方のないわけでござります」

和「誠に彼はあれ怜りこうな者でなア、此処へ遁にげ込んでから、私わしが手許を

離さずに側で使うて居る、私が塩梅あんばい悪いと夜も寝ずに看病をす

る、両親が無いとは云いながら年の行かぬのに、あゝ遣つて他人の世話をするのは実に感心じゃ、実にそりやア立派な者も及ばぬくらい、それで私は彼が可愛いから、小さい時分から袴を着けさせて、檀家へ往く時は必ず供に連れて行くと、彼も中々氣象が勝つて居て、男の様で、ベタクサした女の様な事が嫌いだから、今迄は男のつもりで過ぎたが、もう今年は十六歳じゃ、十六と成つては若衆頭わかしゆあたまでも何処どこか女と見え、臀しりもぼて／＼大きくなり、乳房もだん／＼大きくなつて何様な事どないをしても男とは見えないじや、すると中には口の悪い者が有つて、和尚様はまア男の積りにして彼の娘あを夜よさり抱いて寝るなど、云う者も有るで、誠に何うも困るで、それからまア何うか相当の処が有つたら縁付けたいと



思つて居ると、彼も方々で可愛がられるから、少し宛ずつの貰い物もある、処が小遣や着る物は皆私に預けて少しも無駄遣いはせんで、私の手許に些少ちつとは預りもあり、私も永く使つた事だから、給金の心得で貯のけて置いて置いた金も有るじゃ、それに又少し足して、十両二ましま十両と纏まつた金が出来たから、支度をして相当の処へ縁付けたいと思つて居るのじゃ」

萬「それははや有難い事でございます、それ程に思おほしめ召して下さりますとは、何とお礼の申し様もないでござります、はいく何うも有難い事でございます」

和「就いてなア彼奴あいつは何ういう訳だか知らぬが、この高岡に永く居る気は無いと見えてなア遠くへでも行く心ゆが頻しきりと支度をして、

草鞋わらじを造る処へ行つて、足を噛くわぬ様に何うか五足こしら拵こしらえて呉れえとか、菅すげの笠かさを買かうて来て、法ほう達たつに頼たのんで同行どうぎ二人にんと書いて呉れえとか、それから白しろの脚半きゃはんも拵こしらえ箆おい摺ずるも拵こしらえたから、何でも西国巡礼にでも出るといふ様子でなア」

萬「へえそれはく何で其そん様な馬鹿な事を致しますえ」

和「何ういふ訳か知らぬが、まア此処に居るのが厭いやなので、並なの女では旅が出来ぬから、巡礼の姿に成つて故郷の江戸へでも行いこうと云う心かと思ふが、それに就いても預かつて居るのは心配じやから、お前に此の事を話すのじや」

萬「こりやアとんだ事で、何うも此方こなた様の御恩を忘れてぷいと巡礼に成つて、一体まア何処どこへ行いく気でござりましょう」

和「何処と云つて、まア西国巡礼だろう」

萬「はいイ大黒巡礼と申しますると」

和「なに西国巡礼だ、西国巡礼と云つて西の国を巡るのじゃ」

萬「成程、へえ成程、そう云えば左様そういう事を聞きました」

和「なにそう云う事を聞きましたも無いもの、西国巡礼を知らぬ奴が有りますか」

萬「和尚様、どうぞ一寸ちよつとお繼ついでを此処こゝへお呼よなすつて下さい」

和「あい呼びましょう……繼ついでや居るか」

繼「はい……」

とは云つたが次の間で話を聞いて居りましたから、これは何でも叱られる事かと思いましたが、つかくくと出て来て和尚の

前へ両手を突きます。……見ると大おおたぶさ髻びんの若衆頭、着物は木綿物では有りますが、生れ付いての器量好よしで、芝居でする久松の出たようです。

## 四十六

繼「お呼び遊ばしましたのは……おや叔父さん宜く」

萬「宜くたってお前急にお人だから来たんだ、おいお前なにか西国巡礼を始めるといふ事だが、何うも飛んだ話だぜ、和尚様の御恩を忘れては濟まないじゃア無いか、それで和尚様は預かつてる者が居なくなると困るから、私わしを呼んだと仰しやるのだ、全体お

前、何だつて巡礼に出るのだえ、誰か其様そんな事を勧めたのかえ」  
和「まア待ちなさい、お前のように半ばから突然いきなりに云い出しても、  
繼には分りやアしない、始めから云いなさい」  
萬「私わしは気が短いもんですから、突然いきなり出任せに云いますので……  
え、お繼お前何ういう訳で巡礼に出るのだえ、十二の時から御厄  
介になつて十六まで和尚様が御丹誠なすつて、全体お前は両親が  
無いじゃアないか、そこを和尚様が御丹誠なすつて下すつて誠に  
有難いことだ、そのみならず、もう年頃に成るから永く置いて  
はいけないから、相当な処へ縁付けたいと仰しやつてる、男の積  
りにして有つたがもう十六七に成れば臀しりがぶてくして来るし、  
乳も段々とぼちやくして」

和「これ萬助どん、余計なことを云わいでも宜いわな」

萬「でも貴方の仰しやつた通りに云うので……それで段々女に見えるから嫁かたづけたいと云つて支度の金きんまでも出して下さる、それをお前が無にして行ゆかれちやア私わしが申訳が無くて困る、何だつてまた、西国とは何だえ、西国とは西の国だ、そんな遠い処へひよこく行いこうと云うのは屹度きつと連れが有るに相違ない、え、私は永い間お祖父じいさん様の時分から勤めたのだが、お前のお父とつさんが意気いくじ地なしだから此方こつちへ引込ひっこんで来なすつた、それで私は錢も何も有りやアしないが、大工町に世帯を持たしたが、引込むくらいだから何も出来やアしない、それから和尚様の御丹誠で悪党の一件あつとの後の始末を附けられないのを、皆御丹誠下すつた、それを今お前がぶ

いに行つてしまつては和尚様に濟まない、己も亦方丈様に濟まない、濟まないよ、方丈様によ」

和「まあ、そう小言を云いなさるな……お繼何も隠さいでも宜い、何ういう訳で白の脚半やおいずる笈摺やひしやく柄杓を買つたのだの、大方巡礼にでも出る積りであろうが、何の願いが有つて西国巡礼をするのじやい、巡礼と云えば乞食同様に、野にふ臥し山に寝、或はあるい地蔵堂観音堂などに寝て、そりやもう難行苦行を積まなけりやア中々三十三番の札を打つ事は出来ぬもんじや、何う云うものだえ、巡礼に出るのは」

繼「はいそ然う旦那様がこしら笈摺を拵えた事までも御存じでございますれば、お隠し申しは致しません、叔父さん……萬助さんお前さんに

も永々御厄介に成りましたけれども、私の親父を殺して逃げたのは、永禪和尚とまゝはゝ繼母お梅のふたり兩人に相違ございません、小川様のお調べでも親を殺したのは永禪和尚と分つて居り、永禪和尚は元は榊原様の家来で水司又市と申す侍と云う事も、小川様のお調べで分つて居りますが、お父さんが非業に殺され堂の縁の下から死骸が出ましたのを見てから、寝ても覚めても今迄とき一時も忘れた事はございません、実に悔しいと思ひまして、夜も枕を付けると胸が塞ふさいがり、枕紙の濡れない晩は一晩もございません、それで何うかお父さんの敵かたきを打とうと思ひましても、十一や十二ではとて逆も打つことは出来ませんが、もう十六にも成りましたし、お弟子さんのお話どに三十三番札所の観音様を巡りさえすれば、何んな無理な



願掛がんがけでも屹度きつと叶うということを聞きました、何うせ女の腕で敵を打つ事は無理でございませうが、三十三番の札を打納うちおさめたら、観音様の功力くりきで敵が打てようかと存じまして、それ故私は西国巡礼に参りたいので、実は笈摺ひしやくも柄杓ひしやくも草鞋までも造つてございませうから、誠に永々お世話様に成りましたのを、ふいと出ては恐れ入りますが、いよく参る時はお断り申そうと思つて居りましたところ、ちようど只今お話が出ましたから隠さずにお話し申します、何卒どうぞ叔父さんからお暇ひまを頂いて巡礼にお出しなすつて下さい、私は江戸に兄が一人有りまして、今では音信いんしん不通、縁が切れでは居りますが、その兄が達者で居りますれば、それが力でございませうから、兄弟二人で敵を打ちまする心得、何れ無事いずで帰つて

来ましたら、御恩返しも致しましょうから、何卒叔父さん和尚様にお暇いとまを頂いて敵かたきうち討うちにお遣りなすつて下さいまし」

萬「旦那様え、敵討え、旦那様」

和「いやはや何うもえらい事を云い居おるな、何うじやろう萬助」

萬「どうも、飛んだ事を云い出しました……敵討……年の行いかぬ身の上で、お父さんの敵を討ちたいというのは善よく々々此の子も口惜やしいと見えます、もし旦那様、私わしも何うも、それは止よすが宜よいとは云い悪にくうござりますが、何うしたら宜ようございましょう」

和「これは何うも留<sup>とめ</sup>ることは出来ぬなア、思い立ったら遣<sup>や</sup>るが宜い」

萬「遣るたつて何うも私<sup>わし</sup>は主人の娘が敵討をする<sup>と</sup>云うなら、一緒に行<sup>ゆ</sup>きてえのだが、今いう通り婆が死に掛つて居るから、それを置いて行く訳にもいきませんが、一人で行<sup>い</sup>かれましようか」

和「いや其<sup>そこ</sup>処は所謂<sup>いわゆる</sup>観音力で、何<sup>ど</sup>んな山でも何<sup>ど</sup>んな河でも越えられるのが観音力じゃ、敵を討<sup>うち</sup>きたいという<sup>ま</sup>的<sup>と</sup>が有つて信心して札を打てば、観音の功力<sup>くりき</sup>で見事敵を討<sup>うち</sup>遂<sup>す</sup>せるだろう、こりやア望<sup>のぞ</sup>みの通り立たせるが宜<sup>よ</sup>い」

萬「はいくくく」

和「じゃア斯<sup>こ</sup>うしよう、是は追々に預<sup>よ</sup>かつた小遣の貰<sup>もら</sup>い溜<sup>ため</sup>め、ま

た別に私わしが遣りたい物もあり、檀家から貰うた物も有ります、沢た山持んとつて行くのは危いから、襦袢の襟や腹帯に縫い付けてなア、旅をするには重いから、軽い金に取換えて、そうして私わしが路銀に足して二十両にして遣ろうかえ」

繼「有難う存じます」

萬「私わしも遣りてえが、銭がねえ、此処こゝにある一分二朱と二百文、これを皆遣みんなつてしまおう、さ私は是れが一生懸命に遣るのだ」

繼「有難う存じます」

是から檀家へ此の話を致しますると、孝行の徳はえらいもので、彼方あちらこちら此方の檀家から大分だいぶん饞別が集まって、都合三十両出来ました。その内二十両はぴったりと腹帯肌襦袢に縫付けて人に知れぬよう

に致し、着慣れませぬ新らしい笈摺ひきかを引掛け、雪卸ゆきおろしの菅すげの笠には同行どうぎよう二人と書き、白の脚半こうがけに甲掛がけ草鞋わらじという姿で、慣れた大工町を出立致します。其の時には土地の者も憐あわれに心得て、とうとう坂井まで送り出したと申す事でございます。これから先ます高田へ来ましたのは、水司又市は以前高田藩でございますから、若もしも隠れて居りはせぬかと、高田中を歩きましたが、少しも心当りがございませんから、此処を出立して越後路を捜したが、頓とんと手掛りが有りません。だんく尋ねて新潟へ参ると、新潟は御承知の通り人出入りの多い処でございますから、だんく諸方を歩いて聞きますと、人の噂に川口には不思議な尼がある、寺男がお経を教えて、尼が教わるということだが、大方あれは野くつつ

合きあつて逃げた者であろう、寺男は何でも坊主で、女は何歳いくつぐら  
 い、是これ々々くと云うことが、ぷいとお繼の耳に這入ったから、  
 扱さてはと直すぐに川口へ来て尋ねると、つい先さきの日ひ出立したと云うこ  
 とを聞きましたから、さては山越しをして信州路へ掛つたのでは  
 ないかと思ひまして、信州路へかゝりましたが、更に手掛りがご  
 ざいせんから、信州路へ這入つて善光寺へ参詣をいたし、善光  
 寺から松本へかゝつて、洗馬せまという宿しゆくへ出ました。洗馬から本もと  
 山まへ出、本山から新にい川がわ奈良井ならいへ出て、奈良井から藪原やぶはらへ参  
 りまするには、此の間に鳥居峠とりいとうげがございます。其の日は洗馬に  
 泊りまして、翌朝宿よくちようを立つて、お繼が柄杓を持って向う側を流し  
 て居ると、その向むこう側がわを流して行く巡礼がある。と見ると、是

も同じ扮装いでたちの若衆頭わかしゆあたま、白い脚半に甲掛草鞋笈摺を肩に掛け、  
 柄杓を持つて御詠歌ごえいかを唄つて巡礼に御報謝ごほうしやを：はてな彼の人も  
 一人で流している、私は随分今まで諸方を流して慣れてるから、  
 もう此の頃はそんなに旅も怖いと思わぬが、彼の人は未だ慣れな  
 い様子、誰か連つれでもある事か、それとも一人で西国へ参詣をする  
 のか、矢張やっぱり三十三番の札を打ちに行く人では無いかと思いまし  
 たが、道中の事で気味が悪いから、迂濶うっかりと尋ねることも出来ま  
 せん。その此方側こちらがわを流して通ると云うのは、白島山之助が姉の  
 敵を討ちたいと申して、無理に伯父いとまに暇を乞うて出立した者、山  
 之助も向うへ巡礼が来るなど思いましたけれども、知らぬ人に言  
 葉を懸けて何様な事どんが有るかも知れぬ、姿は優しいが油断ならは成ぬ

と思つて言葉を懸けません、其の晩は鳥居峠を越して宮之越みやのこしに  
 泊りましたが、丁度八里余の道程みちのりでございます。翌朝お繼は早  
 く泊りを立出たちいで、前申せんす巡礼と両側を流し、向うが此方こちらへ来れ  
 ば、此方が向側と云う廻り合せで、両側を流しながら遂々とうく福島  
 を越して、須原すはらという処に泊りましたが、宮之越から此処迄は八  
 里半五丁の道程でございます。斯様に始終両側を流して同じ宿に  
 は泊りまするが、なれども互いに怖くて言葉を掛けません。これ  
 から皆様御案内の通り福島を離れまして、彼かの名高い寢覚ねぎめの里を  
 後あとに致し、馬籠まごめに掛つて落合おちあいへまいる間が、美濃みのと信濃くにぎの  
 境かいでございます。此の日は落合泊りのことで、少し遅くは成り  
 ましたが、急ぎ足ですたくくくと馬籠の宿ではやすを出外れにかゝ



りますると、其<sup>そこ</sup>処には八重<sup>やえ</sup>に道が付いて居て、此方<sup>こつち</sup>へ往<sup>ゆ</sup>けば十<sup>じつき</sup>  
よくとうげ  
 曲 峠 ……と見ると其処<sup>よしずばり</sup>に葭<sup>よし</sup>簣<sup>ず</sup>張<sup>はり</sup>の掛<sup>かけ</sup>茶<sup>ち</sup>屋<sup>や</sup>が有るから、

繼「少々物を承わりとう存じますが、これから落合へまいります  
 には何う参りましたら宜うございますか」

と云いましたが、婆さんは耳が遠いと見えて見返りもせず、  
しき  
 頻りに土<sup>へつ</sup>竈<sup>つい</sup>の下の火を焚<sup>た</sup>いて居りますから、また、

繼「あの是から、落合へ行く<sup>ゆ</sup>には此方<sup>こつち</sup>へ参つて宜うございますか」

と云うと、奥の方に腰を掛けて居た侍は、深い三度笠をかぶり、  
 廻し合羽を着て、柄袋の掛つた大小を差して、  
めくらしま  
 盲 縞の脚半に

甲掛、草鞋という如何にも旅慣れた扮装<sup>こしらえ</sup>、

侍「是々巡礼落合へ行く<sup>ゆ</sup>なら是を左の方へ付いて行け」

繼「有難う存じます」

と是から教えられた通り左へ付いて行くと、何処まで行つてもなだれ上りの山道で、見下す下の谷間には、渦を巻いてどつどつと落す谷川の水音が凄まじく聞えます。日はとつぷりと暮れて四辺は真暗になる。とお繼は気味が悪いから誰か人が来れば宜いと思うと、後の方からばらばらくくくくく  
 「巡礼、巡礼暫く待て」

と云われたが真暗で誰だか分りません。

侍「これ巡礼」

繼「はいくくく」

典「思い掛けねえ、手前てめえ久振で逢つたなア」

繼「はい何方どなたでございます」

侍「何方もねえもんだ、己は桑名川村にいた柳田典藏だが、汝てめえの姉のお蔭で苛ひどい目に逢つて、あれまで丹誠した桑名川村に居いられないように成つたのだ、その時は家財や田地を売払つて逃げる間も無いから、漸ようやく有合せの金を持って逃げて、再び桑名川村へ歸る事も出来ぬような訳だ、その上右の手の裏へ傷を受け、その疵きずを縫つて養生するにも長く掛つたが、先刻さつき己が寢覺を通りかゝると汝が通るから、これは妙だ、何ういう訳で巡礼に成つて出るか

と思つて跡を尾けて来たんだ」

繼「はい何方でございますか、人違いでございましょう、私は左様なものではございません」

典「汝は其様なことを云つて隠してもいけねえ、先刻おれが笈摺を見たら、信州水内郡白島村白島山之助と書いて有つた」

繼「えゝ」

典「さ其の通り書いて有るから仕方がねえ」

繼「いゝえ私は左様な者ではございません、私は越中高岡の者で典「えゝ幾ら汝が隠したつても役に立たねえ、姿は巡礼だが、汝が余程金を持つてる事ア知つてる、さ己が汝の姉の為に斯う云う姿になつた代りに金を強奪つて汝を殺すのだが、金を出しや

ア命は宥<sup>ゆる</sup>して遣<sup>や</sup>ろう、おれは追剥<sup>おいはぎ</sup>をするのじやアねえけれども、この頃では盗<sup>ぬすびと</sup>人仲間へ入<sup>へい</sup>った身の上だ、斯う成つたのも実はと云うと、汝兄弟のお蔭なんだ、さア金を出せえ」

繼<sup>わたくし</sup>「私は左様な者ではございません、私は其の山之助と云う者ではございません、私は越中高岡の宗円寺という寺から参りました者で」

典「え、何と隠してもいけねえや、ぐずぐず云わんでさつさと出せ、若<sup>も</sup>し強情を張ればたゝんでしまふぞ」

繼「いゝえ私<sup>わたくし</sup>はそんな人じやア」

典「え、打斬<sup>ぶつき</sup>つてしまふぞ」

と柳田典藏が抜いたから光りに驚いて、

繼「あれえ」

と一生懸命に逃げに掛るのを後うしろから、

典「待て」

と手を延のばして菅笠の端を捉とつたが、それでも振払つて逃げよう

とする機はずみに笠の紐がぷつりと切れる。一生懸命に逃げる途端道

を踏ふみはず外はずして谷間たにあいへずうーん：可愛そうにお繼は人違いをされ

て谷へ落ちます。すると、是を知らぬ山之助は、是も落合まで

行く積ゆりで山道へ掛つて来ますると、後あとからぱた／＼／＼／

と追掛けて来たのは、勇治ゆうじという胡麻の灰。

勇「おい／＼巡礼々々」

山「あい」

勇「己てめえは汝おぬと須原すゑで合あ宿やどになり、宮之越みやのこでも合宿あやどに成つた者だ」  
 山「左様でがすか」

勇「左様でがすかじゃアねえ、これ道中みちなをするには男の姿おとこのすがたでなけりやア成らぬと云うので、そういう姿すがたに成つてゐるが、汝おぬは女おんなだな」  
 山「いゝえ私は男おとこでげす」

勇「隠かくしたつてもいけねえや、修行者しゆぎやうでも商人あきんどでも宜よろく巡礼めぐりの姿すがたに成つて来ることが有るが、汝おぬは手入ていれらずの処きむすめ女おんなに違ちがえねえ、口くちの利よき様ようから外輪そとわに歩あく処ところは、何なにう見ても男おとこのようだが、無理むりに男おとこの姿すがたに成つて居ても乳ちちが大きいから仕方しほうがねえ」

山「何を仰おんがしやるのだえ、私はそんな者ものではございませぬ、全く男おとこでござります」

勇「いけねえ、何でも女に違えねえ、今夜己が落合へ連れて行って一緒に□□□□ようと思つて来たんだ」

山「冗談を云つちやアいけません」

勇「冗談じゃアねえ、汝を宿屋へ連れて行ってから、きやアぱア云われちやア面倒くさいから、こゝで己の云う事を聴いたら、得心の上で宿屋へ泊つて可愛がつて遣るのだ、ぐずツかすると宿場へ遣つて永く苦しませるぞ、さア此処はもう誰も通りやアしねえ、その横へ這入ると観音堂が有つて堂の縁が広いから」

山「冗談しちやアいけません、私は其そん様な者じゃアございけません」

勇「そんな事を云つちやアいけないよ、お前が宿に泊つて湯に入る時に大騒ぎをするから、肌襦袢に縫付けて金を持つてる事も



ちやんと承知だ」

山「何をなさる」

勇「何をと云つて何うせ此方は盗みこつちが商売だから」

山「無闇な事をなさるな」

勇「無闇が何うする、斯うだぞ」

山「何うもいけません、何をなさるのだ」

と山之助が勇治の頬ほ、ぺた片をぽんと打ちました。処が山之助は白島村に居る時分に、牛を牽ひいたり籠そだ朶かつを担いだりして中々力のある者、その力のある手で横つ面を打たれたから、こりやア女でも中々力がある、滅法に力のある女だと思つて、

勇「何をする、汝がきやアぱア云やアよんどこ抛なろなく叩き斬るぞ」

本当に斬る気では有りませんが、嚇おどして抱いて寝る積りで、胡麻の灰の勇治がすらり抜くと山之助も脊負しよつてゐる苞つとから脇差を出そうかと思つたが、いや〜怪我でもしてはならぬ大事の身体と考え直して、

山「人ひとごろし殺い……泥坊……」

と横道へばら〜〜〜。

#### 四十九

勇「この女あまつちよめ」

と追掛おいかけられて逃途にげどがないが、山之助年は十七で身が軽いから、

谷間たにあいでも何でも足掛りのある処へ無茶苦茶に逃げ、  
 蔦つた 蘿かずらな

どに手を掛けて、ちよい／＼／＼と逃げる。殊に山坂を歩き慣れて居るから、木の根方に足を掛けて歩く事は上手です。なれども始めての処で様子を知りませぬから、一生懸命死者狂いになつて逃げると、細手ほそくての勇治は、

勇「なに此の女つちよ」

とは云つても谷間を歩くのは下手で追掛ける事は出来ません。

何うした事か山之助が足掛りを踏外したから、ずずうと蔦が切れたと見えて、両手に攪つかまつたなり谷底へ落ると、下には草が生えた谷地やちに成つて居り、前はどつどと渦を巻いて細谷川が流れます、山「はアー何うも怖い事、伯父さんがそう云つた汝てめえ一人たとで縦え敵

討をする心でも大胆だ、とても西国巡礼は出来ぬ、道中は、怖いもので、昔これ／＼のことが有つたと云つて意見をなすつた、それでもと云つて覚悟はしたが怖いなア、こりやアいけない、柄杓を落してしまった…だが彼奴はまア何だろう、私を女と思つて居やアがつて、無闇と人の頬片へ髭面を摩り附けやアがつて…：…おや笠を落してしまつた、仕様が無いなア…：…おや笠は此処に落ちてる、先刻落ちる機みに柄杓を…：…おや柄杓も此処におや／＼巡礼も此処に落ちてる…：…」

と谷地を渡つて向うへ行きますると、草の上へ仰向反になつて居る巡礼が有るから、

山「おう／＼／＼／＼可愛そうに、此の人は洗馬で向側を流

して居て、宮之越で合あいやど宿とどになつた巡礼だ、其の時は怖いと思つたから言葉も掛けなかつたが、何うも飛んだ災難じゃアないか、此の人は何うしたんだらう、目をまわして居る、おい巡礼さん何処の巡礼さんか確しつかりしなさいよ、此処は谷の中でございますよ、可愛そうに何うしたんだらう、此の笠も柄杓も此の人のだ、己のじゃアない、だがまあ何うしたんだらう、おゝ薬が有つたツけ」

と貯えの薬を出して、飲ませようと思いましたが、確かり齒を喰くしばつて居りますから、自分に嚙かみ碎くだいて、漸ようくに齒の間から薬を入れ、谷川の流れの水を掬すくつて来て、口移しにして飲ませると薬が通つた様子、親切に山之助が摩さすつて遣りますと、

繼「有難う〜」

山「お前さん確かになさいよ」

繼「はい」

山「大丈夫です、私は胡散うさんな者じゃアございませんよ、私はお前

さんと後あとさき先に成つて洗馬から流して来た巡礼でございますよ」

繼「はい有難う怖い事でございました」

山「成程お前さんは何うなすつたの」

繼「何うしたんでございますか人違いでございましょうが、私が

山路に掛つて来ると、後あとから大きな侍が追掛けて来まして、左様そう

して私にねえ、てめえ汝は白島の山之助とか何とか云つて、誠に久しく

逢わなかつたが汝の姉のおやまゆえに斯んな浪人に成つたから、

汝の持つてる金を取つて意趣返しをすると云うから、私は左様さような

者で無いと云いますと、突然脇差を抜いたから、一生懸命に逃げようと思つて足を踏外して、此処へ落ちましてございます」

山「それはお気の毒様、それじゃア私と間違えられたのだ、白島の山之助と云いましたか」

繼「はい」

山「その男は何と云う奴で」

繼「あの柳田典藏とか云いました」

山「それは大変、何うもお気の毒様、お前さんを私と間違えたのでございます」

繼「左様そうでございますか、私はそんな者で無いと言いわけを云つても聞きませんで」

山「そりやア全く私の間違いです、お：前さん女でございますねえ」

繼「いゝえ」

山「それでも今私が抱いて起した時に乳が大きくて、口の利き様も女に違いないと思います」

繼「左様でございますか、私は本当は女でございます」

山「左様でしょう、それじゃア私はお前さんと間違えられたのだ、

私が山道へ掛ると胡麻の灰が来ててめえ汝は女だろうと云うから、いえ

私は女ではないと云うと、そんな事を云つても乳を見たから女に

違いない、金を持つてるから出せなんと云つて私のほつべた頬片をな嘗めや

アがったから、其奴のそいつ横面を打つたよこつら処が、脇差を抜いたから、私



は一生懸命に泥坊くくと云つて逃げる途端に、足を踏外して此処へ落ちたんだ」  
おっこ

繼「おやまあお気の毒様」

山「私の方がお気の毒様だ」

繼「お前さん何処へお出でなさるの」  
どこ

山「私は西国巡礼に」

繼「おや私も西国へ。よく似て居りますねえ」

山「えゝよく似て居りますねえ」

繼「お前さん何方へお泊り」  
どちら

山「山道へ掛つて様子は知らぬが、落合まで日の暮々々、はと思つて急いで参りました、お前さんは何方へ」

繼 「私も落合と思つて、何うもよく似て居ますねえ」

山 「え、何うもよく似て居ますなア」

繼 「あなた私を連れて行つて下さいませんか」

山 「え、一緒に参りましょう」

繼 「それじゃア何卒どうぞ」

山 「一生懸命つかまに攫つてお出でなさい」

繼 「何卒お連れなすつて下さい」

と互に 信心しんじんまいり 参まゐりの事でございますから、お互いに力に思い思われまして、

山 「何か落すといけませんよ」

繼 「はい柄杓も此処に有ります」

と笠を片手に提さげて、山之助の案内で、漸く往来まで這はいのぼり登りまして、これから落合しゆくの宿に泊ったのが山之助とお繼の始めての合宿で、互いに同行二人力に思い合つて、これから二人で西国三十三番の札を打ちますと云う、巡礼敵討の始りでございます。

## 五十

山之助お繼は其の晩遅く落合に泊り、翌朝よくちようになりまして落合を出立致して、大井おおいといふ処へ出ました。これから大久手細久手へ掛り、御嶽おんたけ伏水ふしみといふ処を通りまして、太田おおたの渡しを渡つて、太田の宿の加納屋かのうやという木賃宿に泊ります。ちようど落合からは

れまでは十二里余の道でございませうが、只今とは違つて開けぬ往  
来、その頃馬方が唄にも唄いましたのは木曾の棧橋太田の渡し、  
碓氷峠うすいとうげが無けりやア宜よいと申す唄で、馬士まごなどが綱を牽ひきなが  
ら大声で唄いましたものでございませう。さて時候は未だ秋の末で  
ございませうが、此の年の寒さも早く、殊に山国の習いで、ちらり  
くと雪が降つて参ります。山之助お繼も致し方がございませ  
んから無理にも出立致そうと思ひますが、だんくと雪の上  
に雪が積りまして、山又山の九十九折つづらおりの道が絶えますから、心な  
らずも先此処まずこゝに逗留致さんければ相成りません、なれども本もと来  
修行の身の上でございませうから、雪も恐れずに立とうと思つと、  
山之助が慣れぬ旅の心配を致しました故せいか、初めて病と云うもの

を覚えて、どうと枕に就つきます。加納屋の亭主も種いろく々心配致  
 しますが、連つれの者が居るから手当は出来ようと医者連れて来  
 て薬を貰い、種々と手当を致しますが、何分にも山之助の病気は  
 容易に全快致しません。此の中の介抱うちは皆お繼が致して遣ります  
 が、女で親の敵を討とうと云う位まじな真まじ心な娘でございますから、  
 赤の他人の山之助をば親身の兄いたを労いたわるように、寝る目も寝ずに  
 親切に介抱を致します。山之助は心配をいたして種々と申します  
 ると、

繼「なにたとえ仮令半年一年の長なが煩わずらいをなすつても私が御詠歌を唄  
 って報謝を受けて来れば、お前さん一人位に不自由はさせません、  
 それに私も少しは儲たくわえが有るから、まアく決して心配をなさる

な」

と云つて山之助に力を附けます。また時々塩を貰つて温石おんじやくを当てる、それは実に親切なもので。すると俗に申す通り一に看病二に薬で、お繼の親切が届いて其の年の暮には追々と全快致し、床の上に坐つて味噌汁位が食えるように成りましたから、お繼は悉く悦こゝろんで、或日のこと、

繼「山之助さん、今日は余程よつほどお加減が宜うございますねえ」

山「お繼さん誠に有難う、私はまア斯様こんなにお前さんの介抱を受けようとは思いませんかつたが、不思議な縁で連に成つたのも矢張やっぱ箆摺しよを脊負しよつたお蔭、全く観音様の御利益ごりやくだと思ひます、実に此の御恩は死んでも忘れやア致しません」

繼「何う致しまして、斯んな事はお互でございませぬ、お前さんも西国巡礼私も西国を巡るので、一人では何だか心細うございませぬが、一緒に行けば何処を流しても同行二人でお互いに力に成りますから」

山「誠に有難いことで」

繼「山之助さん、誠に寒くていけませんし、斯う遣つて別々に長く泊つて居りますと、蒲団の代ばかりでも高く付きますから、私の考えでは蒲団を返してしまつて、下へはお前さんと私の着物などを敷いて左様して上に一枚蒲団を掛けて、一緒に寝る方が宜いかと思いますか、お前さん厭でございませぬか」

山「え、寝ても宜うございませぬけれども、お前さんが男なら宜い

が、女だからねえ、私は何うも一緒に寝るのは悪うございますか  
ら」

繼「何も宜いじやア有りませんか、お前さんの長い煩いの中うちには  
私が足を摩さすつて居ながら、つい転ころりとお前さんの床の中へ寝た事  
もございますよ」

山「左様さようですかねえ」

繼「本当に費ついででは有りませんか、是からも未だ長い旅をするのに、  
銘めい々蒲団の代を払うのは馬鹿々々しゆうございますよ、却かえつて  
一人寝るより二人の方が温あつたいかも知れませんか」

山「じやアお繼さん脊中合せに寝ましよう、けれどもねえ女と男  
と一つ寝をするのは何だか私は極りが悪いし、観音様にも濟みま



せんから、茲こゝに洗つた草鞋の紐が有りますから、是を仕切に入れて置いて、是から其方そっちがお前さん、是から此方こっちは私としてお互に此の仕切の外へ手でも足でも出したら、それだけの地代じだいを取る事に致しましょう」

繼「それじゃア脊中合せあつたが温かいから」

と云うので到頭脊中せなかあわせ合に成つて寝ました処が木曾殿と脊中合せの寒さかな哉で、何処となくすう／＼風が這入つて寒うございますから、枕の間へ脚半も入れましょう、股引も入れましょうと云つて種々な物を肩に当て、毎晩々々二人で寝る事に成りましたが、斯ういう事は決して遊ばさぬが宜よい。どんなに堅いお方でも其処そこは男女なんによの情じょうあい合で、毛もくじやらの男でも、寝惚ねぼければ滑すべつこ

い手足などが肌に触れゝば氣の変るもの、なれども山之助お繼は互に大事を祈る者、一方は親の敵一方は姉の敵を打とうと云う二人で、固もとより堅い氣象でございますから、決して怪しい事などはございせんが、だんく親しくなつて来ると。

繼「山之助さん」

山「あい」

繼「私はまア不思議な御縁で每晚斯う遣つてまア、お前さんと一  
つ夜具の中で寝ると云うものは実におかしな縁でございますねえ」  
山「えゝ余程よつほどおかしな縁ですねえ」

繼「私はお前さんに少しお願いが有りますがお前さん叶えて下さいますか」

山「何の事でございますか、私は病氣の時はお前さんが寝る目も寝ずに心配して看病して下すつた、其の御恩は決して忘れませんから、私の出来る丈だけの事は仕しますがねえ、何ですえ」

繼「私は只斯う遣つて、お前さんと共に流して巡礼をして西国を巡りますので、三十三番の札を打つ迄はお前さんも御信心でございますから、決して間違つた心は出ますまいし、私も大丈夫な方とは思いますが、気が置かれてねえ、何か打明けてお話をする事も出来ませんけれども、私も身寄兄弟は無し、江戸に兄が一人有りますが、これも絶えておとずれ音信おとずれが無いから、今では死んだか生きたか分かりません、若もし兄が亡ない後のちは私は全く一粒種で」

山「何うもよく似た事が有りますねえ、私も一人の姉が有りました

たが、姉が亡くなつてからは私も一粒種で、親は有ると云つても、十六七年も音信が無いから、死んだか生きたか分らぬから、真に私も一人同様の身の上だがねえ」

## 五十一

繼「まア何うも、然<sup>そ</sup>うでございますか、それじゃア三十三番の札を打つてしまつて、お互いに大願成就の暁には生涯私の様な者でも力に成つて下さいませんか、本当にお前さんの志の優しいのは見抜きましたから」

山「私もお前さんに力に成つて貰いたいと思つてねえ、私は彼<sup>あ</sup>ん様

な煩いなどが有つて、お前さんが無かつたら大変な所を、信実しんじつに介抱して下すつたので、お前さんの信実は見抜いたから、その信実には本当に感心して惚ほれる……と云う訳じやア無いが、真にお前さんは好いい人と思つて」

繼「えゝ」

山「だから私は真に力に思つて居ますねえ」

繼「そうして斯う男と女と二人で一緒に寝ますと、肌を触ふれると云つて仮令訝たとえわかしな事は無くつても、訝おんなしい事が有ると同じでござい  
ますとねえ」

山「なにそんな事は有りません、おかしい事が無くて同じと云うわけは有りやアしません……だからいけない、互に観音様へ参る

身の上だから、先に私が別に寝ようと云つたんだ」

繼「そんな無理なことを云つちやア済みませんが、お前さんも身が定まれば、何時までも一人では居られないから、お内儀さんを持ちましよう」

山「えゝそりやア是非持ちます」

繼「不思議な御縁で斯う遣つて一緒に成りましたが、三十三番の札を打つて、お互に大願成就してから、私の様な者でもお内儀さん……にはお厭でございましょうけれども、可愛そうな奴だから力になつて遣ると仰しやつて置いて下されば、誠に私は有難いと思ひますが」

山「そう成つて下されば、私の方も有難い、本当に左様成つて呉

れゝば有難いねえ」

繼「本当にお前さんが左様そう仰しやれば眞実生涯見棄てぬ、末は夫婦という観音様に誓いを立つて：貴方も私も外ほかに身寄は有りませんが、改めて仲なこうど人を頼んで：斯うという事に成りますれば、私は江戸の葛西に伯父さんが有るから、その伯父さんが達者で居れば、その人がちやんと身を堅める時の力になろうと思ひます、勿論それを舅しゅうとにして始終一緒にいる訳でも有りませんが……左様なれば私も一大事を打明けて云いますから、お前さんも身の上を隠さずに互に話をいたしたいと思ひますが」

山「左様そう観音様に誓いを立つて、私の様な者を亭主に持つて呉れるなら、私は本当にお前に打明けて云う事が有るけれども、若し

途中でひよつと別れる様な事に成つて、喋られると大変だから、  
うっかりと打明けて云われないねえ」

繼「私も打明けて云いたいが大事の事だから……若し男の変り  
易い心で気が變つた後で、他へ此の話をあとされると望みを遂げる事  
が出来ぬと思つて、隠して居りますが、本当に私は大事のある身  
の上」

山「私も一大事が有るのだよ」

繼「左様そう……よく似て居ますねえ」

山「本当によく似てるねえ」

繼「まアお前さん云つて御覽」

山「まアお前から云いなさい」



繼「まアお前さんからお云いなさいな、打明けて云やア私を見棄てないという証拠になるから」

山「でも一大事を云つてしまつてから、お前がそれじゃア御免を蒙ると云つて逃げられると仕様が無いからねえ」

繼「私は女の口から斯ういう事を云い出すくらいだから、そんな事は有りませんよ、本当にお前さんを力に思えばこそ、死身しにみに成つて、亭主と思つて、お前さんの看病をしました」

山「誠に有難う、そう云う訳なら私から云いませうがねえ…実はねえ…まアお前から云つて御覧」

繼「まアお前さんから仰しやいな」

山「うっかり云われません…全体其のお前は何だえ」

繼「私は元は江戸の生れで、越中高岡へ引込んで、繼母に育てられた身の上でございます：誰か合宿が有りやアしませんか」  
 山「あの怖い顔の六部が居ましたが、彼奴が立つて行つて誰も居ないよ」

繼「実は山之助さん、私は敵討でございますよ」

山「え、敵討だと、妙な事が有るものだねえ、お繼さん私も実は敵討で出た者だよ」

繼「あらまアよく似て居ますねえ」

山「本当によく似てるが、何ういう敵を討つのだえ」

繼「私はねお父さんの敵を討ちに出ました、その訳と云うのは越中高岡の大工町に居ます時、繼母のお梅と云うのが、前の宗慈寺

という真言寺の和尚と間男をして、然うしてお父さんを薪割で殺して逃げました、其の時私は十二だったが、何卒敵を討ちたいと心に掛けて居る中に、もう十六にも成ったから、止めるのを無理に暇いとまごい乞こいをして出て来ました、三十三番の札を打納めさえすれば、大願成就すると云う事は予て聞いて居ますし、観音様の利益りやくで無理な事も叶うと云う事でございますから、目差す敵は討てようと思つて居ますけれども、貴方は男だから、夫婦に成つて下さつたら助太刀もして下さるだろうと、力に思つて居りますので」山「それは妙だ、私も敵討をしたいと思つてねえ、私は姉あねさんの敵だが、それじゃアお前の敵は越中高岡の坊さんかえ」

繼「いゝえ坊さんに成つたのだが、その前は榊原様の家来でござ

います」

山「うん榊原の家来……私の親父も榊原藩で可なりに高も取る身の上になつたのだが、何う云う訳か私と姉を置いて行方知れずに成りましたから、実は姉と私とかみほとけ神しん仏ぶつに信心をして、行方を捜したのだが、今に死んだか生きたか生死しやうしの程も分らずに居るが、私の姉を殺した奴も元は榊原藩で水司又市と云う奴……その名の分つたのは姉を口説いた時に、惠梅という比丘尼が嫉妬やきもちをやいて身の上を云う時に、次の間で聞いて知つてるので」

繼「まア何うも希代きたいなこと、私のねえお父さんを殺して逃げた奴も永禪和尚と申しますので、真言寺の住持になつたが、元は水司又市と云う者で、やっぱり私の尋ねる敵だわ」

山「そりやア妙な事が有るもんだねえ、よく似てるねえ」

繼「似て居ますねえ」

五十二

山「何うも不思議な事も有るものだ、それじゃア何だね、お前のお母さんは坊さんかえ」

繼「いゝえ、私の繼母は元は根津の女郎じょうろをしたお梅という者で、女郎の時の名は何と云ったか知りませんが、又市と逃げるには姿を変えて比丘尼に成ったかも知れません」

山「これは何うも不思議だ、あの十曲峠で私と間違えてお前を追お

掛つかけた、あの柳田典藏という奴が私の家うちの姉あねさんに恋慕を仕掛けた所が、姉さんは堅い氣象で中々云う事を肯きかぬから、到頭葉広山へ連れて行つて、手込めにしようと言ふ所へ、通り掛つたのが今の水司又市と言ふ者で、これが親切に姉さんを助けて家へ送つて呉れたから、兎も角も恩人の事だからと云つて家に留めて置く中うちに、水司又市が又姉さんに恋慕をしかけるから、姉さんは厭いやがって早く何卒どうぞして突き出そうと思つたが、中々出て行かない、その中に宜い塩梅あんばいに家を出立したと思うと、お前さんの継母か知らないが、惠梅比丘尼さんちゆうを山中で殺して家へ歸つて来て、又姉さんに厭いやな事を云い掛けたから、一生懸命に逃げようとする、長いのを引抜いて姉さんを切つた、それで私は竹たけ螺ぼらを吹いて村方の

人を集め、村の者が大勢出たけれども、到頭又市に逃げられ、姉さんの臨終に云った事も有るから、始終心に掛けて、ようや漸く巡礼の姿に成つて旅立をした所が、私の尋ねる敵をお前も尋ね、お互に合宿になつて私が看病をして貰うと云うのは、よっぽど余程不思議なことで、これは互にのが遁れぬ縁だ」

繼「あゝ嬉しいこと、何卒私の助太刀をして下さいよ」

山「助太刀どころじゃアない、私が敵を討つのであるから」

繼「いゝえ私が親の敵を討つのであるから、お前さん一人で討つちやアいけません、私の助太刀をしてしまつてから姉さんの敵をお討ちなさい」

山「そんな事が出来るものか、何うせ私も討つのであるから夫婦で一

緒に斬りさえすれば宜よい」

繼「本当にまア嬉しい事」

山「私も斯こんな嬉しい事アない、これも観音様のお引合せだろう  
か」

繼「本当に観音様のお引合せに違ちがいない……南無大慈大悲觀世音  
菩薩」

と悦びまして、

山「もう斯う打明けた上は、仮たとえ令見棄てゝも遁のがれぬ不思議な縁」

とこれから山之助は氣が勇んで、思おもつたより早く病氣が全快致  
しましたからまだ雪も解とけぬ中うちを、到頭出立致し、おい／＼旅を  
重ねまして、翌年二月の月つき末すえに紀州へ参りました。紀州へ参り



ましたが、一向何も存じませんから、人に教わつて西国巡りの帳面を見ると、三月十七日から打初めるのが本当だと云う事で、少々日数は掛りまするが、ひかず仮令月日たとえが立とうが敵を尋ねる身の上でございませうから、又市の隠れて居そうな処へ参つては此処こゝらに潜んで居ないかと敵の行方を探しながら、三十三番の札所を巡ります。先まず一番始まりが紀州の那智、次に二番が同国紀三井寺、三番が同じく粉川こながわ寺、四番が和泉の槇まきの尾お寺、五番が河内の藤井寺、六番が大和の壺坂、七番が岡寺、八番が長谷寺、九番が奈良の南みな円堂えんどう、十番が山城宇治の三室みむろ、十一番が上かみの醍醐寺、十二番が近江おうみの岩間寺いわまでら、十三番が石山寺、十四番が天津の三井寺と段々打巡りうちめぐまして、三十三番美濃の谷たにくみ汲まで打納めます。其

の年も暮れ翌年になると、敵を捜しながら、段々と東海道筋を下  
つて参り、旅をすること丁度足掛三年目の二月の五日に江戸へ着  
致しましたが、是と云つて外ほかに頼る処もございませんから、先葛まず  
西の小岩井村百姓文吉の処に兄が居りはしまいかと思つて、村の  
入口で聞きますると、それはあの榎えのきのある処から曲つて行くと、  
前に大きな榛はんの木が有るからと教えられて、其の通り参つて見る  
と、百姓家は土間が広くしてある、その日当りの好よい処に婆ばあさま様  
が何かして居りますから、

繼「御免なさいまし〜」

男「はい何だえ」

繼「あのお百姓の文吉さんのお宅は此方こちらでございますか」

男「あい文吉さんは此方だが、何だえ」

繼「あのお婆さんはお達者でございますか、若しお婆さんは亡くなつて、伯母さんでございますか」

男「婆アさま〜巡礼どんが二人来て、婆アさまに逢いたいと云つて立つてるだ」

婆「はい何方でございます、巡礼どんかえ、修行者が錢を貰いに來たら錢を上げるが宜い、知つてる人が尋ねて來たかえ」

繼「御免なさいまし、貴方が此方のお婆さんでございますか」

婆「はい私が此処の婆アでございますよ、あんたア誰だかねえ」

繼「あなたお忘れでございますか、私は湯島六丁目藤屋七兵衛の娘繼と申す者でございます」

婆「あれや何うも魂消たまげたとも、何うも巨でかく成つたアなア、まア宜く尋ねて来たアなア、巡礼に成つて来ただかえ」

繼「はいお婆さんに逢いたいと思つて遠とお隔／＼の処を参りました」

婆「まア宜く尋ねて来たよ、是やア誰か井戸へ行つて水を汲んで来て……足い洗つて上りなよ……おうく草鞋穿ばきで……汝話われしい聞いた事ア無かつきアが、これア私わしの孫だよ、それ江戸へ縁付けて出来でかした娘だ……さア足い洗つて上るが宜い」

と云われたから巡礼二人は安心して上へ上り、

繼「御機嫌宜う」

と挨拶を致しますると、

婆「お前は全く藤屋七兵衛の娘お繼かえ」

繼「はい全くお繼でございます、兄は縁切えんきりで此方こちらへ預けられた事は承知して居りますが、只今でも達者で居りますか」  
 婆「はあえ、彼は親父あれの心得じょうろ違いで女郎じょうろを呼ばったで、違つた中だもんだから、虐めいじられるのが可愛いそうでならなえから、跡目相続の惣領わしの正太郎ほうだアけれど、私わしの方ほうへ引取り、音信いんしん不通ひつこになつて、そうしてまア家うちい焼けてから跡は打潰ぶつつぶれて麻布ひつこへ引込んだきり行ゆき通かよいしない、後あとで聞けば遠い国へ引込んだと云うことおれで、七兵衛は憎いから心にも掛けなえけれども、己おれア為には真実の孫のあの娘が繼母の手にかゝつて居るかと心配して、汝われが事は忘れた日は無いだ：な、え十八だといえ、己おらアはア七十の坂を越して斯う遣つて居るだけでも、まア用の無いやくざ婆ばあだから早く

死にたい、厄介のないように眠りたいと思つてるだが、斯うやつてまア孫が尋ねて来て顔が見られると思えば、生きて居て有難かつきア……父は達者かえ」  
ちゃん

## 五十三

繼「はいそれに就いてはお婆さん種々いろく訳が有つて来ましたが、  
どうか何卒早く兄さんに逢いたいものでございます」

婆「おゝ正太郎かえ、あの正太郎には瘦るほどやせ苦勞をしただ、その訳と云えば、あの野郎を連れて来て堅氣の商かたぎ人あきゆうどへ奉公に遣り、元の様な大いでか家を拵うちえさせたいと思つて奉公に遣ると、何処

へ遣つても直すぐに駈かん出して惰なまけて仕様がない、そうしてる中うちに己おら  
 あ家でこれ些ちつとべい土蔵という程でもないが、物を入れる物置蔵  
 ア建てようと云つて職人が這はえ入つてると、その職人と馴なじみ染になつ  
 て職人に成りたいと云うから、それじゃア成んなさいと云うので、  
 京橋の因幡いなばちよう町の左官の長ちようはち八と云う家へ奉公に遣つただ、左  
 官でも棟梁になりやア立派なもんだと云うから、奉公に遣つた所  
 が、職人の事だから道楽ぶちやアがつて、然そうして横根を踏出し  
 やアがつて、婆ぼアさま小遣を貸せと云うから、小遣は無いと云うと、  
 それじゃア此ぬのこの布子を貸せと云つてはア何でも持出して遣い果し  
 た後あとで、何うにも斯うにも仕方が無いが、まア真実まことの甥おいだからと  
 云つて文吉も可愛がつて居たゞが、嫁めえの前も有るから一寸小言ちよつと

を云うと、それなり飛出しやアがつて、丁度三年越し影も形も見せないから、本当に仕方が無いやくざな野郎になつてしまつたが、何処へ行きやアがつたか、能く女郎を買つて銭が欲しい所から泥坊に成る者も有るからのう婆様、と云われる度に胸が痛くて寧そ放ん出さないば宜かつたと思つてなア、若しや繩に掛つて引かれやアしないかと心配して忘れる事はないだ：何ういう訳だい、巡礼に成つて此処え来たのは」

繼「はい実はこれくくくでございまする」

と涙ながらに、三年前の越中の高岡から旅立を致しましてと細かに話をした時は、婆さんも大きに驚いて、親の敵を討とうと云う事なら、手前ばかりではいけない、今に文吉が帰つて来れば力



に成つて、仮令相手は何んな侍でも文吉が助太刀をして討たして遣るから、決して心配せず、心丈夫に思つて居るが宜いが、此の連れの方は何ういう人だと問われて、是もこれくと身上を打明けると、婆は一通りならぬ喜び、文吉も共に力に成りまして、田舎は親切でございますから、山之助までも大事に致して呉れます。山之助の身の上を聞いて伯父文吉が得心の上、改めて夫婦の盃をさせ内々の婚姻を致させましたから、猶更睦じく兩人は毎日葛西の小岩井村を出て、浅草の観音へ参詣を致して、是から江戸市中を流して歩るきます。すると二月から二三四と四月の廿七日迄日々に心に掛けて敵の様子を尋ねて居りましたが、頓と手掛りがございませぬ。少し此の日は空合が悪くてばらくくと降

出しましたから、毎いっもより早く帰つて脚半を取つて、山之助お繼が次の間に足を投出して居ります。すると丁度夕刻ぜん前此の家へ這入つて来ましたのは村方のお百姓と見えて、

百「はい御免なさい」

婆「誰だい」

百「おばあ婆さまか、家のは何処へ」

婆「今日は細田まで行くつてえなえ、嫁も今湯う貰いに行つたから留守うして居ますわ、まアお掛けなさい、一服お吸いなさい」  
百「はア細田へ行つたゞかえ、それじゃアちよつくら帰らないなア、婆さま、まア何時も達者で宜えいのう」

婆「達者だつてこれ何時までも生きてると厄やっけえ介だと思ふけれど

も、何うも寿命だから仕様が無<sup>ね</sup>えだ、早く死にたいと云ったら死にたいと云うのは愚痴だつて光<sup>こう</sup>恩<sup>おん</sup>寺<sup>じ</sup>の和尚様に小言を云われただ

百「長<sup>なが</sup>生<sup>いき</sup>すれア宜<sup>よ</sup>かんばいじやアないか」

婆「お前も何時も達者だねえ」

百「私<sup>わし</sup>アはア婆様より二十も下だが己<sup>おれ</sup>の割にすると婆さまは達者だ」

婆「達者では私<sup>わし</sup>無<sup>ね</sup>いだ、腰もつん曲るし役にも立たないで、夜になると眠くてのう」

百「あんたア立派な好<sup>い</sup>い嫁を貰つて、まだ孫が出来ないだねえ」

婆「まだ出来ないよ、あんたア子供は幾<sup>いく</sup>たり人<sup>たり</sup>有るだかなア」

百「私わしア二人でなア、惣領の姉に養子をしたゞが、養子は堅い人間だからまア宜よいですが、弟の野郎が十三になり奉公をすると云うので、それからまア深川の菓子屋へ奉公に行つてゐるだ」

婆「はえ、然そうかえ、もう十三だつて、早いもんだのう」

百「それで何だ、深川の猿子橋の側の田月たげつという大い菓子屋でかの家に奉公をしてゐるだが、時々まアそれ親が恋しくなると見えて、来て呉れといふので、私わしも野郎が厄介に成ると思つて、菜の有る時は菜を抜いて持つてツたり、また茄子なすや胡瓜きゅうりを切つて売うりに持つて行く時ゆにやア折々店へも行くだ、するとまア私が帰ろうと云うと後あとから悴つかあが出て来て、是は菓子とつの屑だから、父さま帰つたらお母つかあに食あわせて呉れ、こりやア江戸な菓子だと云つてよこすから

盗み物でア悪いぞと云うと、なに菓子屋じやア屑は無暗むやみに食うのだが、己おれア食いたくないから取つといて遣るのだと云つて己おらがにくれる、己も心嬉しいから持つて来て婆ばあに斯うくくと云うとなア、婆さま家の婆が悦びやアがつて、江戸なア菓子はえらく甘あめえつて悦ぶだア」

婆「はえーい感心な子だのう、親の為に食い物を贈る様な心じやア末が楽しみだアのう」

百「所がのう婆さま、忘れもしねえ去年中ちゆう、飛んだ目に逢つたゞ」

婆「はえーい何うしたゞえ」

百「何うしただつて婆さま、押込おしこみが這入はえつたゞ」

婆「はえーい何処どけえなア」

百「悴が行つてる菓子屋へ這入はえつたなア、こりやア何うも怖おっかなかつたつて、もう少しの事で殺される所だつてえ」

婆「はえーい」

五十四

百「まだ宵の事だと云うが、商あきゆうど人の店は在郷ざいじやうと違つて戸を締めても潜くぐりの障子が有るから灯火あかりが表から見えるだ、すると婆ばあさ様、其処そこをがらり明けて二人の泥坊はえが這入つて、菓子呉れと云いながら跡をびつたり締めて、栓を鎖かつてしまつたゞ、店には悴と十七八の若い者と二人居る処とけえ来て、声を立てると打斬ぶちきつてし

まうぞと云うから、忤も若い者も口が利けない、すると神妙にし  
 ろ、亭主は何処どこにいる、金は何処どこに有るか教えろ、声を出すと打  
 斬つてしまうぞと云うから何うも魂消たまげたねえ、それからなえ婆様、  
 這入はえった奴は泥坊で自分が縛られつけてるから人を縛る事が上手  
 で、すっかり縛つて出られないようにして、中の間まの柱くに繫くつて  
 置いて、然そうして奥の間へ這入はえると、旦那が奥の間で按摩取あんまとりを  
 呼んで、横になつて揉ませて居る其処そこえずつと這入はいつて来て、さ  
 ア金え出せ、汝われが家うちは大い構でかえの菓子屋で、金の有る事は知つて  
 る、さア出せ、ぐずぐずしやアがると抛よんどころなく斬つてしまうぞ、  
 さア金を出せと云うから、旦那は魂消たの魂消ないの、まるで旦那  
 は口い利かれない、只今上げますぐ命はお助け、命だけは堪

忍して呉れと云うと、命までは取らぬ、金さえ出せば帰るから金  
 え出せと云うので、其処そけえ蹲つくなんでもしたただ、するとお前めえ旦那  
 を揉んでいた按摩取がどえらい者で、其処そこに有った火鉢を取つて  
 泥坊の顔へぶつ投ほつた」

婆「はえい怖おっかないなア、うん、ぶつ投ほつて火事い出来でしたか  
 え」

百「なに火事はえでなえ、灰が眼に這入はつて、是アおはいと騒ぐ所  
 へ按摩取が一人で二人の泥坊を押えて、到頭町の奉行所へ突出つきたし  
 たと云うのだが、何と剛つえい按摩取じゃアないか、是でお前めえ旦那も  
 助かり、忤も助かつたゞ、それからお前、誠に有難い、お礼の仕  
 様がこないと云う訳で、物も取られず、怪我もせず斯んな嬉しい事



アないが、お前は何処なア按摩取だと云うと、私は是から五六町  
 先のとみかわちよう富川町にいて按摩取を致します、旅へ出てる中に眼悪く  
 て旅按摩に成りましたと云うから、何か礼をしたいもんだが何か  
 欲しい物はないか、金を遣やりましようと言うと、金は入りません  
 難儀を救うは人間のあたりまえ当あ然まで、私は何も欲しい物は有りません  
 が、富川町へ引越ひきこしてから家内が干物ほしものをする処が無いに困つて  
 る、私も草花すきが好だから草花でも植えてたのしみたいと思ふそれには  
 少ばかり許ばかりの地面と井戸が欲しいと思つて居りますと云うので、且那  
 は金持だから、それじやア地面を買つて遣ろうと云つて、井戸も  
 掘つて、茄子の二十本許ばかりも植える様にしてあて充あがつたゞが、何うも  
 彼の按摩取は只の人でなえ、彼の泥坊を押えるあんばい塩梅が只ではな

えと思つて旦那が聞いたら、元は侍だが仔細有つて坊様に成りまして、それから私が眼潰れましたが、だんく又宜く成りまして、只今では按摩取を致しますと云うから、何うも然うだんべえ、何でも只の人でなえと思つたツて、私もまあ一寸年始に行つた時見たが立派な武士で、成程只の按摩取でなえ、黒の羽織を着て、短い木刀を差して、然うして按摩をしたり、針をしたり何かするつて、針も中々えらいもんだつて、大變に流行るだ、何でもその按摩の名は一徳とか何とか云つたツて」

婆「はえーい元は侍だつて、何様な人だえ」

百「うん、何とか云つたツけ忘れた、ん、ん何よ元は榊原様の家来で、一旦坊様に成つてまた還俗したと云うが、何でもはア年

は四十二三で立派な男だ」

婆「はえーい然そうかなえ」

と話をして居ると、部屋に居ったお繼が突然いきなり飛出して来まして、  
 繼「おじさんお出いでなさい只今承うりました、元は侍で、一旦出  
 家に成りまして、また還俗致して按摩取に成つたと云うのは、名  
 前は何と申しますか、その人の額きずに疵きずが有りますか」

百「はい……おや巡礼どんが出掛けて来た」

婆「なにこれア己おらが孫だよ」

百「へえ婆さま、斯こんな孫が有つたかえ」

婆「少ちいさい時から他わきへ往つてたから、貴方あんたア知んなえが」

百「そうかねえ……額かぶに疵きずが有りますよ」

繼「じゃア年は何でございますか、四十ぐらいに成りますか」

百「え、然うさ、四十もう一二ぐらいであらうか」

繼「元は榊原の家来に相違有りませんか」

百「え、然ういう話だなえ」

これを聞くと山之助が出て来て、

山「只今蔭で承まわりましたが、その男は顔に疵がございまして、もとは侍で、一旦出家いたして、その還俗した者というお話でございしましたが、其の名前は水司又市と申しますか」

百「おや、く、く、また巡礼どんが」

婆「是も己おらがの孫だよ」

百「婆さま、お前めえはまあえらく孫が幾いくたり人も有るなア……然うだ、

己おらアもう忘れたが、アんたア云う通りの名前だつけ、あんたア宜く知つてるなア」

繼「それだよお婆さん」

婆「まあ然うかえ」

繼「本当だよ、観音様の御利益は有難いもの、本当に豪えらいもんだねえ」

百「えゝそりやア実に豪いもんで、もう少しで忤もぶち斬られる所だったが……後あとで泥坊をお調べになったら、一人は浪人者ごで極悪い奴だ、何とか云った、元は櫻井の家来で、それからばけものが化物てんすのような名前で、柳の木の幽霊、細い手の幽霊いや柳の木てんすに天水桶いおけか、うんそうじやない、浪人者は柳田典藏で、細い手と云

うのは勇治とかいう胡麻の灰という事が分つて、お処刑しおきに成ると云う話だ」

婆「……おいこれえ待てく、これえ待たねえか、汝われが二人駈出してても文吉が帰つて来ないば、向うは泥坊を生捕いけどるくれえな又市だから、汝が駈かん出してもか細い腕で遣りそこなつては成んねえが、これく待つちろ、文吉が帰つたら相談ぶつて三人で往いけよ……」

と云つたが敵に逃げられては成らぬと云うので富川町の斯々これく斯々と聞くや否や飛立つばかりの喜びで、是から直ぐすに巡礼の姿に成つて、苞つとの中へ脇差を仕込み、是を小脇に抱え込んで飛出し、深川富川町の按摩うちの家へ、山之助お繼が飛込みまして、愈々いよく猿

子橋の敵討に相成りますると云うお話になります。一寸ちよつと一ぷく。

## 五十五

引続きまする巡礼敵討のお話で、十八歳に成りまするお繼に、十九歳に相成りまする白島山之助が、互に姉の敵親の敵を討ちたいと、三年の間諸方を尋ねて艱難苦勞を致しましたる甲斐有つて、思わずも只今お百姓が来ての物語に、兩人は飛立つ程嬉しく思いますから婆アとめの留るのも聞入れけんそうずに見相けんそうを変え、振払つて深川富川町へ駈出します。すると暫くしばら経つて帰つたのは伯父の文吉でございばあます。婆は兩人が駈出してから立ちつ居つ心配して泣いて

騒いでも、七十を越した婆ばあさま様でございますから、只騒いで心配するばかり、何うする事も出来ません。

文「婆さま、今歸りました」

婆「おゝ文吉けえ歸ったか、己おらアまア心配ばかりして居ったが、何うもまア飛んだ訳に成ったゞよ」

文「何うしたゞえ、何時でも婆さまは仰山な事を云つて己おらア本當に魂たまげ消るよ、まア静かに」

婆「静かにたつて、お前めえ先刻茂左衛門うちが家へ来ての話に、敵の水司又市が深川の富川町で按摩取に成つてると云う事を話したゞ、するとお前、お繼も山之助も飛上つて、さア是から直すぐに敵を討ちに行くゆと云うから、待てえ、向うは泥坊を取つて押えるような豪えら



い侍だから、か弱い<sup>おめえ</sup>汝ら二人で駈<sup>か</sup>ん出して仕様がな、返り討にでも成つてアならねえから待つちろと云うのに、聞かないで駈ん出すから、己<sup>おら</sup>ア出て押えようと思つたら、突<sup>つきこか</sup>転して駈ん出すだ、追掛<sup>おつか</sup>けることも出来なえから、早く汝<sup>われ</sup>が歸らば宜<sup>よ</sup>いと心配ぶつて居たゞ、早く何うかして追掛けて呉<sup>おら</sup>んなよ」

文「こりやア困つたなア、それだから己<sup>おら</sup>が不断から然<sup>そ</sup>う云つて置くだ、二人で行つても屹<sup>きつとむこう</sup>度先方に斬られもんだ、よしんば斬られんでも怪我<sup>ど</sup>アするは受合<sup>ど</sup>いだアから、何んな事<sup>ど</sup>が有つても己<sup>ど</sup>を待つてる様に云うだ、婆様何故遣つたゞえ」

婆「何故遣るたつても遣らない様に仕ようと思つと、突<sup>つんの</sup>除けて行つて、留<sup>とめ</sup>ても留<sup>とめ</sup>らぬから仕様がないだ」

文「そりやア困つたなア……これ嘉かじゅう十手前てめえも一緒に行け、二人に怪我をさしては成んねえから、己おらも直ぐに行くだから、手前長ちやうく奉公して世話に成つたから一緒に行け」

嘉「敵討に行くだから一緒に行けつて、私わしい参りめえしよう、なに死んだつて構いませんよ、参りましょう」

と田舎の人は正直で親切でございますから、本当に死ぬ了簡と見えて、藻刈もがりがま鎌かつを担いで出掛けます。文吉も小長こながいのを一本差しまして、さつさと跡から飛出とびだして余程急ぎましたが、間に合いません。山之助お繼は富川町へ駈けて参りますると、其の頃は彼あすこ処こに土屋様の下屋敷しもやしきがあり、此方こちらにはまばらに人家が有りは有りまするが、只今とは違つて至つて人家の少ない時分でござい

ます。成程来て見ると茂左衛門の云つた通り入口が門もん形がたちに成  
 りまして、竹の打付ぶつつけの開戸ひらきどが片方かた明くいて居て、其処そこに按あんぷ  
 腹くもみりようじ揉療治ようじという標札ひょうさが打つてございます。是から中へ這入る  
 と左右が少し許り畠はらになつて、その横いけが生垣がきに成つて居ります  
 から、凡およそ七八軒奥ほうの方に家が建つて居まして、表かたの方は小さい  
 玄関様ようで、踏込ふみこみが一間ばかり土間に成つて居ります、又式台と  
 いう程では有りませんが上あがり口は板間いたのまで、障子が二枚立つて居  
 り、此方こちらの方は竹ほうの打付窓ぶつつけまどでございます。あの辺は四月二十七  
 日頃でももう蚊かやりが出ると見えて、夕景に蚊遣かやりを焚かいて居る様子、  
 庭の方を見ると、下らぬ花壇が出来て居りまして、其処けしに芥子けしや  
 紫陽花あじさいなどが植えて有つて、隣家となりも遠い所のさびしい住居すまいでござ

います。二人は窃つと藁苞の中から脇差を出して腰に差し、慄える足元を踏め《ふみし》めて此の家の表に立ちましたのは、丁度日の暮掛りますする時。

山「御免なさいまし、お頼み申します」

太「はい誰方え」

山「あの揉療治をなさる一徳さんは此方でございますか」

太「はい一徳の宅は手前だが何方だえ、此方へお這入んなさいまし」

繼「少々承まわりとう存じますが、一徳さんのお年は幾つでございますえ」

太「何だ障子越しに己の年を聞くと云うのは何だ……御冗談や調

弄らかいでは困ります、此方へお這入りなさい」

山「はい、あなたは何でございますか、額に疵がございますか」

太「何だ……左様でござる、手前は額に疵も有りますが、何方で  
げすえ」

山「え、元は榊原様の御家来で、お年は四十一でいらつしやい  
ますか」

太「なんだ……はい私わしの年まで知っていて、面部おもてに疵が有ると仰  
しやるのは何方どちらのお方でございますえ」

山「お名前は水司又市でございますか」

太「はい何方どなただえ」

と水司又市と云う名を聞くや否や山之助は一刀を抜くより早く、

がらり障子を明けながら、

山「姉の敵い……」

と一ひとこえ声一生懸命の声を出して無茶苦茶に切込んで来る。続い

てお繼が、

繼「おのれ親の敵覚悟をしろ」

と鉄切かなきりこえ声を出した時には不意を打たれて驚きましたが、

太「これ何を致す、人違ちがいをするな」

と云いながら傍そばに有りました今戸焼の蚊遣火鉢を取つて打付ぶつつけ

ると、火鉢は山之助とお繼の肩の間をそれて向うの柱に当つて碎

け、灰は八方に散乱する。また山之助の突掛つきかける所を引外ひっぱずして

釣瓶つるべ形の煙草盆を投付け、続いて湯呑茶碗を打付ぶつつけ小さい土瓶

を取つて投げる所を、横合よこあいからお繼ついでが、親の敵覚悟をしろと突掛けるのを身をかわ転して利腕きうでを打つと、ぱらり持っていた刃物を落し、是はと取ろうとする所を襟えりがみ上を取つて膝の下へ引摺寄せ、山之助は此所こゝぞと切込みましたが、此方こちらは何分手ぶらで居つた所、幸いお繼が取落した小刀しょうとうが有つたからそれを取つて、太「これ怪我を致すな、人違いを致すな、宜く心を静めて面体めんていを見ろ、人違いく」

と二三度打流したが、相手の方から無二無三に打つて掛るから、太「これ人違いを致すな」

と払い除けました、其の切尖きつさきが山之助の肩先に当たると、腕が利いて居る、余程深く斬込みました。

山「あア」

どんと山之助が臀しりもち餅をついたなり起上る事が出来ません、山之助が斬られたのを見るとお繼が

「わーっ」

と其の場に泣倒れました。

太「これ何処どこへ参つて居おるかな、これ照や、狼藉者が這入つたが、何処へ参つて居いるか、これ早く燈光あかりを持って参れ、燈光を……」

此の時女房は裏の井戸端で米を磨といで居りました。じゃくく、と米を磨いで居り、余程家うちから離れて居りますから、右の騒ぎは聞えませんでした。が、大声で呼びましたから、何事かと思つて慌あわて、家へ這入つて見ると右の始末、



照「おや何う…」

太「何うたつて今狼藉者が這入つたのだ、何分暗くつて分らぬから早く燈光を点<sup>つ</sup>けて来い」

と云われて、女房は慌てながら火打箱でかちくくく。

## 五十六

お照は火を打つ所が、慌てるから中々点<sup>つ</sup>かないのを漸<sup>ようよ</sup>うの事で  
蠟燭を点<sup>とも</sup>して、

照「何うしたの」

と見ると若い男が一人血に染つて倒れて居り、また一人の娘を

膝の下へ引敷いて居りますから。

照「こりやアまア何でございます」

太「何だつて今此の狼藉者が這入つたのだ：さこれ能く面よ体めんていを見ろ、人違いを致すな、己は人を害あやめた覚えも無し、敵と呼ばれて打たれる覚えも無い、これ面おもてを見ろ、心を静めて面を見ろ」

と云われたから、山之助が漸うに起上つて燈火あかりで顔を見ると、

成程年齢としごころは四十一二にして色白く、鼻筋通り、口元が締つて眉毛の濃い、散髪なでつけの撫付なでつけで、額こびんから小鬢こびんに掛けて疵きずが有りますなれども、能く見ると顔かおかたち形が違つて居ります故、

山「あゝ是は人違いをした」

と思うと、

太「何うじゃ、違つて居ろうな」

山「はい誠に申訳がございませぬ、全く人違いでございます」

照「人違いで敵だと云つて斬込むとは人違ひにも程がある、何ぼ年が行かぬと云つて、斬つてしまつた後で人違ひで済みますか、良人はお怪我は有りませんか」

太「そんな事を云わんでも宜い、早く其処らに散乱して居る火を消せ」

と云われて御新造が柄杓に水を汲んで蚊遣の火が落ちた処に掛けると、ちゆうぶうと云う大騒ぎ。此の時まで只泣いて居て口の利けぬのはお繼で、今燈火の影で山之助が血に染つて居る姿を見て、

繼「山之助さん確しつかりして下さいよ……全く人違いでございますから、何どの様ようにもお託わびをいたしますが、何卒どうぞお医者様を呼んでお手当を願います」

太「そりやア人違いと分れば手当もして遣ろうが、油断は出来ませぬ、ひよツとして又、何うもなア……全く人違いであろう」

山「はい」

太「左様か」

山「お年と云い、額の疵と云い、榊原の家来で水司又市様と仰しやいましたから、同じお名前故に取違えましたのでございます」

太「やア是ははや是ははや、私わしは水司又市じゃアない、私みづしは水島またいちろう太一郎 という者だが、按摩に成つてからは太一と申すが、其そ

方は水司又市を敵と狙うのか」

山「はい」

太「やアそれは気の毒千万な事を致した、うん、うん、姉の敵で、彼の者には親の敵だと、未だ年も行かんで親の敵姉の敵を討とうと云う其の志ある壯者を、怪我させまいと背打にする心得だつたが、困つた事を致したな、是やア不便な事を致した、手が機んだから、余程深傷のようだ、まアくくく待て」

と彼の按摩取太一が山之助の傷を見ると、果して余程深く切込みました。

太「こりやア機みも機んだので、迎も助かりそうは無い……まあこれ表の鎖鑰を掛ける、誰も這入つては来まいが、若し来ては

成らぬから締りをして参れ、これ誠に氣の毒な事だけれども、私も刃物で切込まれるから、已むを得ず氣の毒ながらも深傷を負わしたが、一体何う云う仔細でまア水司又市を敵と探す者か、此方は手負ておいで居るからせつない、これ娘お前泣かずに訳を云え」

繼「はい、私は越中の高岡大工町の藤屋七兵衛の娘繼と申しまする者でございですが、七年前あとに私の繼母まははと、つい前の宗慈寺と申す真言寺の永禪と申しまする和尚と不義そをして、然うして親共を薪割で殺して二人で逃げました、私は丁度十二の時で、何うぞ敵を討ちたいと心に掛けまして、三年前あとに高岡を出まして、巡礼を致して敵の行方を捜しました所が、更に心当りもなく、つい先達せんだつて江戸へ出て参りました、参つて伯父の処に厄介になつて

居りまする中うちに、この深川富川町に水司又市という人が有つて、元は榊原様の家来で家敷やしきを出て、一度頭髪たびあたまを剃り、又還俗げんぞくして按摩あんまをして居る水司又市と聞きました故、親の敵という一心で此方こちらへ斬込みましたのでございます」

太「成程お前の為には親の敵だ、またこれは姉の敵だと云つたな」

山「はいく」

と手負ておいに成りました山之助が、漸ようように血に染つた手を突いて首を擡もたげましたが、

山「はア旦那様誠に申訳もございません、私は其の永禪と申します者が還俗して、また元の水司又市と申します者が、此のお繼の一旦親に成りましたお梅と申す者を尼の姿やっに扮して、私の宅に

泊り合せ、私の姉に恋慕を云い掛けました所が、姉が云う事を聞かぬと云うので到頭姉を殺して逃げましたのが水司又市でござい  
ます、それから私は姉の敵を討ちたいと心に掛けまして、此のお  
繼と二人三年越し巡礼に成つて西国三十三番の札所を巡りまして、  
漸々よやくの事で今こんにち日只今敵に逢いましたと存じまして、是へ参つて  
承わりまして、貴方のお年は四十一歳、額に疵が有つて元は榊  
原の家来水司又市と仰しやいます故に善々よくお顔も見ずに踏込ん  
で斬掛けました不調法の段は幾重にもお詫を致します」

太「うん二人は兄弟か」

山「え、是は只今は私の女房でございます」

太「うん左様か、うん是は何うも誠に気の毒千万、えん、うん水



司又市あーア何うも彼奴あいつは兇悪な奴だ、今に悪事を重ねる事であるか、何う致してもなア、医者を呼んで手当をして遣ろうが、中々の深傷ふかでで有るて、なれども確しつかり致せよ、命数尽きざる中うちは何どの様な深傷ようでも、数十ヶ所縫う様な傷でも決して死ぬものじやアない、又万一療養相叶わずして相あいはて果る事があれば、後あとに残るは貴様の女房……二人が剣術も知らずに無暗むやみに敵を討とうと思つても、水司又市は中々の遣つかい手だから容易に討てやせぬ、手前も仔細有つて其の水司又市に逢わんければ成らぬ事が有るから、貴様が万一の事が有れば娘は自分の娘にして剣術も教え、貴様は己おやが過あやまつて殺したのじやに依つて、後々のちく愈々いよく又市を討つ時には己が力に成つて助太刀をして討たせるが、何か貴様申置く事があ

らば遠慮なく云えよ」

山「はい有難う、有難う、私は不調法から貴方に斬られて死ぬのは決してお怨みとは存じませんが、只水司又市にひとたち一刀も怨まぬのが残念でございませぬ、私の親と申しまする者は、元は榊原藩で貴方も御同藩なら御存じでいらつしやいませうが、十七年前に家出を致しまして、もう国を出ましてから十九年で、私が未だ生れぬ前に、江戸屋敷詰に成りまして、それから江戸屋敷から行方知れずに成りましたので、段々姉とふたり兩人でかみほとけ神仏に祈念して行方を捜しましたが、いまだに行方も知れず、生死の程も分りません、これお繼私のお父とつさま様の事もお前に話して有るが、若し御しやう存生でお目に掛る事が有つたらば、私は斯これ々の訳で不覺を取

つたが、何卒どうぞ一目お目に懸りたいと云つて居たと云つて下さい」

繼「はい、確かにしつしてお呉んなさいよ」

太「貴様が側で泣くと手負が氣力が落ちていかん……これお前の親は榊原藩で何という名前の人だえ」

山「はい私の祖父様じいさんがお抱えかに成りましたのだそうでございます  
が、足輕から段々お取立に成りまして、お目見得めみえ近くまで成りました、名は白島山平と申します者でございます」

太「え、何だ貴様の親は白島山平……何か貴様は白島山平の忰か」  
山「はい白島山之助と申します者で」

太「お、是は何うも、宥ゆるしてくれ、これ忰、貴様の親の山平は此の水島太一であるぞ」

## 五十七

山「えゝお父様とつさまあの貴方が」

と云つて二人ともに膝の上にすが縋り付く手を取つて、

太「あゝ面目次第もない、己が貴様の親だと云つて名告なのつて逢われべき者ではない、実に非義非道の親である、其の方がほう懐妊中に

江戸詰を仰おおせつ附つけられて江戸屋敷に居る間に、若氣の心得違いで

屋敷を駈落する程の心得違いの親、実に情ない事だ、親らしい事も致さぬ親を憎いと恨まんで、宜く臨終に至るまで手前に逢いたい懐かしいと遺言まで致してくれた、あゝ面目ないが、母もぼつ歿し

たか、うん、なに姉おやまも又市に討たれたか」

山「はい、有難う存じます、お懐しゆうございます、お懐しゆうございます、貴方にお目に懸りたいと云つて姉さんあねも何様どんなに待つておいでなすつたか知れませんが、貴方が家出をなさいましても屋敷おくに居られぬ事はございませぬが、お母さんつかは心配して三年目に亡なくなりました、私は少ちいさし姉さんも年が往いきませぬし、外ほかに致いたしたたしかた方かたがございませぬで、伯父さんが此方こつちへ引取ろうと云つて、

信州白島の伯父さんの厄介うちに成つて居ります中に、姉さんが又市の為きりころに斬殺あねさんされました、姉様が死にます時にも、お父様とつさまに逢あわずに死ぬのは残念だ、一目逢あいたいと申しました」

太「うん左様か、実にそれ程までに私わしを慕あこがつて、今思い掛おぼけなく

面会致したが、現在親の手で子を殺すと云うのは如何なる事か、皆これまで非道な行いを致した天罰しゅうばつ主しゅ罰ばつが酬むくい来きたつて斯この様ような訳、あゝ親として手前を己が殺すと云うのは実に情ない、手前己を親と思わずにひとかたな一刀でも怨んで呉れ」

山「いゝえ勿体ない事を」

照「あなた其そん様な事を仰しやつても仕様がございません……あの  
お前さん、初めてお目に懸りました、お前さんは定めてお父とつさん  
を憎いとお恨みでございましょうが、お父さんの悪いものではござ  
いません、みんな私が悪いのでございます、と申すは抛よんどころない訳  
で私がお前さんのお父とつ様を慕いまする故に、お父様がお屋敷を出  
る様な事に成りました、それも私の養子が得心で二人共にお屋敷

を出ましたけれども、永い旅を致して宿へ着くとは、国へ残してお出でなさった御新造やお前さん方に済まないと云つて、私も神みほとけに心の中でお詫ばかり致して居りました、何卒堪忍してお呉んなさい、お父様を怨まずに私を悪い者と恨んでお呉んなさいまし」

太「これ山之助今更懺悔を致す訳でも無いが、余儀なく屋敷を出んければならない訳に成つたのは、武田から来た養子の重次郎とひとつね同衾を致さぬと云う情を……立てる其の間に告口を致す者も有つて、表おもてむき向になれば名跡みょうせきが汚れるから重次郎の情で旅費を貰うて家出を致したが、丁度懐妊中の子をうみおと生落して夏という娘を得たから、漸く十五歳まで育つて楽しみに致した所が、三

年前あとに信州の鳥居峠へ掛る時、悪者に出逢い、勾引かどわかされんとする  
 時に、一刀とうを抜いて切結んだが、向うは二人こちら此方は一人、其の時  
 受けた疵が斯のように只今でも残っている、娘は其の時たにあい谷間へ  
 落ちて到頭其の儘に相果てたから、私も此のお照も実わしに一月つきばか  
 許りの間は愁傷して、泣いてばかり居つて、終ついには眼病と相成つ  
 たから、致いたしかた方かたなく按摩あんまに成つて揉療もみり治ようじを覚え、迎とても生涯世  
 に出る事は出来ぬと心得て居つた所が、追々眼病も快く成つて段  
 々見える様に相成つたから同じ死ぬなら故郷懐かしく、此の江戸  
 へ立帰つて、富川町に昨年世帯を持ち、相交らず按摩を致して居お  
 る内に、ようくの事で眼病も癒いへるような事なれども、揉療治を  
 致すような身の上に成つたから、若もし屋敷の者に見られては相成



らぬと申うて、屋敷近くへ参る事も出来ず、如何致そうかと照も心配致して、又々旅立を致そうか、但しは謝まつて信州の親族の処へ参ろうかと思つて居つた所で有るが、一人の娘を谷間へ落して殺したのも是も皆罰で、両人の者へ歎きを掛けるような事が身に報つたのだ、今また其の方を我手で殺すとはあーア飛んだ事、是も皆天の罰、こりやア頭髪を剃毀つて罪滅ぼしを致さんければ世に居られぬ」

照「誠に御尤もでございます」

山「お父様え、貴方も水司又市を捜す身の上と仰しやいましたが、何故あなたは水司又市に似た様な名をお付け遊ばした」

太「手前は何も存ぜんが、お祖父様は元信州の者で、故有つて越

後高田に近き山家<sup>やまが</sup>へ奉公住みを致して居ると、或日榊原公<sup>あるひ</sup>が山<sup>やまが</sup>狩<sup>り</sup>にお出遊<sup>いで</sup>ばして、鳥を追つて段々山の奥に入り、道に迷つて

御難儀の処へお祖父様が通り掛つて、御案内をして城中へお帰りに成つたから、うい奴と仰しやつて先<sup>せん</sup>君<sup>くん</sup>がお取立に成つた、是が私<sup>わし</sup>の先祖で、其の時は白島<sup>たいち</sup>太一<sup>いち</sup>という名前<sup>な</sup>で有つたが、山を平らに歩かせたという所から山平という名を下すつた、それ故先君から頂戴の名を大切に心得て名を汚<sup>け</sup>すな<sup>く</sup>くという遺言<sup>ごごん</sup>が有つたなれども、私は実に家名を汚す不孝不義の山平ゆえ、先代が頂戴の名を附けて居ては成らぬと云うので、信州水内郡の水と白島村の島の字を取つて苗<sup>みょう</sup>字<sup>じ</sup>に致し、これに父の旧名太一<sup>な</sup>を名告<sup>な</sup>つて水島太一と致したが、今と成つて見ると此の水島太一という姓名

を附けなければ斯の様な間違ひも有るまい、是も皆若い時分から  
の罪で斯う成るのであろう、あゝあ恐るべき事である、これ悴手  
前なア何うかして助けたいが、実は<sup>とて</sup>迎も助からぬ事と存じて居ろ  
うが、<sup>あとく</sup>後々の事には心を残さず往生致せ、縁有つて手前の家内に  
成つて居るお繼いという此の娘は私が引取つて劍術を仕込み、手前  
の為には姉の敵に当る水司又市を捜して<sup>きつと</sup>屹度敵を討たせるから、  
心を残さず往生致せよ」

山「はいくく有難うく、逢いたいくくと思うお父様とつさまにお  
目に懸り、お父様のお手に懸つて死にますれば何も心を残す事は  
ございません、これお繼い少しの間でも御厄介になつた伯父さんや  
お婆さんに何卒どうぞ宜しくお前云つてお呉れよ」

繼「はい山之助さん確しつかりして下さいよ、お前さんが死ねば私は此の世に生きて居おられませんか」

と山之助に取とりすが継つつて泣きまするから、堪こえ兼かねてお照も泣伏します。水島太一も膝の上に手を置くと、はらくくと膝へ涙が落ちる。すると台所の方から大きな声で

「御免なせえまし」

五十八

太「何だえ」

文「へえく真平御免を蒙ります」

太「何うも悔りする、誰だえ」

文「私わしは此こゝ処こゝにいるお繼ついでの實まことの伯父おぢいで百姓ひやくしやう文吉ぶんきちと申まをします、私は今日けふ他よそ処こゝへ行いつて先刻さつぎうち家うちへ歸かへると、敵討たけうちに行いつたと云いいますから、家の男おとこを連つれて駈かけて参まゐりましたが様子ようすが知しらない、其そ処こらで聞きくと此こゝ家うちだと云いうから、濟すまぬようだが窃そつと這こ入こつて、裏うらへ廻まわつて様子ようすを聞きいて居ゐりますと、人違ひとちがひいだくと云いう声こゑがするから、はてと思おもつて聞きいて居ゐりましたが、間違まちがひいとは云いいながら、少ちさい時とき分に別わかれたお前まへ様さまの子こ、それそれを貴方あなたが知しらないとは云いいながら、ららはア斬きつて殺ころすと云いうは、若わかい時とき分の罪つみだと懺悔ざんげする其そのの心こゝろ持もちて考かんえますと、我慢まんまんしようと思おもいましたがつい泣ないたでがんです、何なにうも飛とんだ間違まちがひいに成なりました、これ嘉十かじゅう、もう鎌かまなんざ

アぶつ放つてしまえ」

太「何うもお恥かしい事がお耳に入つて面目次第もございませぬ」  
文「何うか助かり様が有りませうか」

太「とて迎も助かりますまいとは存じますが、此の辺にあいにく生憎療治を致す者もござらぬ、手前少々は傷を縫う事も心得て居りましたが、  
つい歎きに紛れて……何しろしょうちゆう焼耐で傷口を洗ひましょう」

山「伯父様さん宜く来て下さつた」

と云う声もたえ／＼絶々でございますから、

太「しつ確かりしろ、今傷口を洗うぞよ」

と云う中うちに山之助は最もう目も疎うとく成りますから、片方かた／＼に山平の手を握り片方はお繼の手を握つて、其の儘山之助は呼吸は絶え

ましたから、お繼も文吉も声を揚げて泣倒れましたが、

太「幾ら歎いても致し方がない、私が親と知れてはぱつとして上

みやしき

屋敷へ知れては相成らぬから、何卒親でない事に致したい、そ

れにはお前方が確かな証人だに依つて、敵と間違えて斯様々々に

成つたと云う事を細かに訴えて検屍を受けんければ成らぬから」

と是から百姓文吉に山之助の女房お繼が証人で、直に細かに認

めて訴え出でましたから、早速検屍が出張に成つて傷口を改めま

したが、現在殺された山之助の女房と伯父兩人が証人で、全く人

違いで斯様な事に相成りましたと云うから、さしたる御咎もご

ざいませんで済みました。その跡の遺骸は文吉が引取りまして、

別に寺もありませんから小岩井村の菩提所へ葬むり、また山平

は伯父と相談して兎も角もお繼を引取り、劍術を仕込み、草を分けても水司又市を捜し出して親の敵を討たせんければ成らぬと、深川の富川町へお繼を連れて参り、これから山平の手許てもとに置いて劍術を仕込みます所が、親の敵を討とうと云う志の好いい娘でございますから、両親に仕えて誠に孝行に致します。またお照も山平も実の子の如くにお繼を愛します。是から竹ちくとう刀を買つて来て、間が有れば前の畑むしろに莖むしろを敷きまして劍術を教えまするが、親の敵姉の敵夫の敵を捜して、水司又市を討たんければ成らぬと云う一心でございますから、教えようも教え様よう、覚たえる方も尋常たゞでないから段々々と劍術が出来て腕も宜くなり、もし貴方を又市と心得まして斯う斬込んだら何うお受けなさると云うくらい、人の精



神は恐ろしいもので、段々山平でも受け兼ねる程の腕に成りましたから山平も喜びまして、

山「先ず追々腕も出来て来たか、  
なまびようほう生兵法は敗れを取ると云う  
たと譬えも有るから、ひよつと途中で水司又市に出遇つても一人で敵  
なのと名告つて斬掛ける事は決して成らぬ、相手の水司又市は今は何  
ようの様な身の上か知れんが、何でも腕の優れた奴だに依つて、決し  
なのりて一人で名告掛ける事は成らぬぞ」

と予て言付けて有ります。毎日々々朝は早く巡礼の姿で家を出  
 まして、浅草の観音へ参詣を致し、市中に立つて御詠歌を唄つて  
 は報謝を受けて帰り、月夜の時には夜になつても裏の畑に蕙を敷  
 いて一生懸命に剣術の稽古を致します。すると近きんじよ処では不思議

に思いまして、

○「あの按摩の家は余程うちよつほど變つてゐるぜ、巡礼の娘を貰つたとなア、妙な者を貰やアがったなア、でも腕は余程宜いいに違ちがひない無闇に劍術を教えるんだが、それも夜中にどんく初めやアがる、彼奴あいつは余程變り者もんだぜ」

と云う噂が高く成ります。丁度九月の節句の事でございましてお繼は例の通り修行に出て家うちに居りません。山平も別に用事が無いから、寛くわんいで居いる所へ這入はいつて来ましたのは、土屋様の足輕なかもむらぎゆうじ中村久治と申す人。

久「先生々々」

山「誰方どなたですえ」

久「え、中村久治でげす、さて先日は大きに」

山「え、貴方は先日急に御用で揉掛けになつて、まだ腰の方だけが残つて居りました」

久「いやもう私は酒は飲まず、外ほかに楽たのみも無いので、まア甘い物

でも食くひ、茶の一杯も飲のむくらいが何よりの楽たのみ、それに私はま

ア此この疝せん氣きが有あるので、疝せん氣きを揉もまれる心持こ持たは堪たえられぬて、湯

に這入こつてから横よこになつて疝せん氣きを揉もまれるのが何より楽たのしみだが、

先生せんせいは私の様ような者ものだからと思おもつて安やすく揉もんで下くださるんで先生せんせいは柔や

術じゆつ劍けん術じゆつも余よつ程ほどえらいと云いふことを聞きいて居ゐりますが、何なんうも普あ

通との先生せんせいでない、たしか去年こぞでげしたか、田月たつきという菓子屋や

で盜賊たうさくを押おえなすつたつて、私の屋敷やしきでもえらい評判へいばんでねえ」

山「なに出来やア致しません、幸いに泥坊が弱かつたから……これ照やお茶を上げろ……是やア詰らぬ菓子ですが、丁度貰いましたから召上るなら」

久「いやこれは有難い、先生の処はお茶は好し菓子までも下さる、有難いと云つて毎度噂を致します、何卒又少し療治を願いましよ  
うか」

山「え、お屋敷も御大藩ごたいはんでげすから、御家来衆も嘸多さぞい事でございましょうが、御指南番は何方どなたでげすえ」

久「なに杉村すぎむら内膳ないぜんと云つて、一刀流ではまア随分えらい者だ  
という事で」

山「へえ成程杉村内膳、柔術やわらは……うん成程澁川しぶかわりゆう流りゆうの小江田こえだ

というのが御指南番で、成程あれは老人だが余程よつほど澁川流の名人  
 という事を聞きました：成程して強い御家来衆も有る事でげしよ  
 うなア」

久「沢山ある上に其の上にもくと抱えるのは、全体殿様が武張  
 っていらつしやるので、武芸の道が何よりもお好すきでなア、先年此  
 の常陸ひたちの土浦つちうらの城内へお抱えに成りました者が有りまして、こ  
 れは元修しゆぎ行者ようじやだとか申す事だが、余程よつほど力量の勝れた者で、  
 何どのくらい力量が有るか分らぬという事で」

山「はゝア大した力量の有る者をお抱えに成りましたな」

久「え、お抱えに成りましたと云うのは、うだ宇陀のせんげんやま浅間山に北  
ようひこごろう條彦五郎という泥坊が隠れていて、是は二十五人も手下の者  
 が有るので、ごうりよく合いまわ力という名を付けて居廻りの豪家や寺院へ強  
うだん談に歩き、沢山な金を奪い取るので、何うもこりやア水戸笠間  
あら辺までも暴すから助けて置いては成らぬと云うので、城中の者が  
 評議をした、ところが何うも八州は役に立たぬから早川様が押え  
 ようという事になって、就きましては凡そおよ二百人も人数が押出し  
 ました押出して浅間山を十分に取巻いて見た所が、北條彦五郎は  
 岩穴の中に住んでいる、その穴の入口が小さくて、中へ這入ると  
 ずっと広くて、そこ其処に家うちを拵えて住居すまいとして居り、また筑波口の

方にも小さい岩穴が有つて、これから是れへ脱ぬけるように成つて  
 居るから、此方こちらの方を固めて居ても、此方の方から谷に下りて水  
 を汲んだり、或あるいは百姓家で挽割ひきわりを窃ぬすみ、米其ほかの外の食物を運ん  
 で隠れて居ります、さ、これでは成らぬと槍鉄砲を持つて向つた  
 所が穴の中が斯こう成つて、鉄砲丸だまが通らぬから、何様どんな事をして  
 もいかぬ、所でもう是こりやア水攻めにするより外に仕方が無いと  
 云つて、どん／＼水を入れて見ると、下へ脱ぬけて落おちる処ところが有るか  
 ら遂々とう／＼水攻みずせめも無駄になつて、何うしたら宜よろかろうと只浅間山  
 を多勢おおぜいで取巻いて居るだけじゃが、肝腎の彦五郎は裏穴から脱  
 けて、相変らず人を殺したり追剥おいはぎを為するので、これには殆ど重  
 役が困っている所に、一人の修しゆぎ行者ようじやが来て、あなた方は幾ら

此処こゝを取巻いて居ても北條彦五郎を取押える事は出来ません、殊に北條彦五郎は大力無双だいきぶそうで、二十五人力も有るといふ事だから、兎とてもいけぬに依つてお引揚げなさいと云うから、引揚げたら何うすると云うと、私一人わたくしに盜賊取押え方かたを仰付けられ、ば有難いと云うので、然らば修行者は何どのくらいな力が有るかと云うと、私は力が有ります、何うか盜賊取押えを仰付けられたいと云うから、段々評議をした所が、何せ今までのように頑張つていても出るか出ないか知れぬから、当人が取押えると云うなら遣やらして見ろという仰しやり付けで、これから其の修行者に取押えを言い付けた所が、其奴そいつのいうには手前の脊負しよつた笈おいに目方が無くては成らぬから、鉄の棒を入れるだけの手当を呉れと云うから、多分の



手当を遣ると全く金を取つて逃げる者でも無く、それから手当の金で鉄の重い棒を買い、笈の中へ入れて、彼の北條彦五郎の隠れて居るといふ穴の側へ行つて、其処へ笈を放り出して、勞れた振をして修行者が寝て居ると、ある月夜の晩に彦五郎の手下が穴の側へ見張に出て見ると、修行者が居るから、「これ何うした」

「私は歩けません」「何ういふ訳で歩けぬ」「道に勞れて歩けませんから、寝て居ります」と云うと、「此処に居ては成らぬから行け」「行くにも行かないにも荷物<sup>しよ</sup>が脊負えません」「脊負えぬなら脊負わせて遣ろう」と云うので手下の奴が動かそうとしたが中々動かぬから、こりやア何ういふ重い物だか、是を脊負うのは剛い者だといつて手下の者が皆寄つたが持てぬから「手前これを

脊負つて歩くか」「歩けますが、此の通り足を腫はらしたから仕様が有りません」と云うので足を出して見せると、巧うまく拵こしらえて膏藥を貼つて居て「これだから担かつげません」と云うから「手前てまえは何どのくらい力がある」「私わたくしは五十人力ある」と云うと、手下の奴が「そりやア嘘だろう」「なに嘘じゃアない」「いや嘘だ、嘘は泥坊の初まりだが、こりやア手前が嘘だ」「いや決して嘘でない」という争いになると、北條彦五郎が、なに此の位の物を脊負つて動けぬことが有るものかと云うので、連れんじやく尺せきを附けて脊負つて立ちやアがった、大力無双だいきむそうの奴だから、脊負つて立ちは立った所が歩けないで、やつとよじく、五六足あし歩くと、修行者が後うしろから突つ飛きしたから、ぐしやツと彦五郎が倒れると、恐ろしい目方の物

が上へ載つたから動きも引きも出来ない、すると修行者に首領が  
 打たれたと云うから、そりやアと鉦太鼓で捕人が行つて、手下の  
 奴を押えて吟味すると何処から這入つて何処から脱けるという事  
 まですつぱり白状に及んだから、ようくの事で浅間山の盜賊を  
 掃除したと云うので、是れから其の修行者は劍術も心得て居るだ  
 ろうから当家へ抱えろという事になつて、これまで 桜川の庵  
 室に居つたから 苗字を櫻川と云つて五十石にお抱えに成つたが、  
 知慧もあり劍術も出来て余程賢い奴だ、其の荷を拵えた工合は  
 旨いもので、動けない様にする工夫が巧いものじゃアないか」  
 山「へえ、それは全く修行者で、六部でげすか」

久「いや段々聞いたら何でも尋常の奴でない、人の噂でも何うも

尋常たゞもの漢でない、大かた長脇差では無いかという評判を立てたら、

当人がそんならお話をいたしますが、実は私は元は侍わしで、榊原藩  
でございまして云つたそうだが、面部かおに疵を受けた、総髪そうはつの剛えら  
い奴で」

山「それは何でげすか、名はなんと」

久「名は櫻川という処に居つた者で、櫻川又市と云う」

山「へえ桜川という処の者で」

久「いゝえ桜川の庵室に居つたから、それを姓として櫻川又市と  
いうので、面部かおに疵があり、えゝ年は四十一二で、立派な逞たくまし  
い骨ほねぶと太の剛い奴で」

山「左様でげすか、そりやア立派な者でげすなア、何うもその才

智もえらい者だが、私わしは何卒どうぞして其の方を見たいものでげすな」

久「なに、時々下屋敷へも来ますよ」

山「只今いずかたは何方いずかたに」

久「今は小川町おがわまちの上屋敷に居ります」

山「若もしお下屋敷へお出でになつたら一寸ちよつと教えて下さいません

か、何れいずそりやア尋常たゞもの漢では有りませんア、こりやア見たいな、

何ういう男か一度は見て置きたいが何うか一寸ねえ」

久「そりやア造作もない事だから知らせましよう」

山「じゃア一寸知らせて下さい、別にお礼の致し方は無いが、あ

なたの非番の時に無代療治たゞをして、好いい茶を煎いれて菓子を上げる

位の事は致しますから」

久「それははや、そんな旨い事は無い、こりやア有難いが、それは茶と菓子ばかりで療治の代を取らぬと云うこたア有りません、今度来たら屹度きつと知らせますが、滅多に此方こちらへは来ません」

山「何うか知らせて」

久「えゝ宜しい」

山「さア御療治」

と云うので療治を致して、旨い菓子などを食わせて帰しました。跡で山平は、

山「屹度それに相違ない、何うかして見頭みあわして遣りたいもの」

と、中村に頼んで櫻川の来るのを待つて居ると、天命免れのが難く、十月十五日に猿子橋でお繼でが水司又市と出遇あいますると云う、こ

れから愈々いよく巡礼敵討のお話でございます。

## 六十

さて図らずも白島山平が敵の手掛りを聞きましたから、お繼が帰つて来るのを待つて話を致すと、飛立つ程に悦び、

繼「少しも早く土屋様のお屋敷へ参つて」

と云うを、

山「いや未だ確しかと認めも付かぬうち、先せんの様に人違いをしては成らぬ、人には随分似た者もあり、顔に疵のある者も有るから、先せ達んだつての人違いに懲こりて、これからは善よく心こころを落着け、確と

面めんてい体を認めてから静かに討たんければ成らぬ、殊そちに汝は劍術が出来てもまだ年功がなし年も往いかぬから其の瘦やせうで腕とてでは逆も又市には及ばぬ、私わしも共に討たんでは成らぬ、殊にお照の為にはお兄あにいさまさまの仇あだであり、年頃心に掛けて居いる事ゆえ、お前一人で討つわけには往かぬに依つて、宜く心を静めて又市が下屋敷へ参る時に認めて、私が討たせるから」

と言い聞きけて置いきましたが、お繼は是を聞いてからは何卒どうか早く又市を見出したいと心得、土屋様の長屋下を御詠歌を唄つて日々窓から首を出す者の様子を窺うかゞいます所が、ちようど十月の十五日の日でございませす、浅草の観音へ参詣を致して、彼あれから下谷へ出まして本郷へ上あがり、それから白はく山さんへ出て、白山を流ながして御ごてん



殿坂ぎざかを下り、小石川こいしかわ極楽水ごくらくみず自証院じじょういんの和尚に逢つて、丁度  
 親父の祥月しょうつき命日めいにち、聊いさゝか志を出して、何うかお経を上げて下さ  
 いと云う。和尚も巡礼の身みのうえ上で聊かでも錢を出して、仏の回向えこう  
 をして呉れと云うのは感心な志と思ひましたから、懇ろねんごに仏様へ  
 回向を致します。お経の間待つて居りますと、和尚が茶を点いれ  
 たり菓子を出したり、また精進料理で旨くはないが、有あり合あいで馳  
 走に成りまして、是から極楽水を出まして、彼あれから壺岐いきどの殿坂の  
 下へ出て参り、水道橋を渡つて小川町へ来て、土屋様の下屋敷の  
 長屋下を御詠歌を唄つて、ひよつとして窓から報謝をと首を出す  
 者が又市で有つたら何ういたそうと、八方まなこへ眼を着けて窓まど下を  
 歩くと、十月十五日の小春風こはるなぎで暖あつたかいのに、すつぱり頭巾おもてで面

を隠した侍と、外ほかに二人都合三人連の侍が通用門を出まして小川町へかゝるから、顔を隠しては居るが、ひよつとしたら彼れあが又市ではないかと、段々見え隠れに跡を追つて参ります、なれども頓とんと様子が分りません。すると伊賀裏いがうらまで来ると一人の侍は別れ、後あとは二人になりました、

侍「あゝ大きに熱うございました」

と云う。これは成程熱い訳で、氣候がぽか／＼暖あつたかいに、頭巾を冠かむつていては堪たまらん訳でございます。やがて頭巾を取ると総そうは髪つの撫なで付つけで、額なでには斯たう疵あざがある、色黒く丈せい高く、頬こゝから頤こゝへ一い杯っばいに髯ひげが生ひえている遅たくまましい顔がん色しよくは、紛まれもない水司又市でございますから、親の敵と直すぐに討掛うちかかろうと思つたが、まだ

連つれの侍が一人居りますから、段々見え隠かくれに付いて参ると、浜はまちよう

町へ出まして、彼あれから大橋を渡りますると、また一人の侍

は挨拶をいたして別れ、御船蔵前おふなぐらまえへ掛つて六間堀の方へ曲りま

すと、水司又市は一人になりました、深川の元町へ掛つて来たか

ら最う我慢は出来ません。先へ通り抜けると、御案内の通り片かたか

側わは粩もみぐら倉で片側町になつて居りまして、竹細工屋、瀬戸物屋、

烟草屋たばこやが軒を並べて居り、その頃田月堂という菓子屋があり、前

町を出抜けて猿子橋にかゝりますると、此方こちらは猿子橋きわの際きわに汚い

足代あしろを掛けて、苦とまが掛つていて、粩倉ぬりなおの塗直し、其の下ねぼつに粘

土ちが有つて、一方には寸莎すさが切つてあり、職人も大勢這入つて

居るが、もう日が西に傾きましたから職人も仕事をしまいかけて

居ります、なれども夕日は一ぱいに映す。其の中に空は時雨で曇つて、少し暗くなりました所で、笠を取つて勿除け、小刀を引抜きながら、

## 繼「親の敵」

と名告りながらぴったり振冠つた時は、水司又市も驚いたの驚かないの、恟り致して少し後へ退る。往来の者も驚きました。人中で始まつたから、はあと皆後へ下りました。ちようど此の時白島山平は少しも心得ませんから療治を致して一人の客を帰した後で、茶を点れて一服遣つて居りますと、入口から年四十二三の色の浅黒い女が、半纏を着て居りましたが、暖かいから脱ぎまして、包へ入れて喘々して、

女「少しお頼みでございませうが、お手水場ちようずばを拝借致しとうござい  
ます」

照「はい其処そこは汚きたのうございませうが、何ならお上あがりなすつて」

女「いゝえ、汚ない処が心配が無くつて宜しゆうございませう」

とつかくと雪隠せつちんへ這入り頓やがて出て参つて、

女「あの少しお冷水ひやを頂き度たいもんでございませう、此処こゝに有るの  
を頂いても宜しゆうございませうか」

照「其処にも有りますが、汚のうございませうから、是れで……さ  
ア水を」

と柄杓で水を出すから、

女「有難うございませう」

と手に水を受けながら顔を見て、

女「おや」

照「おやまアお前はきんかえ」

きん「あら誠にお嬢様」

照「なにお嬢様どころではないお婆様ばあさんだよ」

きん「誠に暫く」

照「まア思おもい掛がけない……あの旦那様きんが」

山「なに」

照「あのそれ団子屋のきんが」

きん「おやく／＼あの山平様、誠に何うもまア貴方何う遊あそばしたかと存じて居りましたが、宜くまアそれでも……私わたくしは何うもお見掛

け申したお方だと考えて居りましたが、貴方の方がお忘れ遊ばさずいきんと仰しやつて下すつた」

照「私は彼あの時は元服前で見忘れたろうが、私は何うも見た様だ  
と思ひ、お前が口を利く声こゑ柄からで早く知れましたよ」

きん「誠に何うも思掛けない、まあ〜、旦那様御機嫌宜しゆう、  
何うしてね此処に入らツしやるのでございますえ」

山「はい長い間旅をして、久しく播州の方へ参つて、少しの間世せ  
帯たいを持つて居たり、種いろく々様々に流浪致し、眼病に成つてから故  
郷懐かしく、実は去年から此処へ来て世帯しよたいを持つて居る」

きん「何うも些ちつとも存じませんよ、尤も此方こちらの方へは滅多には参  
りませんけれどもねえお嬢様、あらつにお嬢様と云つて、あの御

新造様え、私の亭主の傳次と申します者は旅魚屋でございですが、  
商売に出ても賭博ばくちが好きで道楽ばかりして、女房を置去り同様音  
も沙汰もせずに居ましたが、旅魚屋の仲間の者が帰つて来て聞き  
ましたら、三年前あとに信州の葉広山とか村とかいう処で悪い事をし  
て斬殺きりころされたと聞きました、それとは知らず一旦亭主にしまし  
たから、私は馬鹿わたしが夫を待つという譬たとえの通り、もう帰るかと待つ  
て居りましたが、三年経つても音沙汰がない所へ、それを聞いて  
から、日は分りませんが私わたしもまア出た日を命日としまして、猿江さるえ  
のお寺へ今日お墓参りをして、其処に埋めた訳でも有りませんけ  
れども、まア志のお経を上げて帰つて来る道で、あなたにお目に  
懸るとは本当にまア思掛けない事でねえ」



照「本当にねえ、だがお前は矢張やっぱりあの上野町に居るのかえ」

## 六十一

きん「はい上野町に居りましたが、彼の近辺あ きんじよ うちは家がごちやくして居ていけませんし、ちようど白山に懇意おんいなものが居りまして、あちらの方はあの団子坂おんじの方から染井そめいや王子おうじへ行く人で人通りも有りますし……それに店賃たなちんも安いと申すことでございますから、只今では白山へ引越ひっこしまして、やっぱり団子茶屋おんじぢやをして居りますかねえ、何うも何でございますね、何うもつい此方こちらの方へは参りませんで」

山「じゃア何か屋敷の様子はお前御存じだろうが、武田や何か無事かえ」

照「あ、お父様やお母様はお達者かえ：今以て帰る事も出来ない身の上で」

きん「あの御新造様も大旦那様もお逝去になりました、それに御

養子はいまだにお独身で御新造も持たず、貴方がお出遊ばしてか

ら後で、書置が御新造様の手箱の引出から出ましたので、是は

親不孝だ、仮令兄の敵を討つと云つても、女一人で討てるもんじ

や無い、殊に亭主を置いて家出をしては養子の重二郎に濟まない、

飛んだことだと云つて御新造は一層御心配遊ばして、お神鬮を取

つたり御祈祷をなすつたりしました、それから二年半ばかり経

ちまして、御新造がお逝去になり、それから丁度四年ほど経って  
大旦那様もお逝去」

照「おやまア然うかえ、心得違いと云いながら親の死目にも逢  
われないのは皆な不孝の罰だね……私も家を出る時には身重だつ  
たが、翌年正月生れたんだよ」

きん「そうくお懐妊でしたね」

照「それが女の子で、旅で難儀をしながらも子供を楽みに何うか  
してと思つて、播州の知己の処へ行つて身を隠し、少しの内職を  
して世帯を持つていた所が、其処も思う様に行かず、それから  
又長い旅をして、その娘も十五歳まで育てたが亡なつたよ」

きん「へえお十五まで、それは嘸まア落胆遊ばしたでございま

しよう、お力落しでございませう御丹誠甲斐もない事でねえ」

照「まあ種々いろく話も聞きたいから少し……」

山「何だか表が騒がしいが何だ」

と云つて聞いて居ると、ばらくくくと人通りがして、

甲乙「なに今敵討が始まった、巡礼の娘と大きな侍ときりあい切合が始

まった、わーツ〜」

と云つて人が駈けて通るから山平は驚きまして、

山「これ何を、それ大小を出しな」

きん「何でございますえ」

山「何でも宜しいから大小を……きんやお前こゝ此処こゝに居て……お前居ておくれ、二人往いかなければならんから留守居をして」

金「何うなすつたんでございますえ」

山「何うなすつた所<sup>どころ</sup>じやア無い何うでも宜しいから早く」

とはれから裾<sup>すそ</sup>を端折<sup>はしよ</sup>つて飛出したが、此方<sup>こちら</sup>は余程<sup>よっぽど</sup>刻限が遅れて居ります。お話は元へ戻りまして、お繼が親の敵と切りかけました時は水司又市も驚いて、一間ばかり飛退<sup>とびしき</sup>つて長いのを引抜き、

又「狼藉者め」

と云うと往来の者はどやどや後<sup>あと</sup>へ逃げる、商人<sup>あきんどや</sup>家ではどか／＼と奥に居たものが店の鼻ツ先へは駈出して見たが、少し怖いから事に依つたら再び奥へ遁<sup>にげこ</sup>込もうと云うので、丁度臆病な犬が魚を狙うようにして見ている。四辺<sup>あたり</sup>は肅然<sup>しん</sup>として水を撒いたよう。

お繼は鉄切かなきりごえ声、親の敵と呼んで振冠ふりかぶつたなり、面体めんていも唇の色も變つて来る。然そうなると女でも男でも變りは無いもので、繼「私を見忘れはすまい、藤屋七兵衛の娘お繼だ、汝てまえは永禪和尚で、今は櫻川又市と云おうがな」

と云う其の聲がぴんと響く。その時に少し後あとへ下さがつて又市が、又「何だ覚えはないわ、左様な者でない」

とは云つても覚えが有るものでございますから、其所そこは相手が女ながらも心に怯おれが来て段々後へ下る。すると段々見物見物の人が群たかつて、

甲「何でげす」

乙「今私は瀬戸物屋へ買物に来て見ていると、だしぬけに親の敵

と云うから、はツと跡へ下ろうと思つと、はツと土瓶を放したから、あの通り石の上へ落ちてこわ毀れてしまいました、あゝ驚きました、何うも彼の娘あでげすな」

甲「へえ彼の娘が敵討だと云つて立派な侍を狙うのですか、感心な娘で、まだ十七八でい美しい女だ、今は一生懸命に成つてるから顔つきが怖いが、彼れあが笑えば美しい女だ」

乙「へえ、それは感心、あゝ云う巡礼の姿に成つて居るが、やつぱり旗はたもと下のお嬢様か何かで、劍術を知らんでは彼のあ大きな侍に切掛けられアしない、だが女一人じゃア危ないなア、誰か出れば宜いいなア」

丙「危ないから無闇に出る奴は有りやアしません」

甲「だって向うは大きな侍、此方こつちはか弱い娘で……あゝけんのんだ」

と見物がわい／＼と云う。

丙「おい早く差配人おおよさんへ知らせろ」

丁「おれの差配人さんでは間に合わない、何処どこの差配人さんへ然そう云うのだ」

丙「差配人さんが間に合わぬなら自身番へ知らせろ……あッあゝ……危ねえ／＼敵討は何とか云いましたか」

乙「何と云ったか聞えやアしない」

乙「何とか云ったツけ、汝なんじを討たんと十八年」

甲「何を云やアがる騒々しい喋しゃべつちやアいけねえ」



丙「あゝ危ねえ〜」

と拳こぶしを握つて見ている、人は人情でございますから、何うぞして娘に勝かたせたい、娘に怪我をさしたくないと見ず知らずの者も心配して、橋の袂たもとに一抔人が溜たまつて居りますが、中々助太刀に出る者は有りません。

甲「向うに侍が二人立つて見ているが、彼奴あいつが助太刀に出そうなもんだ、何だ覗いて居やアがる、本当に不人情な侍だ、あの畜ちぎし生打擲ようぐんなくれ」

とわい〜云う中うちに、

繼「親の敵思い知つたか」

と一ひとあし足踏込んで切下きりおろすのを、ちやり〜と二三度合せたが、

一足さが下つて相上段あいじょうだんに成りました。よく上段に構えるとか正せい眼んにつけるとか申しますが、中々劍術の稽古とは違つて真劍で敵を討とうという時になると、只斬ろうという念より外ほかはごさいませんから、決して正眼だの中段などという事はない、唯双方相上段に振上げて斬ろうくと云う心で隙すきを覘うかがう、水司又市も眼まなこは血走つて、此の小娘こあま只一撃うちと思いましたが、一心凝こつた孝女の太刀筋ちすじ、此の年四月から十月まで習つたのだが一生懸命と云うものは強いもので、少しも斬込む隙がないから、此奴こいつ中々劍術が出来る奴だなど思い、又市も油断をしませんで隙が有つたら逃げようかなんと云う横着な根こんじょう生しょうが生まして、後あとへ段々さが下る、此方こちらも油断はないけれども年功がないのはいかぬもので、段々呼吸遣いきづかい

が荒くなつて<sup>つか</sup>勞れて来るから最早死物狂いで、

繼「思い知つたか又市」

と飛込んで切込むのを丁と受け、引く所を附け入つて来るから、

ひとあし ふたあし

一足 二足 後へ下ると<sup>そば</sup>傍の<sup>ねぼつち</sup>粘土に片足踏みかけたから危うい

<sup>あおむけ</sup>

かな仰向にお繼が粘土の上へ倒れる所を、得たりと又市が<sup>ふりかぶ</sup>振冠

つて一<sup>ひとうち</sup>打に切ろうとする時大勢の見物の<sup>がんしよく</sup>顔色が變つて、

見物「あゝ」

と思わず声を上げました。

見物「あゝ危ねえ、誰か助太刀が出そうなものだ」

と云つて居るが、たれ誰も出る者はない。すると側に立つて居たの

は左官のさいとり宰取で、つつつぽ筒袖の長い半纏をかたはしおり片端折にして、ふたえま一二重

わ廻りの三尺をじやく締め、洗ざらい晒しためくらじま盲縞の股引をたくし上げて、

はだし跣足で泥だらけの宰取棒を持つて、怖いからあと後へ下つて居たが、

今鼻の先へ巡礼が倒れ、大の侍がふりかぶ振冠つて切ろうとするから、

人情で怖いのを忘れて、宰取棒で水司又市の横つらつ面をぽんと打ぶつ

た。

見物「あゝそら出た〜助太刀が出た、だれ誰か出ずには居ないて、

何うも有難やっうございます、いゝえ中々一人では討てる訳がない、

あれは姿をきつ※して居ても、はたもと屹度旗下の殿様だ、有難い〜」

と喜び、わア〜と云う。又市は横よこ面つらを打たれるとべつた  
 り顔に泥が付いたが、よもや斯ういう者が出ようとは思わぬ所だ  
 から、是れに転動てんどうしたと見え、ばら〜〜〜と横手へ駈出  
 した。すると宰相は追掛おっかけて行つて足を一つ打ぶ払ばらうと、ぱた〜  
 り倒れましたが、直ぐに起上ろうとする処を又ま打ぶちますと、眉み  
 間先けんさきからどつと血が流れる。すると見物は尚わい〜云う。

見物「そら逃げた殴れ〜」

と云う奴があり、又石を投げる弥次馬が有るので、又市は眼めが  
 眩くらんで、田月堂という菓子屋へ駈込んだから菓子屋では驚きまし  
 た。店の端先はなさきへ出て旦那もお内儀かみさんも見ている処へ拔身ぬきみを提さげた  
 泥だらけの侍が駈込んだから、わツと驚いて奥へ逃込もうとする

途端に、蒸ふかしたての饅頭まんじゅうの蒸籠せいろうを転覆す、煎餅せんべいの壺かまが落ちる、今いま坂さかが転がり出すという大騒ぎ。商人あきんどの店先は揚板あげいたになつて居て薄縁うすべりが敷いてある、それへ踏掛けると天命とは云いながら、何う云う機はずみか揚板はずが外れ、踏外ふみはずして薄縁うすべりを天窗あたまの上から冠かぶつたなりどんと又市は揚板の下へ落ちる、処へ得たりとお繼は、

繼「天命思い知つたか」

と上から力に任して抉こじつたから、うーんと苦しむ。すると嬉しがつて左官の宰取が来まして

宰取「この野郎く」

と無闇に殴る処へ、人を分けて駈けて来たのは白島山平。

山「巡礼の娘お繼と申す娘は何処どこに居りますか」

繼「あゝお父様とっさま」

山「おゝくゝく討ったか」

繼「お父様宜く来て下さった」

山「それだから申さぬ事じゃア無い一人で……怪我は無いか」

繼「いゝえ怪我は致しませぬ、首尾よ好く仕留めました」

山「あゝそれは感服、敵の又市は何処どこにいる」

繼「縁の下に居ります」

山「縁の下に……じゃア縁の下へ隠れたか」

繼「いゝえ只今落ちましたから其処そこを上から突きましたので」

山「うん然そうか、やい出ろ」

と髻たぶさを取つてずるくと引出しますと、今こじられたのは急所の深手、

又「うーん」

と云うと田月堂の主人はあるじべたくくと腰が抜けて奥へ逃げる事も出来ません。山平が是を見ると、地面まで買つてくれた田月堂の主人が鼻の先に居るから、

山「これは何うもお店を汚けがしまして何とも、御迷惑でございませうが、これは手前娘で、先達せんだつて鳥渡ちよつとお話をいたしました、な、が全く親の仇討あだうちに相違ちがひございません、委くわしい事は後でお話を致しますが、決して御迷惑は懸けませんから御心配なく」

と云つたが田月堂の主人は中々口が利けません。



田月の主「え…あ…うん…うんお立派な事でございます」

と泣声を出してやつと云いました。

山「さア是れへ出ろ、これへ参れ…これ見忘れはせぬ、大分だいぶんに  
 汝うぬも年を取ったが此の不屈者め、汝てまえが今まで活いきているのは神しんぶ  
 仏つがないかと思つて居た、この悪人め、汝てまえは宜くも己の娘のお  
 やまを、先年信州白島村に於て殺せつがい害して逐電致したな、それに  
 汝は屋敷を出る時七軒町の曲り角で中根善之進を討つて立退たちのいた  
 るは汝に相違たしかない、其の方の常々持つて居た落書らくがきの扇子おうぎが落ち  
 て居たから、確たしかに其の方と知つては居れど、なれども確かな証しょうが  
 ないから其の儘打捨ておかれたのであるが、少女に討たれるくら  
 いの事だから、最早どうせ其の方助かりはしない、さア汝も武士

だから隠さず善之進を討つたら討つたと云え、云わぬ時に於ては  
ごぶだめ五分試しにしても云わせる、さア云わんか」

おもてと面を土に摺すり付けられ苦しいから、

又「手前殺したに相違ござらん」

と云うのが漸やっと云えた。

山「繼、予かねて一人で手出しをしては成らぬと云つて置いたが、お  
 前一人で此こ奴を宜く討つたな」

繼「はい此こ処においでなさいますお方様が、私が転びまして、も  
 う殺されるばかりの処へ助太刀をなすつて下すつたので、何卒どうぞ此  
 のお方様にお父とつさま様お礼を仰しやつて」

山「うん此のお方が……何うもまあ」

宰取「はアまことに何うもお芽出度うございます、なに私は側に  
 立っていて見兼たもんですから、ぽかり一つ極ると、驚いて逃げ  
 る所を又打殴ったんだか、まア宜い塩梅で……お前さんは此  
 の方のお父さんで」

山「え、何うも恐入りました、只今は然ういうお身形だが、前  
 々は然るべきお身の上のお方と存じます、左もなくて腕がなけ

れば中々又市を一撃にお打ちなさる事は出来ぬ事だな、え、御尊  
 名は何と仰しやるか必ず然るべきお方でございませう」

宰取「うーん、なに私は弥次馬で」

山「矢島様と仰しやいますか」

宰取「うん、なに矢島様じゃアねえ、只私は見兼たからぽかり極

めたので……お前さん親の敵だつて親が在るじやアねえか」

山「いやこれは手前養女でござる、実父は湯島六丁目の糸問屋  
藤屋七兵衛と申す、その親が討たれた故に親の敵と申すので、只  
今では手前の娘に致して居ります」

宰取「え、藤屋七兵衛、おい、それじやア何か、妹のお繼か」

繼「あれまア何うも、お前は兄さんの正太郎さんでございますか」

六十三

正「お、正太郎だ……何うも大きくなりやアがった此畜生、  
親父は殺されたか……え、なに高岡で、然うか、己ア九才の時

別れてしまったから、顔も碌ろくそつぽう覚えやしねえくれえだから、  
 手前は猶覚えやアしねえが、己おれが此処こゝへ仕事しごとに來ていると前まえへ転めえ  
 んだから、真ほんの弥次馬やじうまに殴うつたのが、丁度おやじ親父おやじを殺ころした奴やつを打ぶ  
 殴うると云うなア是が本ほん当とうに仏様ぶつさまの引合ひきあせで、敵討かたうちをするてえの  
 は……何う云う訳わけなんです」

山「訳を申せば長いことでござる、予かねて噂うわさに聞きましたがお前まへが正  
 太郎さたん様さまで、葛西かさいの文吉殿ぶんきちのどのの方に御厄介ごやくけいに成なつていらした」  
 正「え……彼あれは叔父おじで……お繼ついで、何か小岩井こいわいのお婆おばさんの処とけえ  
 行いきてえから、お婆おばさんに己おれの詫言わびごと言いして呉まんねえ、父ちやんの敵かたを討うち  
 つ助すけ太刀たをしたと云う廉かどで詫言わびごとをして呉まんねえ、己おらもう腹はら一杯いっぱい  
 借かり尽つくして、婆おばさんも愛想あいそが尽つくきて寄よせ附つけねえと云うので、己おれ

も行ける義理は無えからなア、土浦へ行つて燻ぶつて居たが、その中に瘡は吹出す、歸る事も出来ず、それからまア漸との事て因幡町の棟梁の処え転がり込んだが、一人前出来た仕事も身体が利かねえから宰取をして、今日始めて手伝に出て、然うして妹に遇うと云うなア不思議だ、こりやア神様のお引合せに違え無え、何うも大きく成りやアがったなア此畜生、幼せえ時分別れて知れやアしねえ、本当に藤屋の娘か、おい立つて見や……これを  
お前さんのとこの子にしたのか……一廻り廻れ」  
などと云う。

山「誠に是れは思掛けないことで、何うもその死んだ七兵衛殿のお引合せと仰しやるは御尤もなこと、実は私の悴山之助と申す者

と三年前から巡礼を致して、長い間旅寝の憂苦勞を重ね、漸く  
今日仇を討ちましたが、山之助は先達て仔細有つて亡なりました、  
それ故に手前悴の嫁故引取り娘に致して、手前が劍術を仕込みま  
して、何うやら斯うやら小太刀の持ち様も覚える次第、まことに  
思掛けないことで、葛西の文吉様にもお世話に成りましたから、  
手前同道致してお詫言に参りましようが、まア兎も角も敵の……  
えゝ人が立つて成らぬなア」

正「私が一太刀」

山「いや、お前はお兄様でも初太刀は成りません、お繼は七年こ  
のかた親の仇を討ちたいと心に掛けましたから、お繼が初太刀で、  
お前は兄様でも後ですよ」

正「兄でもからもう面目次第しでえもねえ、じやア後で遣やつ付けやしよ  
う、此こん様な嬉しい事アござえやせん……何でえ然そう立つて見やア  
がんな、彼方あつちへ行け、何だ篋べらぼう棒めえ己は弱虫で泣くのじやアね  
え此ん畜生……早く遣やつ付けて」

山「なアに早く遣やつつ付けろと仰しやつても、長く苦痛をさして緩ゆる  
りと殺すが宜いい」

繼「これ又市見忘れはすまい、お繼だ、よくも私のお父とつさま様を薪  
割で打殺して本堂の縁の下へ隠あまつさまはし、剩まえ繼母はを連れて立退たちき、  
また其の前に私を殺そうとして追掛おつかけたな」

と続けて切ります。

山「さアく照やお前も」



照「はい、兄の敵又市覚悟をしろ」

と切る。

山「さア、今度は私に遣らしてくれ、可愛い忤が不便の死を遂  
 げたも此奴の為、また娘を斬殺したのも此奴の業、此奴めく」  
 と四つ角で鮪を屠すようである。

山「さア兄様だ」

正「今度ア私の番だ、此ん畜生め親父を殺しやアがつて此ん畜生  
 め」

と鑊で以て竈の繕い直しをするようにさん／＼殴つてこれか  
 ら立派に止めを刺す。其の中に諸方から人が出て捨て、も置かれ  
 ぬから、お繼と山平は直様自身番へ参りまして、それより細や

かに町奉行へ訴えに成りましたが、全く親の敵討と云う事が分り  
 まして、殊に悪事を重ねましたる水司又市でございますから、別  
 段にお咎とがめも無く此の事が榊原様のお屋敷へ聞えました所から、白  
 島山平並ならびにお照は召返しの上、彼かのお繼は白島の家の養女になり、  
 後に養子を致して白島のちの名みょうせき跡しを立てますと云う。また左官の  
 正太郎は白島山平の手蔓てづるから正しょうどう道の者しで有ると榊原様へお抱  
 えになり、後には立派な棟梁となり、正太郎左官と云われて、下  
 たやかやちようた谷茅町の横よこちよう池いけの端はたへ出ようと云う処あだに、つい十一二年  
 前まで家も残つて居りました。目出たく親の仇あだを討ちまして家栄  
 えますると云う、巡礼敵討の物語は是が結局でございます。

(拋小相英太郎速記)





## 青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の二」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年7月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の二」春陽堂

1927（昭和2）年12月25日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

入力：小林繁雄

校正：松永正敏

2005年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 敵討札所の靈験

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>